秋田県文化財調査報告書第280集
払田柵跡調査事務所年報１９９７

払田柵跡

―第110次～112次調査概要―

秋田県埋蔵文化財センター

１９９８・３

秋田県教育委員会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

払田柵跡

（ほったのさくあと）

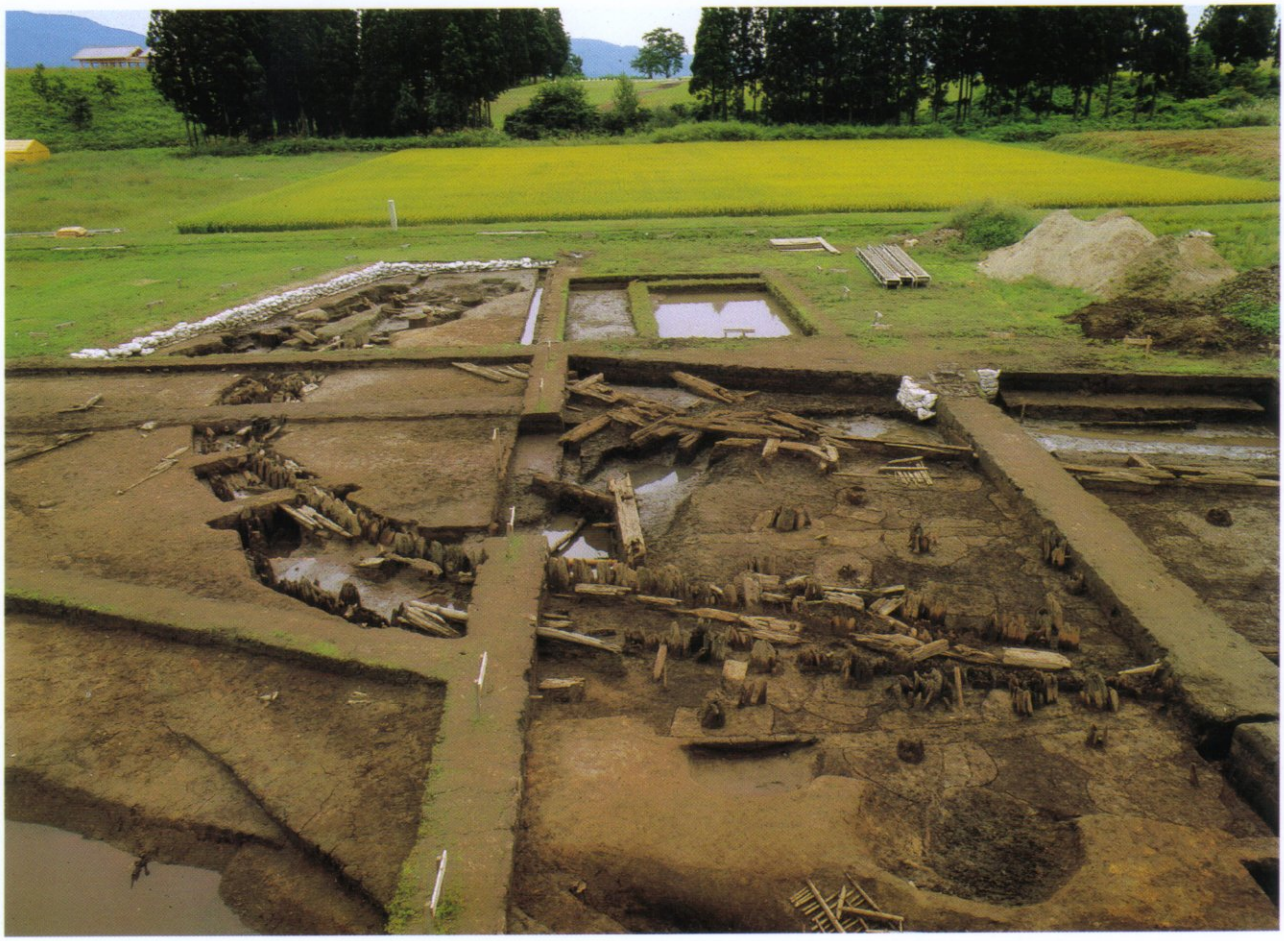
— 第110次～112次調査概要 —

1998・3

秋田県教育委員会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

1　外郭北門（南から）

2　外郭北門南側西２Ｄ期柱（南西から）

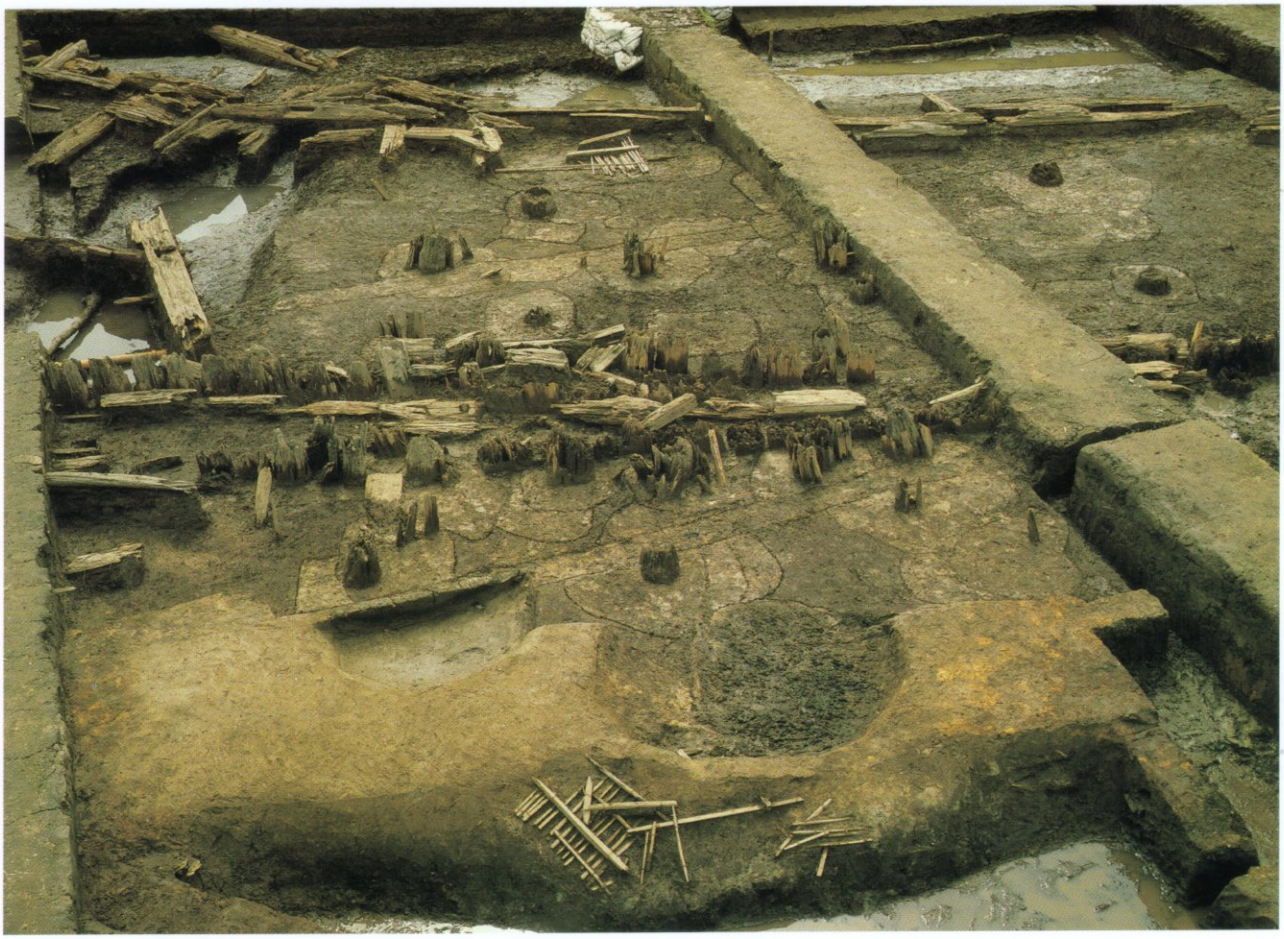


1　外郭北門と角材列、櫓状建物（北から）

2　外郭北門から北西へ延びる角材列（南から）

1　外郭北門北西隅柱付近の角材列（東から）

2　角材列、櫓状建物と木道（東から）



1　櫓状建物（北から）

2　角材列、櫓状建物と木道（南から）

序

国指定史跡払田柵跡は、管理団体である仙北町による環境整備も順調に進捗し、遺跡を訪れる方々も年とともに増加していることは喜びに堪えないところであります。

平成９年度の調査は、第５次５年計画の４年次にあたり、外郭北部区画施設の調査を３地区で実施しました。

第111次調査は、外郭北門の再調査で、従来２期とされていたこの門が、他の３門と同様に４期にわたって造営されていることを確かめることができました。

第112次調査は、平成７年度から開始した外郭線区画施設の調査の一環で、昨年に続き、外郭北門の西部において、角材列とそれに伴う櫓状建物や溝、木道などを検出しました。これによって、外郭北門を中心とする様相が明らかになるとともに、多くの木製品や絵馬、木簡、墨書土器など貴重な資料が得られました。

本書は以上のような成果を収録したもので、古代城柵官衙遺跡の研究上、資するところが大きいと考えますので、ご活用いただければ幸いと存じます。

最後に、調査ならびに本書作成にあたって御指導・御助言を賜りました、文化庁、奈良国立文化財研究所、国立歴史民俗博物館、宮城県多賀城跡調査研究所、秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所に心から感謝申し上げるとともに、史跡管理団体仙北町、同教育委員会、千畑町教育委員会、ならびに土地所有者各位の御協力に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成10年３月

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

所長　吉田清耕

例　言

1　本書は秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が平成９年度に実施した、第110次～112次調査の概要報告である。本書の作成、編集は当事務所文化財主査児玉準が行った。

2　調査に当たり、調査研究の顧問である秋田県立博物館新野直吉館長、国立歴史民俗博物館情報資料研究部長岡田茂弘教授から御指導いただいた。

3　木簡の釈読は、国立歴史民俗博物館歴史研究部平川南教授、秋田大学教育学部熊田亮介教授に依頼し、平川南教授から玉稿をいただいた。文中の、兵庫県高砂市塩田遺跡出土墨書土器の写真は、高砂市教育委員会から提供を受けた。木簡の赤外線写真及び外形写真は児玉が撮影した。

4　第110・112次調査における外郭線角材の年輪年代測定と、第111次調査における外郭北門の柱の樹種鑑定は、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター光谷拓実発掘技術研究室長に依頼した。

5　実測図は国土調査法第Ｘ座標系を基準に作成した。実測図及び地形図中の方位は座標北を示し、磁北はこれよりＮ７°30′00″Ｗである。詳細は『払田柵跡調査事務所年報1977』を参照されたい。

凡　例

1　土色の記載については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖　1989年版』を参考にした。

2　遺構には下記の略記号を使用した。

ＳＡ　角材列、　ＳＢ　掘立柱建物跡、　ＳＤ　溝、　ＳＫ　土坑、　ＳＸ　木道・その他の遺構

3　櫓状建物跡の模式図には下記の記号を用いた。

柱掘形のみが検出されたもの　○

柱が検出されたもの　◉

重複により検出されないもの　◌

角材列　□□□□□□□□□□□□

4　遺構・遺物の挿図には、下記のスクリーントーンを使用した。

火山灰　整地層　内面黒色処理　漆

払田柵跡調査事務所年報 1997

目　次

序

例言・凡例

第１章　はじめに …… 1

第２章　調査計画と実績 …… 3

第３章　第 110 次調査 …… 6

第４章　第 111 次調査 …… 10

第５章　第 112 次調査 …… 22

第１節　調査経過 …… 22

第２節　検出遺構と遺物 …… 29

第３節　小　結 …… 60

第６章　調査成果の普及と関連活動 …… 65

報告書抄録 …… 66

図　版

付編　　払田柵跡第112次（外郭北門西北部）調査木簡

第1章　はじめに

払田柵跡は秋田県仙北郡仙北町払田・千畑町本堂城回にある。遺跡は雄物川の中流域に近く大曲市の東方約6㎞、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置し、第三紀硬質泥岩からなる真山、長森の丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川（烏川）、南側を丸子川（鞠子川）によって挟まれた低地に立地する。

1902・3（明治35・36）年の千屋村坂本理一郎による溝渠開削の際や、1906（明治39）年頃から開始された高梨村耕地整理事業の際に発見された埋もれ木が、地元の後藤宙外・藤井東一らの努力によって歴史的遺産と理解され、遺跡解明の糸口が開かれた。1930（昭和5）年3月、後藤宙外が調査を実施し、さらに同年10月、文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われて遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、1931（昭和6）年3月30日付けで秋田県最初の国指定史跡となり、1988（昭和63）年6月29日付けで史跡の追加指定がなされて現在に至っている。史跡指定面積は894,600㎡である。

1970年代になって、指定地域内外の開発計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町と協議の上、この重要遺跡を保護するための基礎調査を実施して、遺跡の実態を把握することを目的に、1974（昭和49）年、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した。さいわい、地元管理団体仙北町および地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。

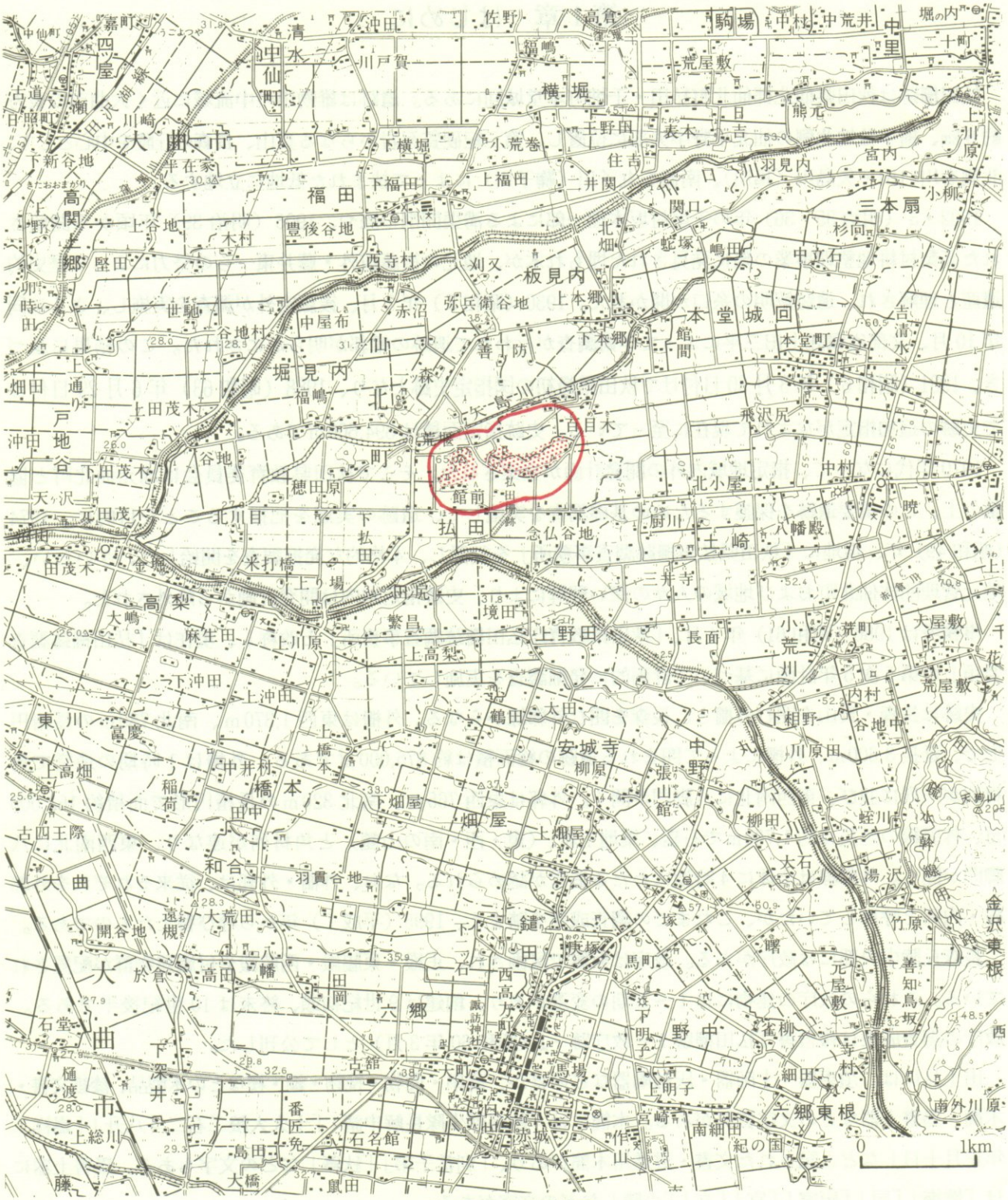
事務所は1986（昭和61）年4月、「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称し、現在は「払田柵跡調査要項」の第5次5年計画に基づいて計画的に発掘調査を実施している。

史跡は長森・真山を囲む外柵と、長森を囲む外郭線からなる。外柵は東西1,370ｍ、南北780ｍの長楕円形で、延長3,600ｍ、外柵によって囲まれる遺跡の総面積は約875,000㎡である。外柵は1時期の造営で角材列が一列に並び、東西南北に八脚門が開く。外郭は東西765ｍ、南北320ｍの長楕円形で面積約163,000㎡、外郭線の延長は約1,760ｍで石塁、築地土塀、（東・西・南の山麓）と角材列が連なり、東西南北に八脚門が開く。外郭線は全体に4時期にわたる造営が認められる。なお、外柵・外郭は、従来それぞれを外郭線・内郭と呼称していたが、これまでの調査成果を踏まえ、1995（平成7）年から呼び替えたものである。

長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの政庁の建物にはⅠ～Ⅱ期の変遷があり、創建は9世紀初頭、終末は10世紀後半である。政庁の調査成果は報告書『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』（昭和60年3月）として公刊した。

出土品には、須恵器・土師器・灰釉陶器などのほか、斎串・曲物・挽物・鋤・楔などの木製品、漆紙文書・木簡・墨書土器などの文字資料がある。木簡には「飽海郡少隊長解申請」「十火大粮二石二斗八升」「嘉祥二年正月十日」などと記された文書・貢進用木簡があり、「別當子弟」「狄藻」などの文字もある。墨書土器には「懺悔」「厨」「厨家」「官」「文」「小勝」などの文字がある。

管理団体仙北町は、1979（昭和54）年から保存管理計画による遺構保護整備地区の土地買い上げ事業を進めており、1982（昭和57）年からは調査成果に基づき、環境整備事業を実施している。さらに1991（平成3）年からは「ふるさと歴史の広場」事業により、外柵南門や河川跡の復元整備、ガイダンス施設の設置などを実施、平成7年度からは「ふれあいの史跡公園」事業により、政庁東方にある官衙建物などの整備を積極的に実施している。



第1図　遺跡の位置

第2章　調査計画と実績

平成9年度の調査は「払田柵跡調査要項」に基づく、第5次5年計画の4年次にあたる。事業費については、国庫補助金の内示（総計費1,440万円のうち、国庫補助金720万円）を得たので、次のような「平成9年度払田柵跡調査計画（案）」を立案した。

第1表　調査計画表

調査次数	調　査　地　区	調 査 内 容	調 査 面 積	調 査 期 間
第110次	外 郭 北 東 部 （仙北町払田字百目木）	外郭線角材列の 年輪年代測定	100㎡	4月20日～ 5月31日
第111次	外　郭　北　部 （仙北町払田字百目木）	外郭北門造営回 数の再確認	200㎡	6月1日～ 7月31日
第112次	外　郭　北　部 （仙北町払田字百目木）	外郭北門北方及 び西方の櫓状建 物等の調査	800㎡	8月1日～ 10月20日
合　計	3　地　区		1,100㎡	

平成6年度から平成10年度までの調査は、「払田柵跡発掘調査第5次5年計画」として立案され、顧問の指導と助言を得て承認されたものである。平成9年度の調査は、いずれも外郭線区画施設が対象である。

第110次調査は、4期ある外郭線角材列のうち、まだ年代の決定していないB期とD期角材列の年輪年代測定の実施を目的としたものである。外郭線北東部において、角材列4列が最も良好に残存して古くから3重柵あるいは4重柵と呼ばれてきた地点で実施した。

第111次調査は、外郭北門の再調査である。この門は調査事務所が初めて実施した第2次調査で、新旧2時期あることが知られていたが、その後の調査で、外郭東・西・南門や角材列に4期あることがわかり、外郭線の全体に4期の造営があることが知られるようになった。そこで、この外郭北門も2期ではなく、4期であろうとの疑問が生じたので、造営回数の再確認のための調査を実施したのである。

第112次調査は、外郭北門正面の様相や、門を中心として左右対称に展開すると考えられる角材列や、櫓状建物を探ることを目的として実施した。

平成9年度の調査の実績は第2表のとおりである。

第2表　調査実績表

調査次数	調　査　地　区	調 査 内 容	調 査 面 積	調 査 期 間
第110次	外 郭 北 東 部 （仙北町払田字百目木）	外郭線角材列の 年輪年代測定	103㎡	4月21日～ 6月13日
第111次	外　郭　北　部 （仙北町払田字百目木）	外郭北門造営回 数の再確認	180㎡	5月30日～ 8月1日
第112次	外　郭　北　部 （仙北町払田字百目木）	外郭北門北方及 び西方の櫓状建 物等の調査	550㎡	6月19日～ 10月17日
合　計	3　地　区		833㎡	

第 110 次調査では、角材列の中から年輪年代測定が可能と思われる角材 6 点を選んで測定を依頼した。そのうち、3 点の角材の最外年輪が西暦 907 年と判明した。いずれもＣ期角材列で、これにより、Ｃ期角材列の構築年代が確定したことになる。しかし、Ｂ期、Ｄ期では測定に適した試料がなく年代が判明しなかった。

第 111 次調査では、外郭北門の西半部を対象として、その中から保存状態の良好な 2 箇所の柱を選び、重複状態の検討を行った。外郭北門ではＡ期とＢ期、およびＣ期とＤ期の柱がそれぞれほぼ同一の位置に建てられるので、建て替えに際して柱の切り取りを行ったＢ期の柱とＤ期の柱だけが残っている。Ａ期とＣ期の柱掘形は大部分が失われているので 2 時期しかないように見えるが、重複状況の検討からは 4 期の造営があることがわかり、外郭東西南北 4 門全てに 4 期にわたる造営があることが確かめられた。

第 112 次調査は、昨年の第 107 次調査に継続する調査で、外郭北門の正面から北西部において角材列、櫓状建物、溝などの検出に努めた。主な成果は次のとおりである。

① 外郭北門の西側角材列にも 4 期あることが初めて確かめられた。倒壊したＤ期角材に、長さが 4.70 ｍとなるものがあり、昨年判明した角材の全長や地上部分の高さが追認された。

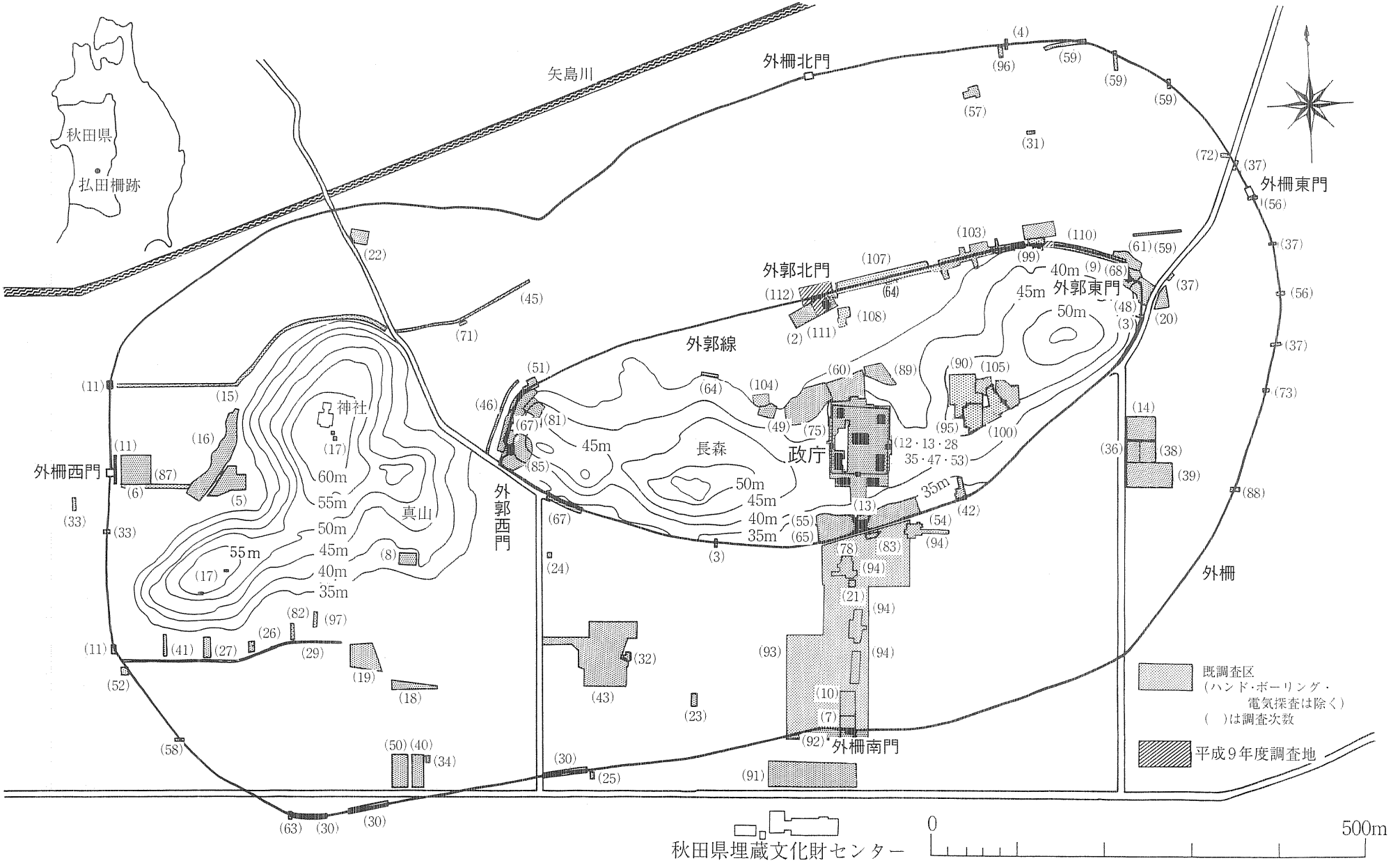
② 櫓状建物は門の東側と同じく 7 期の造営がある。門の東西両側の櫓状建物の距離は最も新しい櫓状建物の場合、42.0ｍである。

③ 角材列の北に平行する溝は、門の正面でも屈曲することなく直線的に西へ延びている。門の北方の位置では、北へ連なる道路状遺構や、橋は検出されなかったが、溝底に残る広葉樹の丸太材から、太い橋脚を用いない形で橋を架けたものと推定される。

④ 外郭北門を中心とする外郭線角材列と、それに伴う櫓状建物には、角材列に 4 期、櫓状建物に 7 期の造営があり、両者は東西両側で基本的に同様の変遷を示す。木道も含め、門の周辺では門を中心として左右対称に設計、造営がなされていた。第 107 次調査と今回の調査により、門の両側の区画施設の様相が初めて明らかになった。

⑤ 木簡 7 点、絵馬、横槌・楔・曲物・挽物皿・斎串・箸など多くの木製品が出土した。払田柵跡における木簡はこれで計 89 点となった。

⑥ 木簡に「北門所」、墨書土器に「北預」、「北門」、「門ヵ」と記されたものがあり、北門に関する文字資料が出土した。



第２図　払田柵跡調査実施位置図

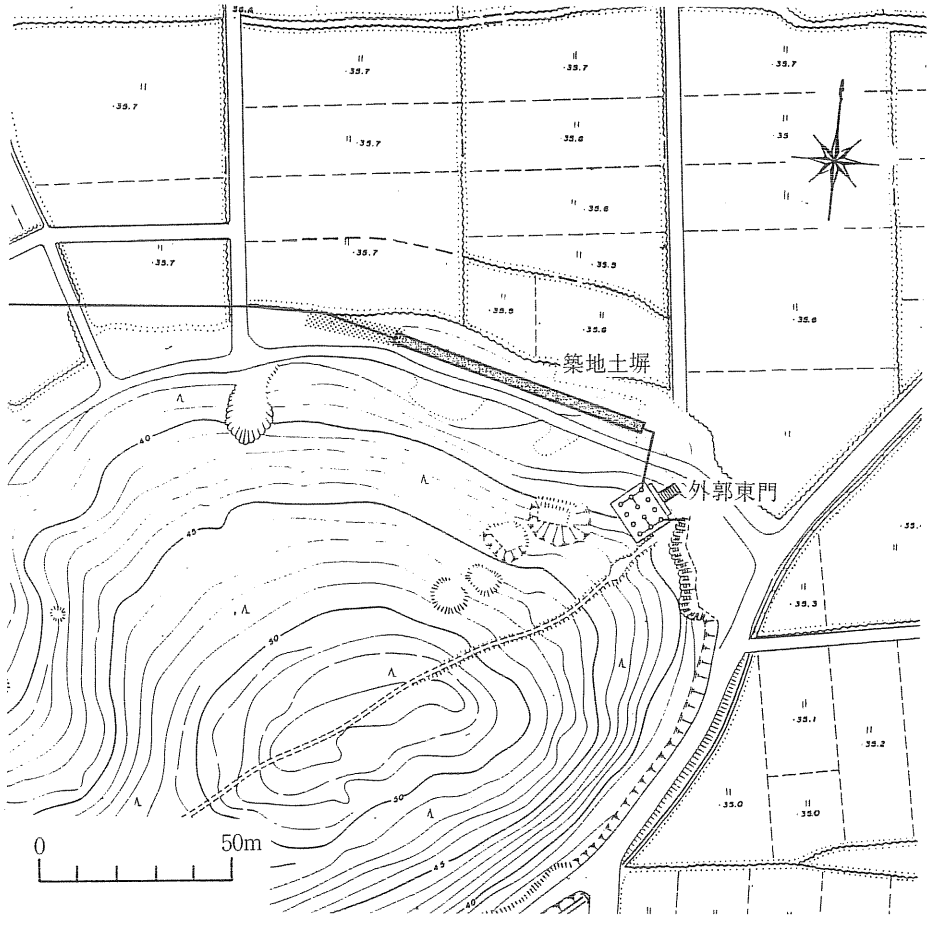
第3章　第110次調査

第1節　調査経過

調査は外郭線角材列の年輪年代測定を行い、4期ある角材列各々の構築年代を決定することを目的として実施した。

4月21日に作業を開始、現場にテントを設営し、機材の運搬を行って、24日、調査区の西端から掘り下げを始めた。

5月14日までに角材列と築地の接続部分まで検出し、16日、全体写真撮影を行った。19日には遣り方を設定、22日から現状での平面実測を始めるとともに、第111次調査の準備作業も併行した。6月11日には角材列の断面実測を終え、12日、角材の中から年輪年代測定が可能と思われる試料5点を選定、採取し、翌13日に調査を終了した。



第3図　第110次調査位置図

試料は8月4日、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター光谷拓実発掘技術研究室長に持参して測定を依頼した。さらにその後、追加試料1点（No.6）を送付した。

第2節　検出遺構と遺物（第4図，図版1～3）

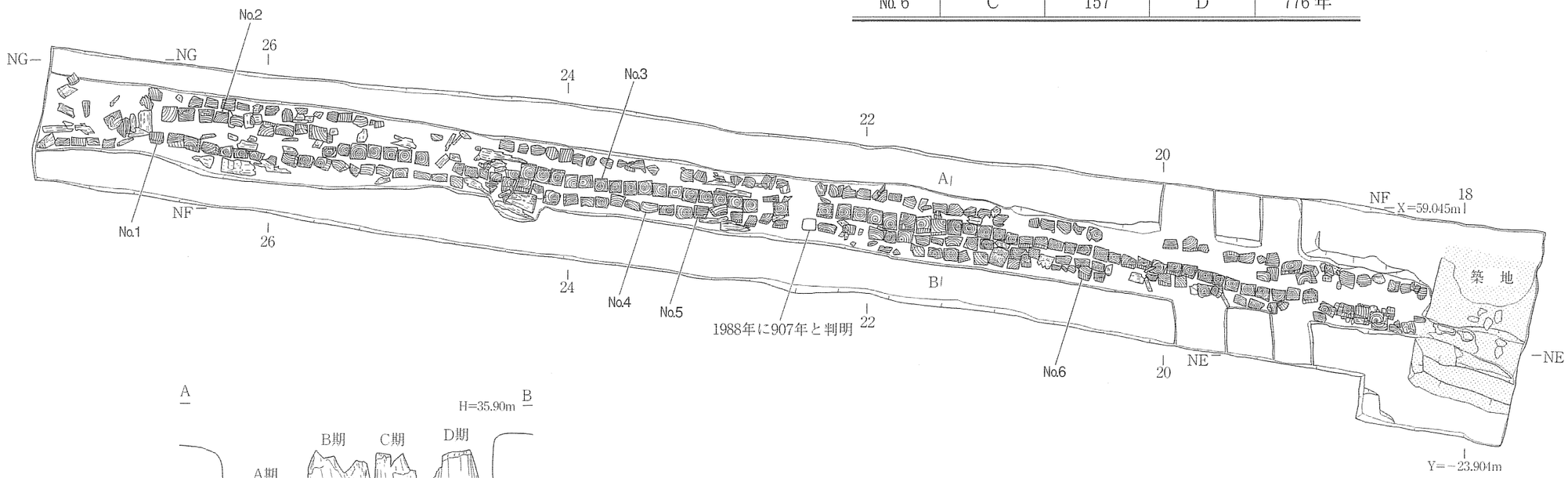
長森丘陵を取り囲む外郭線区画施設には、A～D4期の造営がある。A期は地盤の堅固な丘陵の裾部が築地塀、軟弱な泥炭地がスギ角材による材木塀で作られ、B～D期になると全体が材木塀に替わる。

調査地は外郭線北東部にあり、標高36.5m、外郭東門の西にある長さ68mの築地塀が材木塀に変わる地点である。この地点の角材列は4列が最も良好に遺存していて、古くから三重柵あるいは四重柵と呼ばれてきた。この地域では1976（昭和51）年の第9次調査(註1)で、築地塀とともに調査を行っているが、今回は外郭線角材列のうち、まだ年代値が全く明らかでないB・D期の角材の年輪年代測定を目的とした。

調査では角材列のほか築地塀の西端部を再度検出し、現状での写真撮影と平面・断面の実測を行った後、角材列の中から角材5点を選んだ。その際、No.1・4・5はC期またはD期、No.2・3はB期の角材と考えて

第3表　年輪年代測定結果

試料	形状タイプ	計測年輪数	角材列の時期	最外年輪形成年
No.1	A	165	C	907年
No.2	C	225	B	690年
No.3	−	132	B	不明
No.4	A	167	C	907年
No.5	A	247	C	907年
No.6	C	157	D	776年



第4図　第110次調査全体図

試料を採取した。追加試料のNo.6はD期角材である。それらのうち、Aタイプ試料であるNo.1・4・5の角材の最外年輪が西暦907年と判明した（第3表）。

第3節　小　　結

1994（平成6）年の第99次調査[註2]で実施した年輪年代測定では、A期角材のうち3点の最外年輪が西暦801年と判明し、これによって外柵と外郭線がこの年代に同時に構築されたことが明らかとなった。これより前、1988（昭和63）年には北から3列目のC期角材列の構築年代が、1点ではあるが西暦907年であることが判明している[註3]。

したがってAタイプ試料で最外年輪の判明したNo.1・4・5はC期角材で、同じ測定値が計4点となったことにより、C期角材列の構築年代は907年と確定したと言えよう。しかし、B期・D期角材列では年代が判明しなかった。また、D期角材列は布掘りが浅いためか、この地域ではほとんど残っていないことも明らかとなった。

これまでの調査で判明した外郭線角材列の年代は第4表のとおりである。

第4表　外郭線角材列の年輪年代

A期	B期	C期	D期
801年	不明	907年	917＋α年

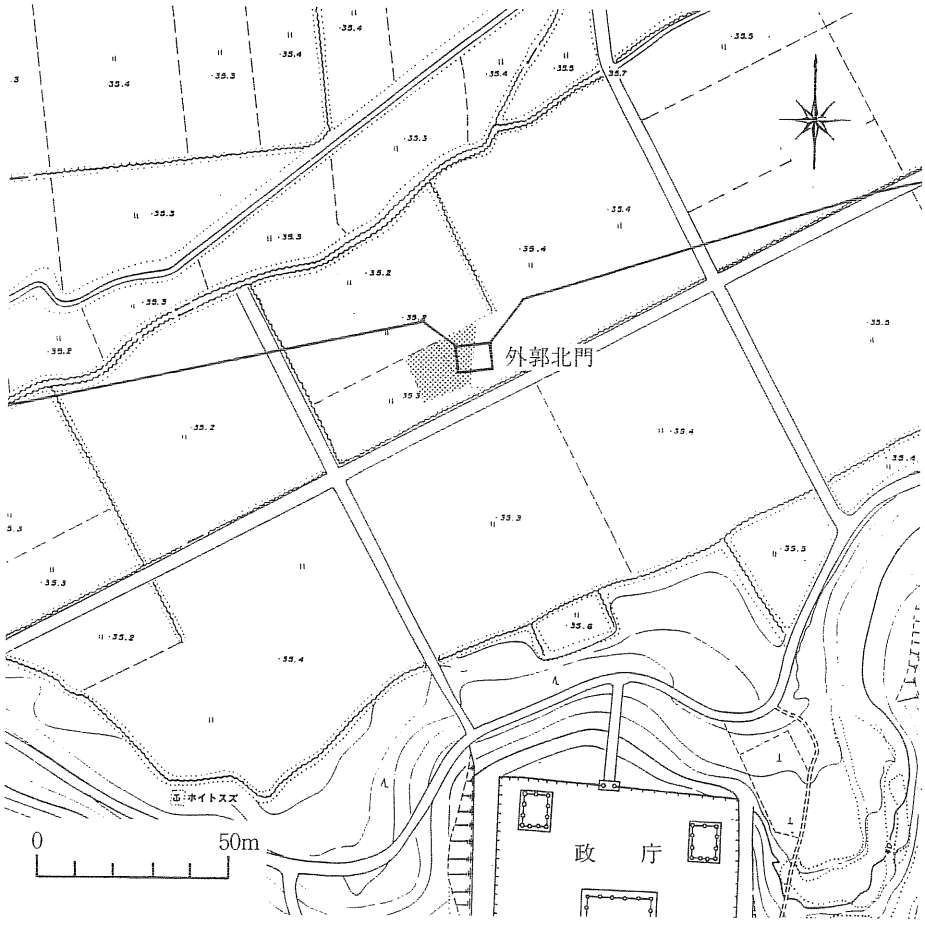
註1　『払田柵跡調査事務所年報1976　払田柵跡－第9・10次調査概要－』　1977（昭和52）年
註2　『払田柵跡調査事務所年報1994　払田柵跡－第98～101次調査概要－』　1995（平成7）年
註3　『払田柵跡調査事務所年報1988　払田柵跡－第74～78次調査概要－』　1989（平成元）年

第4章　第111次調査

第1節　調査経過

外郭北門は1974（昭和49）年の第2次調査(註1)で新旧2期があることがわかり、その後は築地塀、角材列を含め外郭線の全体に2期にわたる造営があると考えられていた。

しかし、1984（昭和59）年の第55次調査(註2)では外郭南門に4期があることが確かめられ、続く外郭東門(註3)、西門(註4)や、角材列の調査でも同様の結果が得られたことにより、外郭線の全体に4期にわたる造営があることが明らかとなった。したがって外郭北門も2期ではなく4期あるのではないかとの疑問が生じることになり、再調査の必要にせまられていた。



第5図　第111次調査位置図

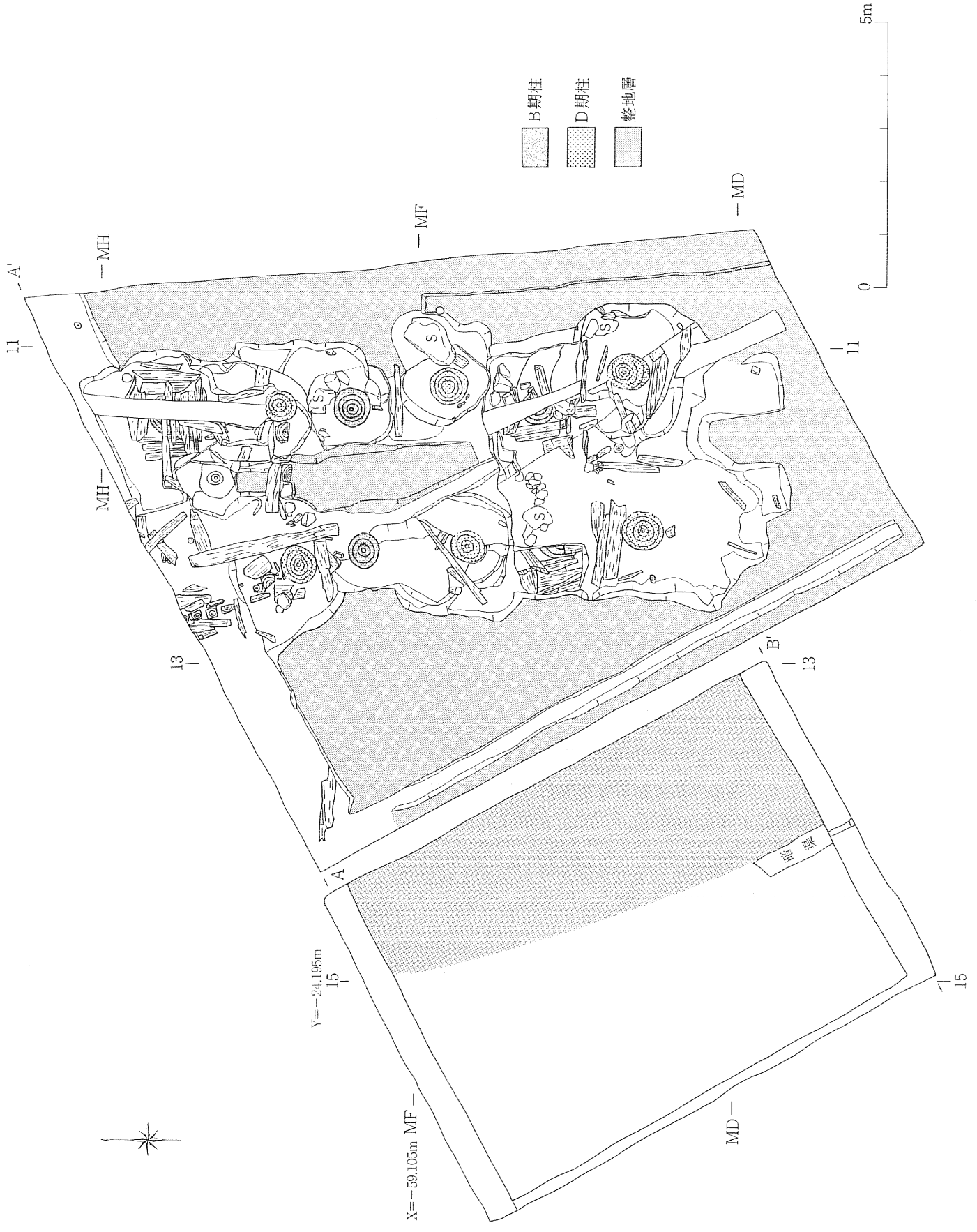
さらに昨年の第107次調査では、外郭北門の北東隅柱付近の角材列にも明確に4期あることがわかり、その可能性は一段と高まったので、北門の造営回数を再確認するための調査を実施したのである。

5月22日、第110次調査と併行して調査準備を開始、30日に現地にテントを設営した。6月4日から第2次調査終了後に調査地に入れた砂の除去を始め、13日に終了、16日からは外郭北門の西妻柱掘形の、第2次調査時の埋土を除去し、柱材を現した。18日からは北側の西から2番目の柱の精査を開始し、以後第112次調査と併行して作業を進めた。20日、遣り方を設定、24日、南東隅から平面実測を開始した。25日、北側の西2柱掘形内の廃材に墨書があるのに気づき、写真撮影後に抜き上げを行った。7月14日、北側西2柱の精査をほぼ終え、南側西2柱の重複状況の精査を開始し、この2箇所の柱掘形で北門の造営回数が3期あるいは4期あることを把握することができた。29日、遺構全体写真の撮影を行い、8月1日に調査を終了した。

第2節　検出遺構と遺物

1　遺構と遺物（第6図，巻首図版1，図版4）

第2次調査では、門のおよそ東半分の地域では整地層をすべて剥がして掘り下げたが、西半分では整地層



第6図　第111次調査全体図

をそのまま残していたので、遺構の保存状態の良好な西半部を調査対象とした。

外郭北門周辺の土層を調査区の北壁で見ると、耕作土の下には厚さ10～15cmの黒色土があり、その下に20～30cmの厚さで黒褐色ないし暗緑灰色粘土を用いた堅固な整地層がある。整地層はここでは2枚あり、下層のそれは厚さ10～20cmで、北門のA期北東隅柱掘形がこれを掘り込んでいるので、創建期の整地層である。上層の整地層は、このA期柱掘形やBまたはC期の角材を覆っているので、その後に施したものである。この上に厚さ約5cmの火山灰が部分的に堆積している。整地層の下は厚さ40～50cmの軟弱な黒色泥炭層で、さらにその下が暗緑灰色粘土層である（第7図上）。

なお、北門の西の調査区で南壁の土層を見ると、整地層は北門の西側柱の6～7m西まで達して消失している（第7図下）。昨年の第107次調査では、この整地層の東端部が見られ、東西幅は約22mであることが知られる。

第2次調査終了後に遺構保護のために入れた砂を除去し、さらに柱掘形内に入れた土も除去した結果、門の北側の西から2番目の柱掘形と南側の西から2番目の柱掘形が、第2次調査における掘り下げが少なく、古い時期の柱掘形が遺存している可能性が大きいと判断されたので、この2箇所を精査し、平面と土層断面で柱掘形の重複状況の検討に努めることにした。あわせて、門の西にあるSD01溝も再調査の対象とした。

なお、第2次調査では2時期の門のうち創建の門の遺構番号をSB02、建て替え後のそれをSB01としているが、本調査ではSB1200と改めた上で、古い方から順次A～Dの記号を付すことにした。

（1）SB1200外郭北門北側西2柱（第8図，図版5）

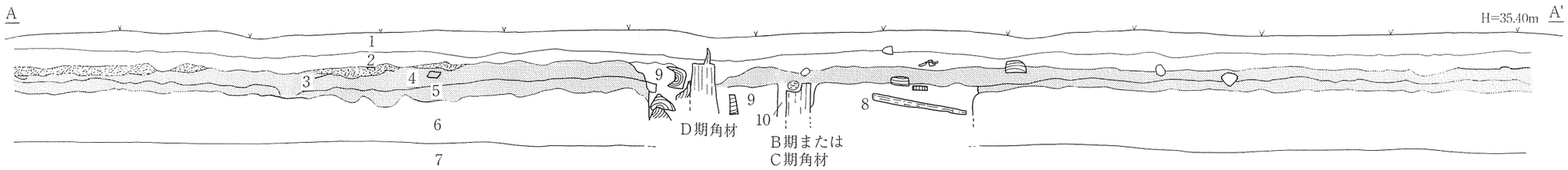
この柱は、第2次調査では新旧2期のうち新しい方の柱とその掘形を検出しただけで、掘形の断ち割りは行っていない。柱は直径55cmのスギ材で、その付近に残る掘形内の埋土には火山灰が含まれていたので外郭東門などの場合と同様に、A～D4期のうちD期の柱であると判断された。柱は掘形の南寄りにあり、頂部は水田耕作に伴う現代の切り取りによって水平になっている。その北側には建築材の廃材が、主として東西方向に入っていた。柱の下端は掘形の底面より30cmほど沈下している。

D期柱の北に連続する掘形内を徐々に下げて行くと、下方に直径約70cmのケヤキを用いた古い時期の柱が検出された。柱の上部には手斧による切り取り痕が残っていて、古代の建て替え時における切り取りであることが明らかである。柱の周囲は東西方向1.9m、南北方向1.6mの範囲でクリ材によって取り囲まれていた。クリ材は長さ80～130cm、幅10～20cmあり、柱材を中心として2重3重に方形となるように敷き並べたもので、これらの範囲がほぼ柱掘形の平面形を示すものと考えられる。この柱の下端は掘形の底面より135cm沈下していた。

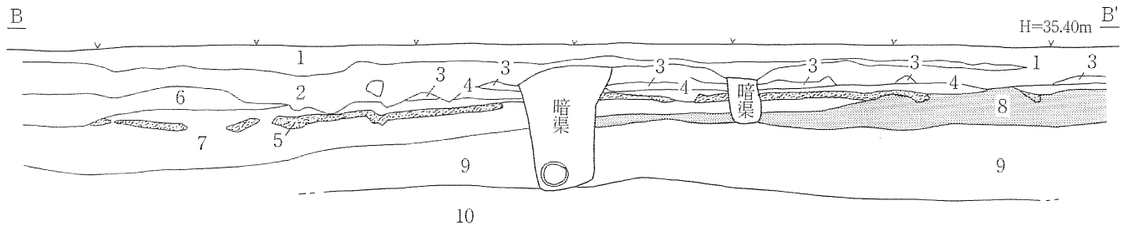
掘り下げる過程で、この柱掘形によって切られる別の掘形が東側に極めてごく一部であるが認められ、これは最も古い時期の柱掘形と考えられた。また、柱切り取り後の埋土の上に火山灰を含む斜めの掘り込みも見られた。

これらの北に北東隅柱と連続すると考えられる、東西方向に長い掘り込みがある。整地層の上面から70～90cmの深さの掘り込みで、東西方向の柱2本を一つの単位として同時に掘り込んだものであり、第2次調査では南側の柱でも同様の掘り込みが検出されている。位置や土層の状態から、最も古い時期の掘り込みと考えられた。

これらの状況から、この位置の柱は、まず創建段階で整地層を施した後、北東隅柱と東西に連続する形で浅い掘り込みを行い、最初の柱掘形とした（A期）。次の時期にはA期の柱を抜き取ってほとんど同一の位



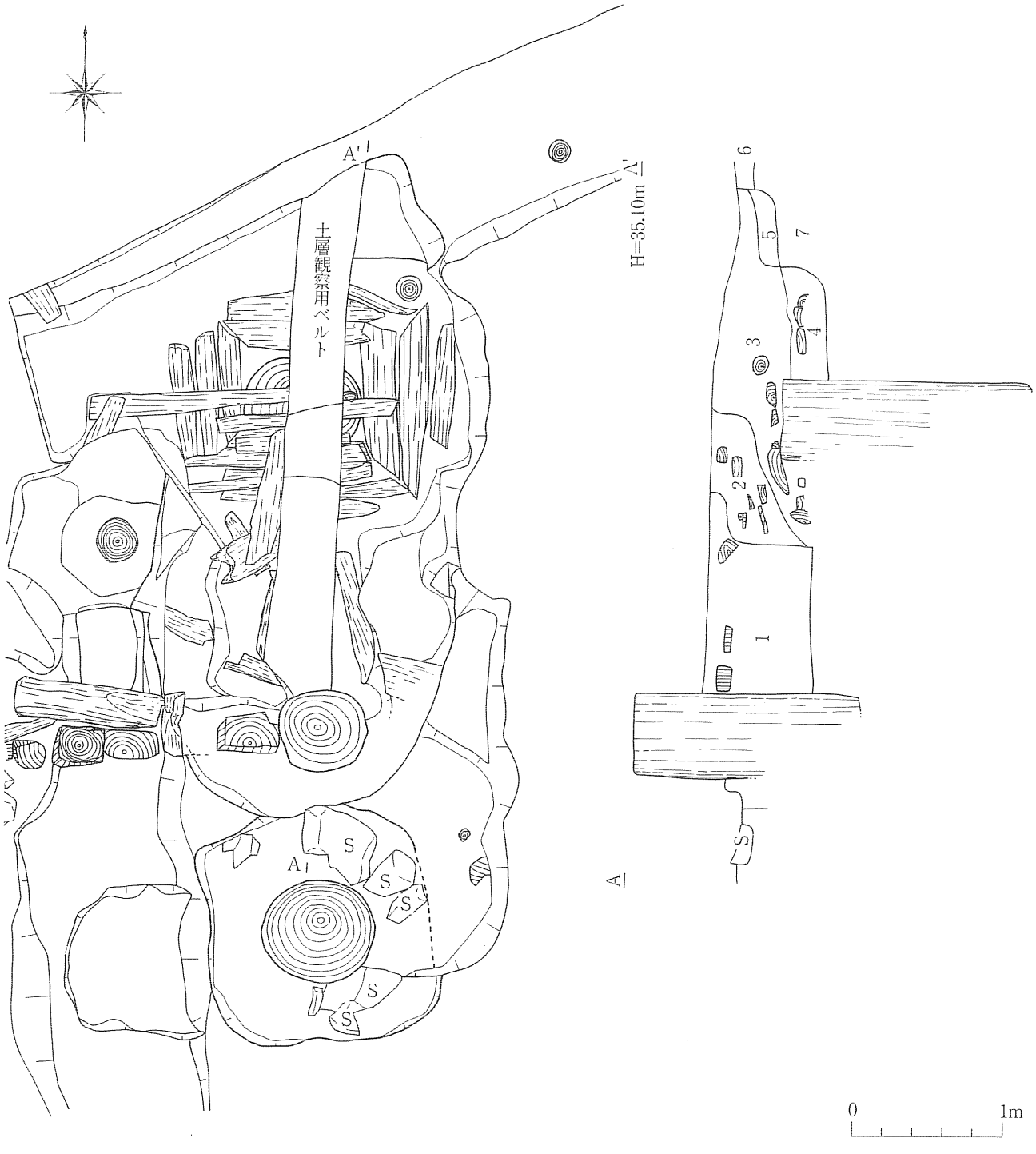
1　10YR3／1 水田畦畔、第2次調査埋め戻し時の砂が混じる。
2　7.5YR2／1 黒色土
3　2.5Y5／4 黄褐色火山灰
4　10YR3／2 黒褐色粘質土。整地層
5　7.5GY4／1 暗緑灰粘土整地層
6　7.5YR2／1 黒色泥炭
7　7.5GY4／1 暗緑灰粘土
8　7.5GY4／1 暗緑灰粘土を主体としごく少し6層が粒状に混入。外郭北門A期北西隅柱埋土
9　4層とほぼ同じだが、4層よりも軟質。
10　10YR3／1 黒褐色粘質土。



1　10YR3／1 黒褐色耕作土
2　10YR4／1 灰色粘土、7.5GY4／1 灰色粘土。水田客土
3　5YR1.7／1 黒色土
4　7.5YR2／2 黒褐色泥炭
5　10YR4／6 褐色火山灰
6　7.5YR2／1 黒色土、8層よりは全体にしまる。
7　7.5GY4／1 黒褐色泥炭
8　10YR2／1 黒色土と7.5GY4／1 暗緑灰粘土、砂質土が粒状に混じる。整地層
9　7.5YR2／1 黒色泥炭
10　7.5GY4／1 暗緑灰粘土

0　1m

第7図　土層断面図

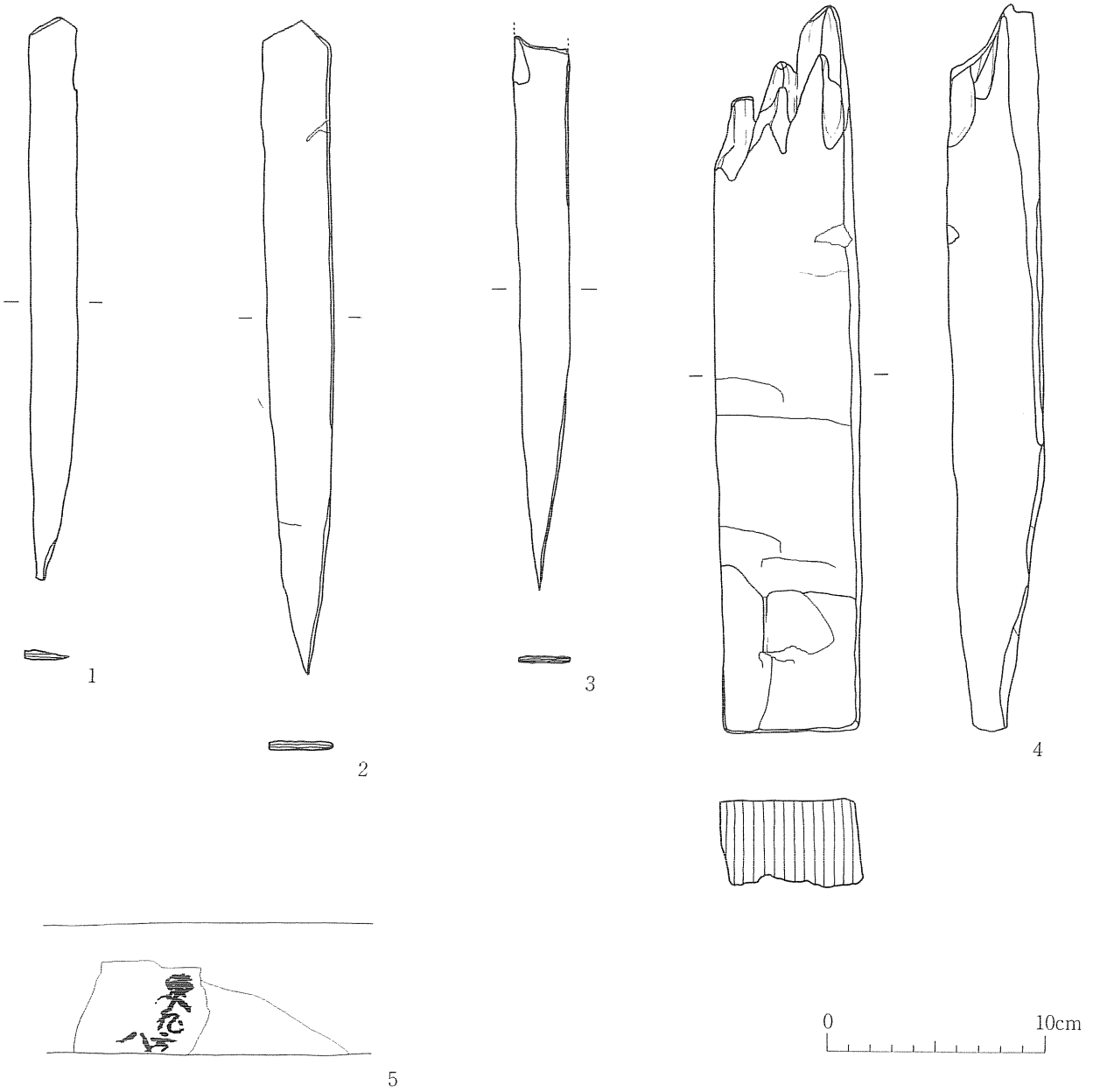


1　10GY3／1 暗緑灰粘土、7.5YR2／1 黒色土、10Y7／2 火山灰が全体に混じる。D期柱埋土
2　10Y3／1 オリーブ黒色粘土を主体に、10GY3／1 暗緑灰粘土が少し混じる。火山灰含む。C期柱の抜き取り穴
3　10GY3／1 暗緑灰砂質粘土、10Y2／1 黒色土、7.5YR2／1 黒色土が均一に混じる。B期柱切り取り後の埋土
4　3層よりも7.5Y2／1 黒色土が少い。B期掘形埋土
5　2.5Y2／1 黒色粘質土、7.5Y3／1 オリーブ黒色含砂粘土。A期掘形
6　7.5YR2／2 黒褐色泥炭
7　5GY4／1 暗オリーブ灰色粘土

第8図　外郭北門北側西2柱

置に柱掘形を掘った（B期）。この建物は135cmも沈下し、建て替え時には掘形の下方で柱の切り取りを行った。さらに次の時期には柱を南に移動して建て（C期）、建て替え時には柱の抜き取りを行った。最後の柱（D期）はC期柱とほぼ同じ位置か、ごくわずか南に建てたと考えられる。

B期柱の切り取り後の埋土に含まれていた廃材に「東北方八」の墨書があった。廃材は長さ180cm、幅17cm、厚さ6.5cmあり、先端を杭状に尖らせ、その一側面を手斧で12cmの範囲に削り取り、その中に墨書が記される。3文字目の方の字で材の縁辺に達したため、最後の八の字は方の左に並べて書かれている（第9図5，図版6・23－5）。また、同じ抜き取り穴の埋土から斎串が1点出土した（第9図1，図版23－1）。



番号	種　別	特　　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
1	斎　串	圭頭。	25.9	2.2	0.5	23－1
2	斎　串	圭頭。	29.9	3.1	0.3	23－2
3	斎　串	頭部は折損。	25.4	2.4	0.3	23－3
4	楔	片刃。頭部は折損。	33.2	7.2	4.1	23－4
5	廃　材	「東北方八」の墨書あり。	180.0	17.0	6.5	23－5

第9図　遺構内出土遺物（1）

（2）ＳＢ1200外郭北門南側西2柱（第10図，図版6・8）

この柱も第2次調査で新しい時期の柱とその掘形を検出しているが、断ち割りは行っていない。柱は直径65cmのスギ材で、周囲の埋土には火山灰が混入していることから、Ｄ期の柱である。柱掘形の平面形は東西2.6m、南北2.3mの不整円形で、下部に至るほどすぼむ。柱は北に傾き、頂部は水田耕作に伴う現代の切り取りによって水平になっている。下端は掘形の底面から約10cm沈下している。

この柱の北に連なる掘形内を、平面および土層断面で重複状況を観察しながら徐々に掘り下げて行くと、下方に直径70cmのクリ材による柱が検出され、前述の、北側西2柱と同様に、頂部に手斧による古代の切り取り痕が残っていて、その周囲をクリ材の板が取り囲む状況が見られた。この柱も掘形の底面から50cm以上沈下しているが、柱の下端まで検出することはできなかった。掘形の北壁は西にある南西隅柱の掘形に連なっている。

平面・断面ともに4回にわたる重複が見られるが、最も古い時期の柱掘形は見られず、それらはＢ期の柱掘形とその柱、その上方から掘り込んだ切り取り穴、それを切るＣ期の柱掘形、さらにそれを掘り込むＤ期の柱掘形である。

これらの状況から、この位置の柱は、創建時の整地層を掘り込んで最初の柱を建てた（Ａ期）。建て替えにあたっては、Ａ期の柱を抜き取ってほぼ同位置に柱を建て（Ｂ期）、次の建て替え時には下方で柱の切り取りを行い、位置を南に移動して柱を建てた（Ｃ期）。次の建て替えにあたっては、柱の抜き取りを行い、Ｃ期柱とほぼ同じ位置か、ごくわずか南に建てた（Ｄ期）と考えられる。

掘形内から斎串が2点出土した（第9図2・3，図版23－2，3）。2はＢ期柱抜き取り穴の埋土からの出土である。3は頭部を欠く。他に、棟通りの西2柱のＤ期掘形埋土内から楔が1点出土した（第9図4，図版23－4）。

（3）第2次調査におけるＳＤ01

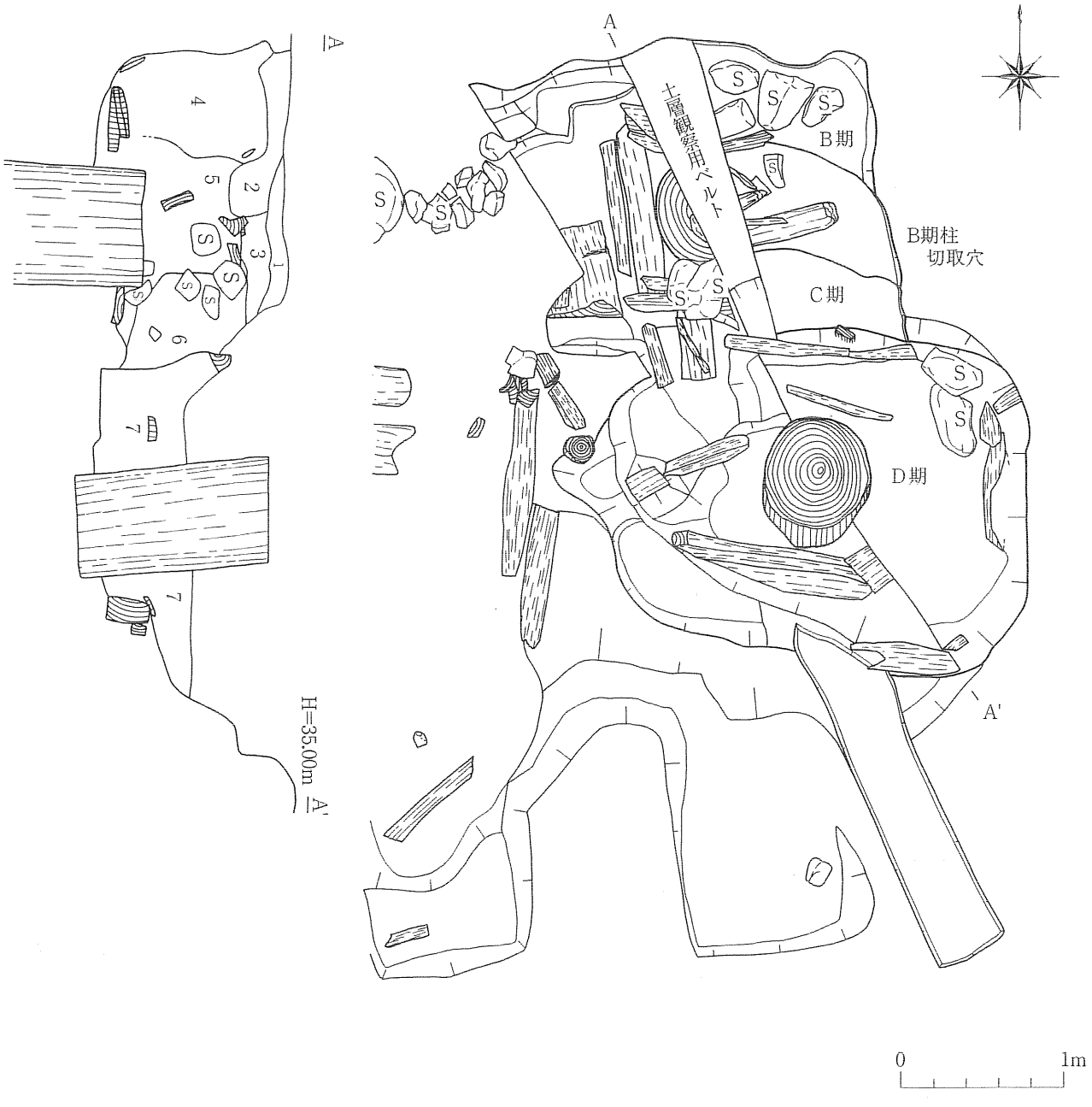
外郭北門の盛土整地層西縁から落ち込む幅4.1～4.8mの南北方向の溝である。第2次調査では上面で確認しただけで、掘り下げを行っていないが、実測された平面図を見ると、昨年度に調査したＳＢ1189櫓状建物に伴い、その周囲の排水を目的としたと考えられるＳＸ1192と同様の遺構であるように推定された。

ＳＸ1192からは多数の木簡や木製品が出土し、このＳＤ01からもそれらの出土が考えられたので再調査を行ったのであるが、第2次調査で図示された溝の西側の線は、平面では全く検出されず、調査区南壁の土層断面では、外郭北門に伴う厚さ20cmの整地層が、西ほどしだいに薄くなって消失し、その下の黒色泥炭層も西ほど低くなり、この泥炭層や整地層の上にもその後に形成された別の泥炭層が堆積している様子が観察された。

第2次調査で溝の東縁と見たものは、整地層の西縁であって、それより西は溝ではなく、西ほどしだいに落ち込む自然地形であると考えられる。したがって外郭北門には昨年度のＳＸ1192や、後述する第112次調査で検出したＳＸ1206のように、創建段階で建物周囲の排水を意図した溝は特に設けられてはいないことが明らかとなった。

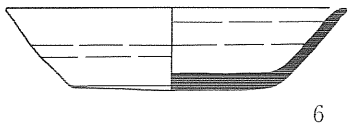
2　遺構外出土遺物（第11・12図，図版23・24）

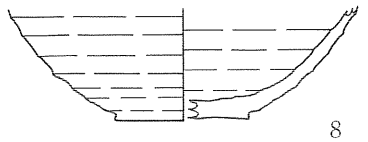
（1）須恵器　第11図6（図版23－6）は杯で、底部切り離しは回転ヘラ切りによる。体部が直線的に外傾し、口縁部がごくわずかに外反する。底面の中央に「一少隊御前下」の墨書がある。外郭北門の整地層の最も下部から出土した。7（図版23－7）も杯で両面に墨痕がある。

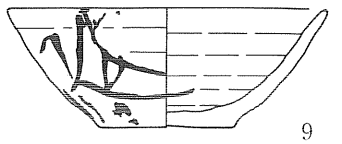


1　10YR3／1 黒褐色土を主体に 7.5Y 灰オリーブ粘土が混じる。火山灰混入。D 期柱を建てた後の整地
2　7.5Y 灰オリーブ粘土、5GY4／1 暗オリーブ灰粘土（砂含む）、10YR3／1 黒褐色土などが混じる。
　B 期柱切り取り後の整地
3　5Y4／2 灰オリーブ砂質粘土に 7.5YR2／1 黒色泥炭混じる。C 期柱掘形に伴う整地
4　5GY4／1 暗オリーブ灰粘土（砂含む）を主体に、7.5YR2／1 黒色泥炭が大きな粒状に入る。
　10YR4／2 灰黄褐砂質土の粒を全体に含む。B 期柱掘形埋土
5　5Y3／1 オリーブ黒色砂質粘土に泥炭粒、クリ材の小片が混じる。B 期柱切り取り後の埋土
6　5YR3／1 オリーブ黒色砂質粘土、2.5GY3／1 暗オリーブ灰粘土が全体に均一に混じる。C 期柱掘形埋土
7　5YR3／1 オリーブ黒色砂質粘土を主体に 7.5Y8／2 灰白色火山灰が全体に粒状となって混じっている。D 期柱掘形埋土

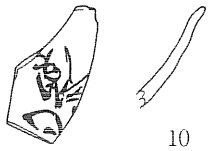
第 10 図　外郭北門南側西 2 柱

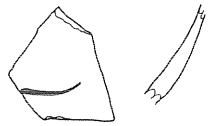

6

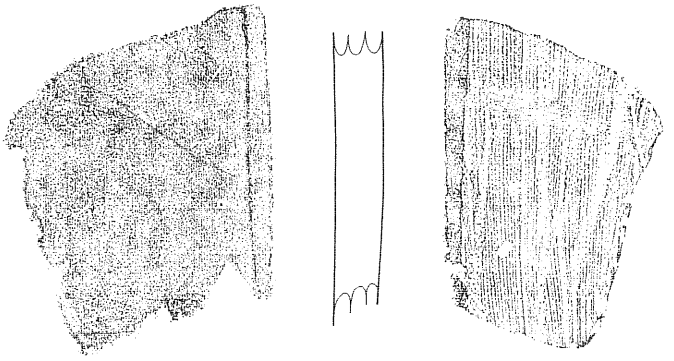

8

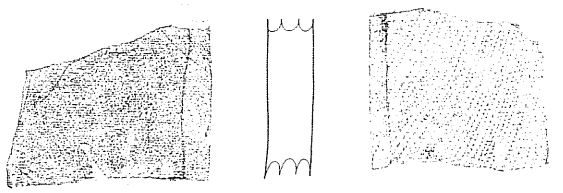

9

7

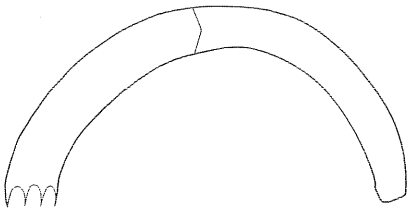

10


11


12


13

14

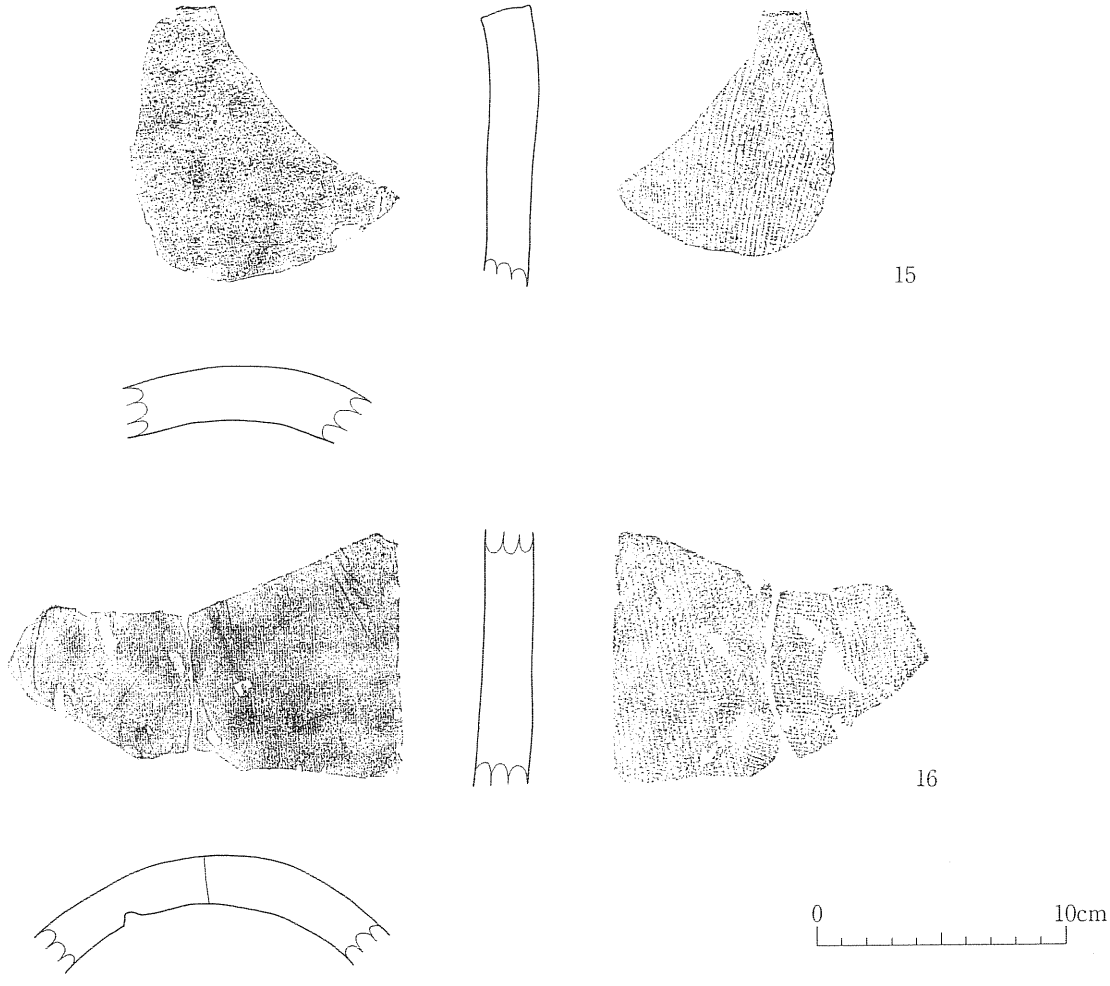


0　10cm

番号	種　別	器形	特　　徴	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
6	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り、底部に墨書「一少隊御前下」 内面：ロクロナデ	13.7	8.3	3.4	0.60	24.8	39°	23－6
7	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り、体部に墨痕あり。 内面：ロクロナデ、墨痕あり。							23－7
8	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り。 内面：ロクロナデ		5.4					
9	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り、体部に墨痕あり「延」 内面：ロクロナデ	12.8	5.4	4.8	0.42	37.5	32°	23－8
10	土師器	杯	外面：ロクロナデ→体部に墨書あり「北預」 内面：ロクロナデ							24－1
11	土師器	杯	外面：ロクロナデ→体部に墨書あり。 内面：ロクロナデ							

番号	種　別	特　　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
12	丸　瓦	凸面：無文、凹面：布目痕。	12.0	9.7	2.0	24－2
13	丸　瓦	凸面：無文、凹面：布目痕。	6.5	7.8	1.9	24－3
14	丸　瓦	凸面：無文、凹面：布目痕。	7.7	16.0	1.8	24－5

第11図　遺物内出土遺物（2）



番号	種　別	特　　徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図　版
15	丸　瓦	凸面：無文、凹面：布目痕。	11.3	10.1	2.0	24－4
16	丸　瓦	凸面：無文、凹面：布目痕。	10.0	14.0	2.0	24－6

第12図　遺物内出土遺物（3）

（2）**土師器**　8・9は底部切り離しが回転糸切りによる杯である。9（図版23－8）の体部に「延」の墨書がある。10・11も杯で、10（図版24－1）の体部に逆位に「北預」の墨書、11の体部にも墨痕がある。

（3）　**瓦**　第11図12～14（図版24－2・3・5），第12図15・16（図版24－4・6）は丸瓦で、凹面に布目痕があり、凸面は無文である。11～14は側縁にヘラケズリ調整を施す。

第3節　小　　結

外郭北門は創建時に整地層を施した後、東西に2箇所連続して浅い掘形を掘り込み、A期柱を建てた。B期柱掘形はA期柱掘形とほとんど同一の位置に構築し、建て替え時には下方で柱の切り取りを行った。C期柱はB期のそれより幾分南に移動して建て(註5)、建て替え時には抜き取りを行い、D期柱はそのごくわずか南に建てたと考えられる。第2次調査で、創建のSB02とした門はB期、建て替え後のSB01とした門はD期の門であることが明らかである。

以上のように、外郭北門ではA期とB期、およびC期とD期がそれぞれほぼ同一の位置に建てられるので、

切り取りを行ったＢ期の柱と最後のＤ期の柱だけが残存する。Ａ・Ｃ期の柱掘形は重複によって失われ、ごく一部が残るだけで、殊にＡ期の場合はそれが著しい。その結果2時期しかないように見えるが、柱掘形埋土の重複状況の検討からは4期の造営があることがわかり、外郭東西南北4門ともに4時期の造営があることが確かめられた。

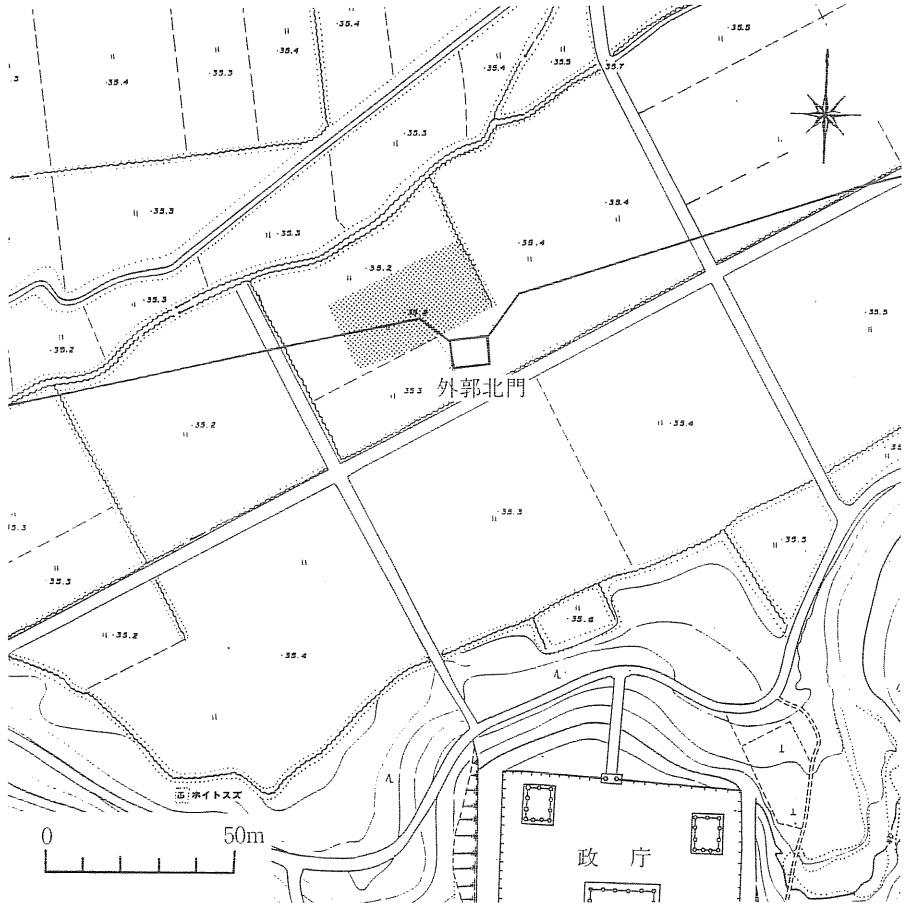
註1　『払田柵跡調査事務所年報1974　払田柵跡－昭和49年度発掘調査概要－』 1975（昭和50）年
　　建て替え後のＳＢ01（今次調査でのＤ期建物）の規模は桁行総長9.30ｍ、梁行総長6.51ｍである。
註2　『払田柵跡調査事務所年報1984　払田柵跡－第55～59次発掘調査概要－』 1985（昭和60）年
註3　『払田柵跡調査事務所年報1987　払田柵跡－第68～73次発掘調査概要－』 1988（昭和63）年
註4　『払田柵跡調査事務所年報1990　払田柵跡－第84～87次発掘調査概要－』 1991（平成3）年
註5　移動距離は、土層断面の検討から1.2ないし1.5mと推定される。

第5章　第112次調査

第1節　調査経過

第5次5年計画には、外郭線区画施設の解明を目的とする調査を組み入れ、平成6年の第99次調査から北部においてその調査を開始した。これまで北部外郭線の東から西へ約250mにわたって調査を押し進め、昨年の第107次調査では外郭北門の間近まで迫り、門の北東に連なる角材列と櫓状建物、木道のあり方などを探ることができた。多くの木簡や木製品も出土した。

今年はそれに継続し、外郭北門正面の様相や、門を中心として左右対称に展開すると考えられる角材列や櫓状建物を探ることを目的に、この調査を実施したのである。

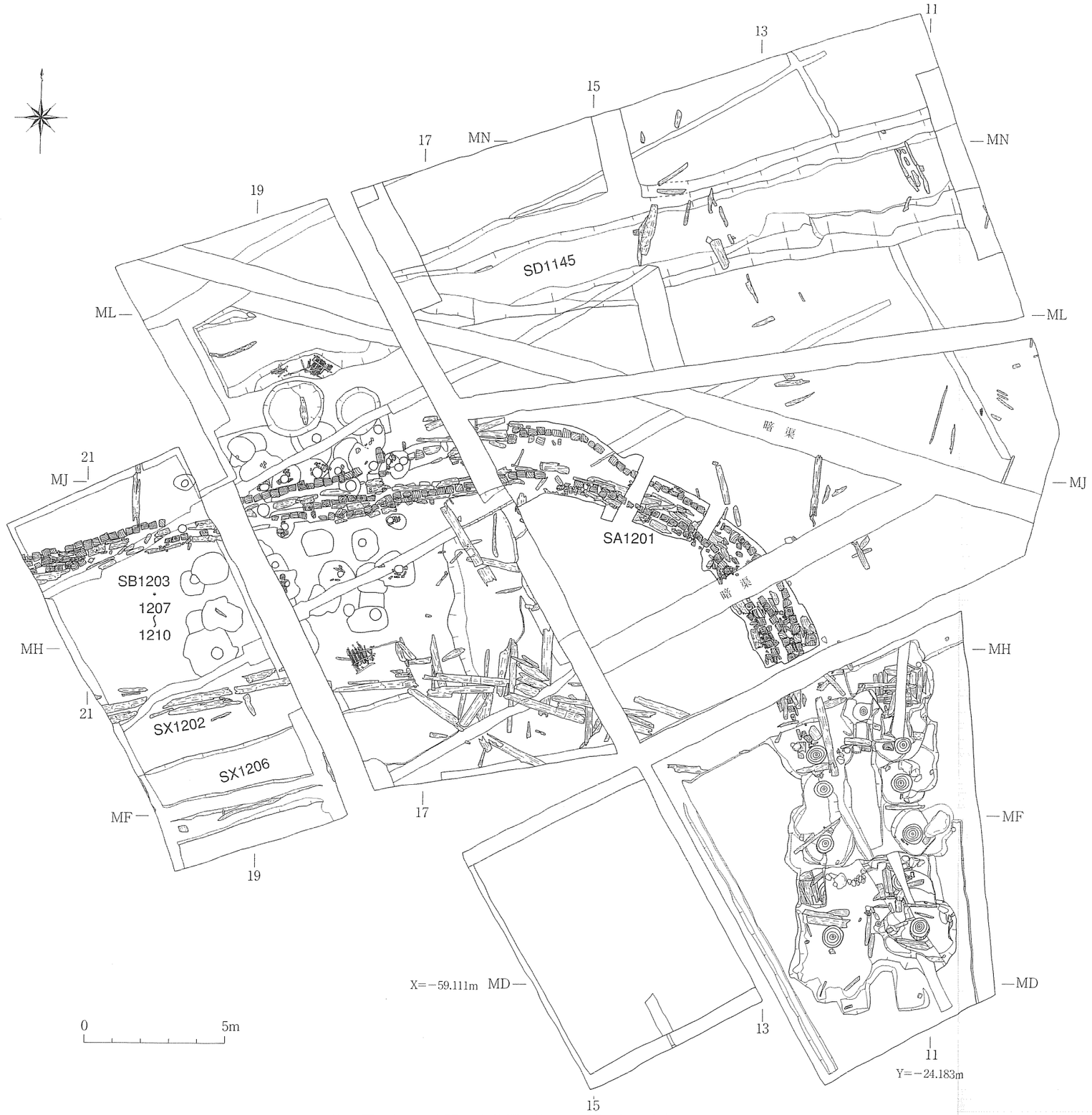


第13図　第112次調査位置図

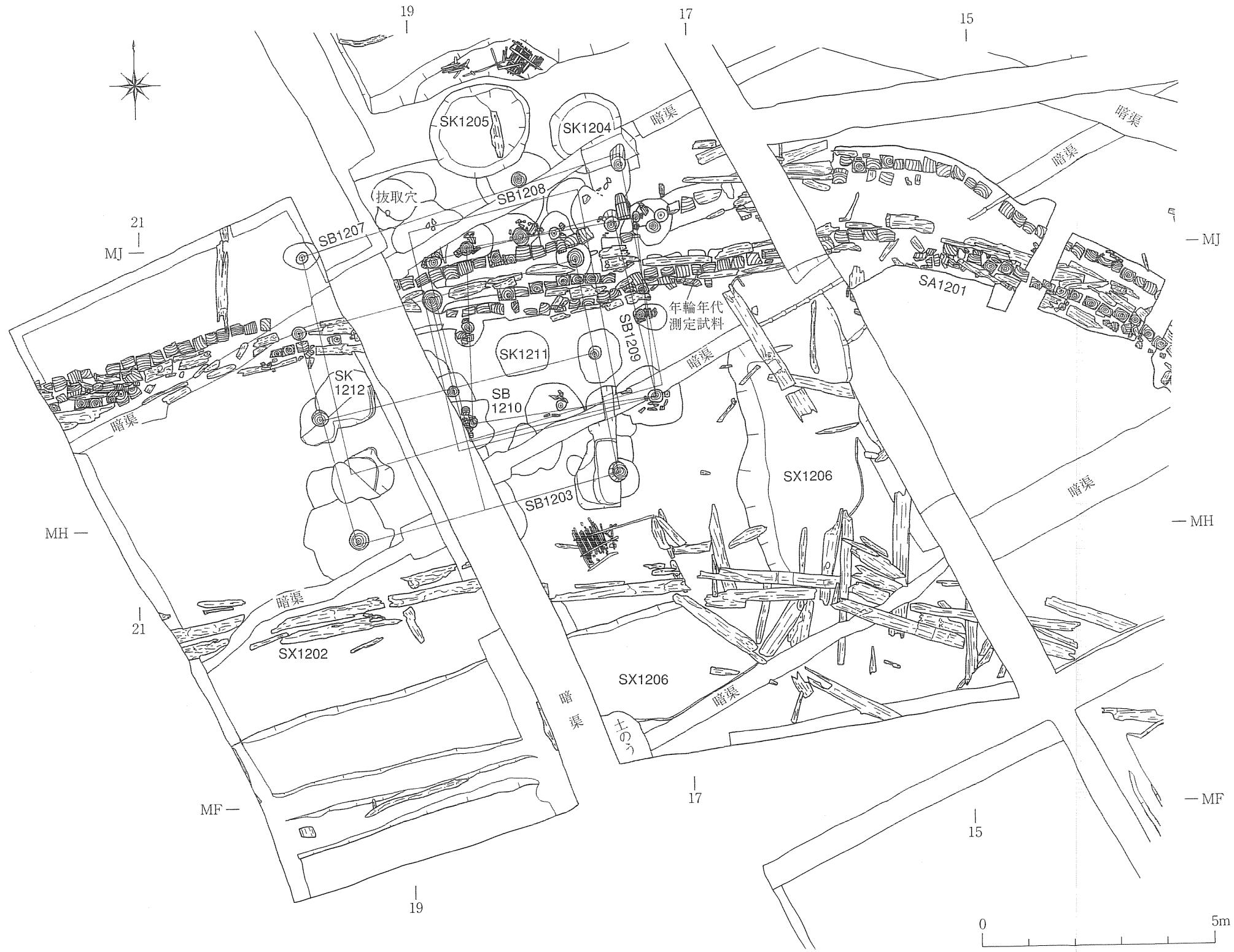
調査は6月19日、第111次調査と併行して外郭北門の北方の地域から開始した。表土を剥ぐと、すぐに門の北西隅柱に取り付く角材列の上部が現れた。7月1日から角材列の掘り下げを始め、9日にはその西方で櫓状建物の柱が検出され始めた。18日、ＳＤ1145溝が昨年の調査区西端から直線的に西に延びているのをトレンチによって確認、その後、溝底まで掘り下げると、25日に第88号木簡、31日に第86・87・89号木簡、挽き物皿などの木製品が出土した。

8月1日からは櫓状建物の精査を開始、21日に建物の東側に排水のための溝を掘ったところ、昨年のＳＸ1192と同様の、建物に伴う溝があるらしいことに気づいた。この溝は建物の南にもあり、ＳＸ1206とした。これを掘り下げると9月10日になって第83号、85号木簡が出土した。12日、櫓状建物や遺構の全景写真を撮影、24日、第45回顧問会議を開催し、調査研究の顧問である秋田県立博物館館長新野直吉氏、国立歴史民俗博物館情報資料研究部長岡田茂弘教授に対し、第110・111次調査も含めて調査成果の概要をご説明するとともに、現地でもご指導いただいた。

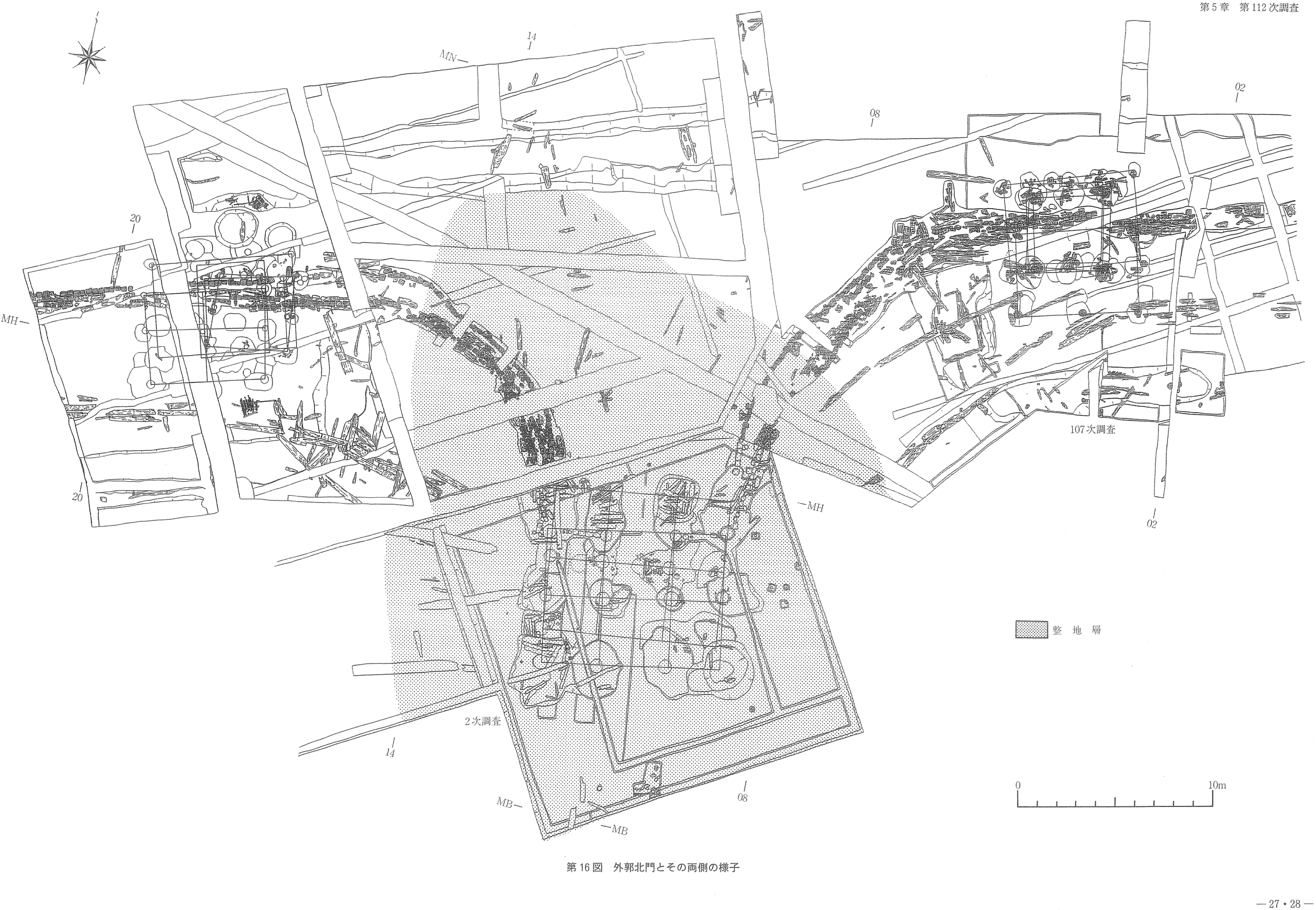
その後、櫓状建物柱掘形の断ち割り等の補足調査を行い、30日には報道関係者に対し、調査成果を発表、10月4日には現地説明会を開催したところ、約80名の参加者があった。翌日から人力による細部の埋め戻しを開始し、17日に現地の調査を終了した。



第14図　第112次調査全体図（第111次調査地含む）



第15図　櫓状建物とその周辺の遺構



第16図　外郭北門とその両側の様子

第2節　検出遺構と遺物

1　遺構と遺物（第14～16図，巻首図版2，図版9）

調査地は昨年の第107次調査の西、外郭北門の北から北西にあり、標高35.2ｍの平坦地で、元水田であるが現在は公有化されて休耕田となっている。

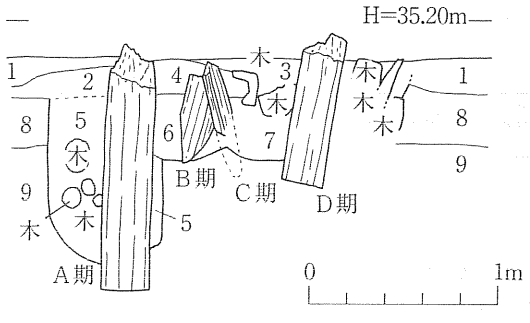
検出遺構は、外郭線角材列1（4期）、櫓状建物1（7期）、溝1、木道1、土坑4、その他の遺構1の計9遺構である。

（1）角材列（巻首図版2，図版10・11）

①　SA1201A・B・C・D

外郭北門の北西隅柱から北西方向にカーブし、櫓状建物付近からは東西方向に直線的となる角材列で、総延長約31ｍを検出した。水田の暗渠排水溝によって破壊を受けているが、水田耕作に伴う抜き取りは少ない。門柱に近い位置ではＢ期を除く3期の角材列が密接して残っているが、そのほかでは全体にＡ期とＤ期角材列だけとなる。Ｂ・Ｃ期角材列は既に調査してきた地域と同様に、建て替え時に木道に転用したり、それぞれ新しい時期の角材列の根元を固定するために抜き上げられ、ほとんど残存しない。

弧状となる部分の長さは外郭北門の北西隅柱から約15ないし16ｍで、その中央部に設定した小トレンチの土層断面ではＡ期とＤ期の角材のほか、Ｂ・Ｃ期角材の布掘りが見られ、4期あることが分かる（第17図）。ここではＡ期角材の布掘りは検出面からの深さが85㎝、幅60㎝あり、長さ130㎝の角材が直立している。角材は布掘りの底から15㎝ほど沈下している。Ｂ期の布掘りはＡ期角材に接して掘り込まれ、深さはＡ期布掘りよりも約50㎝浅い。Ｃ・Ｄ期の布掘りも同様に浅く、Ｄ期角材の下端はＡ期角材のそれよりも50㎝上位にある。角材列全体の幅は弧状となる部分では約2ｍであるが、西ほど狭くなり、調査区の西端部では約1ｍとなる。櫓状建物のすぐ東の位置では布掘りが2条となって、その間が50～70㎝開いている。



1　2.5Y3／1 黒褐色粘質土
2　2.5Y4／2 暗灰黄色粘土、2.5Y4／1 黄灰色粘土。
　A期角材に伴う整地
3　2.5Y4／2 暗灰黄色粘土、2.5Y4／1 黄灰色粘土。
　D期角材に伴う整地
4　10YR3／2 黒褐色粘質土
5　暗灰黄粘土に10YR2／1 黒色泥炭層が混じる。
　A期布掘り埋土
6　8層とほぼ同一。
　B期布掘り埋土
7　8層に10GY4／1 暗緑灰粘土が混じる。B期布掘り埋土
8　10YR2／1 黒色泥炭
9　10GY4／1 暗緑灰粘土

第17図　角材列土層断面図

Ａ期角材列には68本の角材が残存し、一辺の大きさは、計測し得るものの平均で長辺28.0㎝、短辺22.9㎝で、大きいものでは長辺42㎝、短辺31㎝を測るものがある。南に傾斜しているものが1本あるだけで、ほとんど直立して残っている。トレンチ断面では布掘り内に固定材としてスギ材の断片を入れているほか、門柱に近い位置では柱材の廃材も見られる。

Ｂ期角材列は櫓状建物の東に2本残るだけである。いずれも布掘りが浅いため残存部は極めて短い。

Ｃ期角材列は、門柱付近に9本、櫓状建物と重なる位置に連続して8本が残る。角材一辺の大きさは、平均で長辺29.0㎝、短辺21.9㎝である。

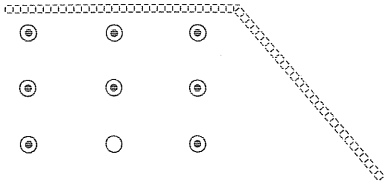
D期角材列には67本の角材が残存し、一辺の大きさは計測し得るものの平均で長辺26.8㎝、短辺20.1㎝である。スギの他に広葉樹と見られるものが、櫓状建物の西に8本ある。角材の両側に古い時期の角材を横に入れたり、杭状にして打ち込んで根元を固定している。

D期角材が南へ倒れたものが1本あり、その全長は3.35ｍある。上端は腐食していて残っていないが、残存部の端から1.2ｍ離れて縦25～28㎝、幅10㎝の貫穴が明確に残っている（図版12）。この材に連続する地下残存部分の長さは1.35ｍあるので、材木の全長はおおよそ4.70ｍあることになり、昨年の第107次調査で検出された全長4.60ｍの材木とほぼ同一の長さである。

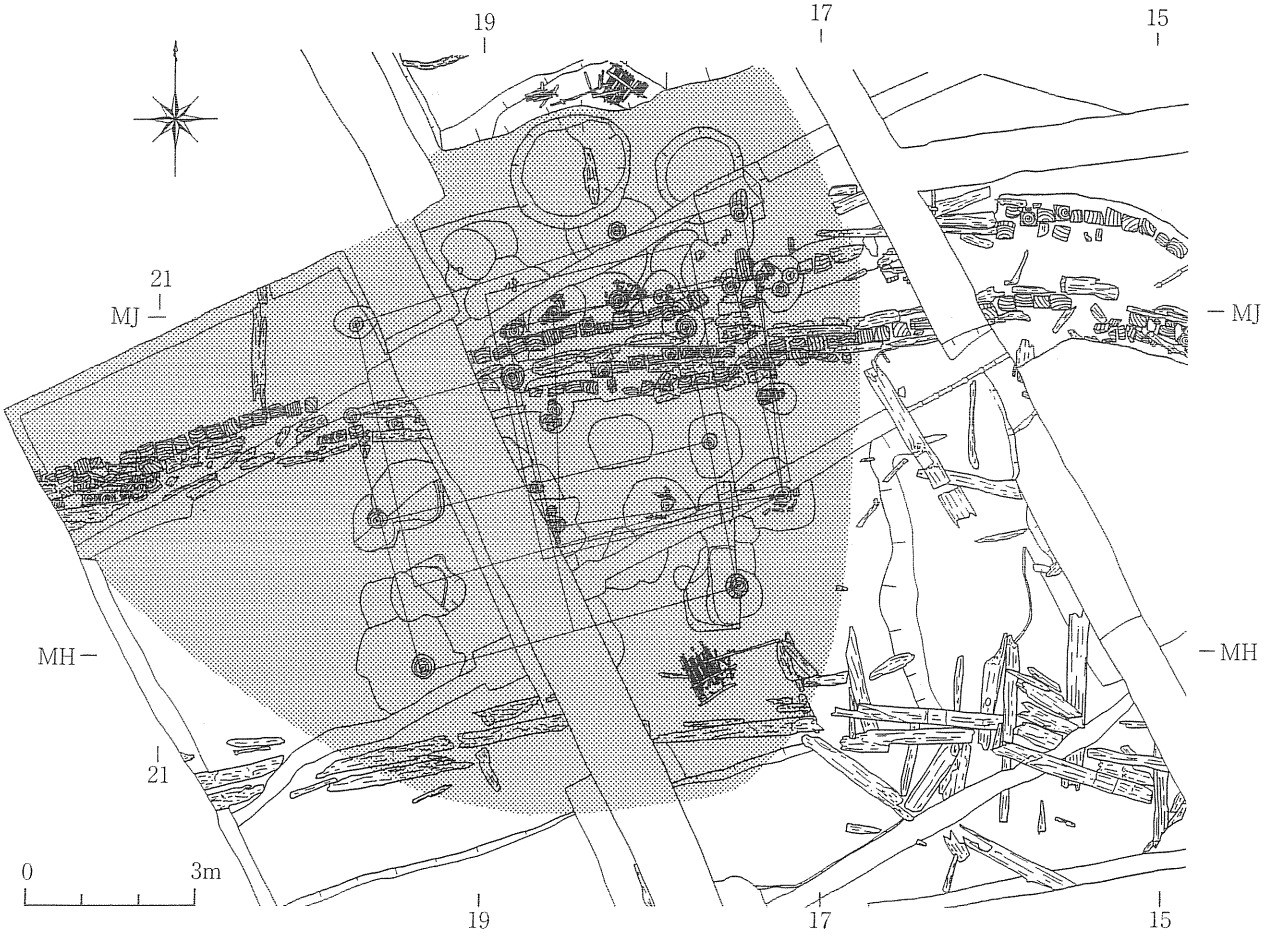
D期角材列の年輪年代測定を目的として測定に適した材木を探したが、この時期の材木はA期の角材に比べ、年輪幅が広く、年輪数が少ないものが圧倒的に多く、広葉樹の使用も増えることなどから、測定に適したものはほとんどない。かろうじて櫓状建物付近の角材から1本を選定して測定を依頼したが、測定は不可能であった。

（2）櫓状建物（第15・18・19図，巻首図版3・4，図版13～16）

①　SB1203A・B



角材列の南側にある桁行2間×梁行2間の東西棟掘立柱建物跡で、総柱である。他の柱掘形との重複関係および昨年の櫓状建物との対比から、最も古い櫓状建物であると判断される。地盤が極めて軟弱であるので、泥炭層の上に整地層を施す。整地層は黄褐色土と灰色粘土の混じった土



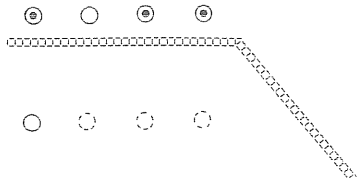
第18図　櫓状建物創建期整地層

を用い、中央部では10～20cmの厚さで、建物範囲よりも北西に拡がっていて、角材列の北側まで及んでいる（第18図）。この建物の構築に際し、最初に施した整地層であるが、柱の頂部や柱掘形は、この整地層を剝がさなければ検出できなかった。

A・B2時期あり、B期建物の規模は、桁行が北側で総長6.20m（東から3.2＋3.0）、梁行は東側では4.70m（北から2.05＋2.65）である。暗渠排水溝に切られる南側中央を除く8本の柱が残る。いずれもクリその他の広葉樹の芯材で、直径は25～48cmである。

北側中央柱は南へ、南東隅柱が東に傾くほかは、ほぼ直立している。北側3本の柱はA期角材とほぼ接して建てられているが、断ち割りを行った北側中央柱では両者の工程上の前後関係は不明である。この柱は掘形底面よりも13cm沈下している。南側の柱は建て替えにあたって柱を南に移動させている。南東隅には長さ1.24m、直径46cmのクリ材による柱根が残る。掘形内に根固めの材は全く入れられておらず、杭の打ち込みもない。SK1212やSB1207・1210によって切られている。

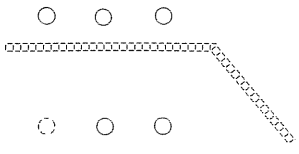
② SB1207A・B



角材列をまたぐ形の、桁行3間×梁行1間の東西棟掘立柱建物跡で、A・B2時期がある。北側に3本の柱が残存し、西から2本目の柱は抜き取られているが、掘形の底に柱の沈下によって生じた深さ20cmの凹みが残っている。また、南西隅柱掘形にも抜き取り後の柱痕跡があり、これらからB期建物の規模は、桁行総長が北側で7.2m（東から2.3＋2.3＋2.6）、梁行総長が西側で4.8mと推定される。

柱掘形は位置によって大きさが異なり、北側の東から2本目では径約1.3mの略円形であるが、北西隅柱は長軸約80cmの楕円形である。断ち割りを行った北東隅柱では検出面からの深さが70cmあり、長さ1.5m、直径33cmの広葉樹による柱が残る。柱は掘形の底よりも40cm沈下し、南西に傾いている。この柱掘形がSK1204によって切られているほか、東から2番目の柱掘形はSK1205に切られている。

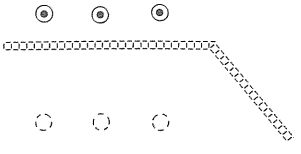
③ SB1208



角材列の北に、SB1203を切りSB1209・1210によって切られる掘形が3箇所ある。いずれにも柱は残存しないが、西端の掘形には柱を固定するための細いスギ材が打ち込まれていることから、掘形は櫓状建物の柱掘形であると考えられる。これに対応する南側の柱掘形と考えられるものが東西に並んで2箇所あり、SB1210によって切られている。

これらから、角材列をまたぐ形の、桁行（南北）1間×梁行（東西）2間の掘立柱建物跡であろうと考えられ、建物規模は、桁行総長4.8m、梁行総長3.6mほどかと推定される。

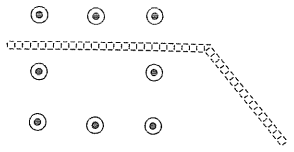
④ SB1209



角材列をまたぐ形の、桁行（南北）1間×梁行（東西）2間の掘立柱建物跡で、建物規模は北側で4.2m（2.1m等間）、東側は掘形の位置から約4.0mと推定される。A期角材列の北に接するように3箇所の柱掘形が残り、いずれにも、クリなどの広葉樹による直径26～33cmの柱が残存する。柱の周囲にはスギ杭を打ち込むが柱は南あるいは東に傾いている。断ち割りを行った北西隅柱は、長さ118cmあり、掘形の底に板状の材を3枚重ねて入れる。柱はA期角材に接するように建てられているが、北東隅柱掘形は角材を抜き上げて掘られている。この3本に対応する南側の柱は、SB1210によって切られているためか全く見られ

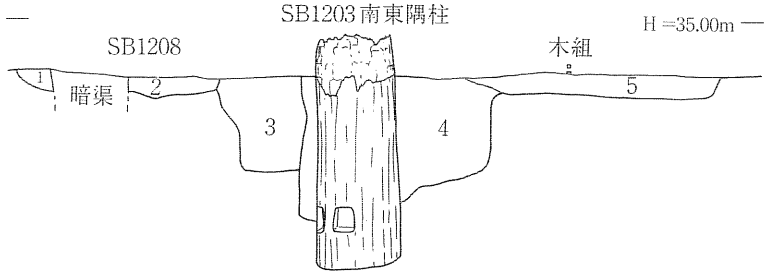
ない。

⑤　ＳＢ1210



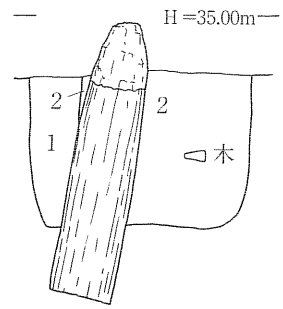
角材列をまたぐ形の、桁行（南北）2間×梁行（東西）2間の掘立柱建物跡である。表土を剝がすとすぐにＤ期角材列の頂部とともにこの建物の柱の頂部が検出された。掘形の埋土に火山灰を含んでいることからも、この建物はＤ期角材列に伴う最も新しい時期の建物である。柱掘形および柱は8箇所全てが残っている。北東隅柱の掘形内には柱材が3本入っているが、最も西の柱が桁行、梁行ともに最も柱筋が通るので、この建物の柱と考えると、建物規模は北側で4.1m（東から2.1＋2.0）、西側で3.8m（北から1.7＋2.1）である。

北東隅柱では桁と梁の交わる角度が100°あり、建物は全体に歪みが大きく平行四辺形に近い平面形を呈する。掘形は位置により大きさが異なり、南東隅柱では径1.4mほどの略円形であるが、東側中央では長軸70cm、短軸55cmの楕円形である。柱は直径20～30cmの広葉樹で、周囲にスギ材を打ち込んでいる。



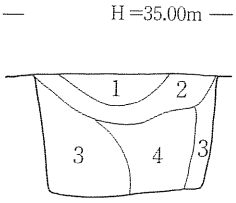
SB1203・1208

1　7.5YR3／3 暗褐色土、5GY4／1 暗緑灰色粘土。
　ＳＢ1208 柱掘形埋土
2　10YR2／2 黒褐色土に 10YR5／4 にぶい黄褐色粘土が下方に混じる。
　ＳＢ1208 柱掘形埋土
3　5GY4／1 暗緑灰色粘土と 10YR3／1 黒褐色土が混じる。
　Ａ期柱掘形
4　3層よりも 10YR3／1 黒褐色土が多い。Ｂ期柱掘形
5　10YR3／2 黒褐色土に 5GY4／1 暗緑灰色粘土が混じる。



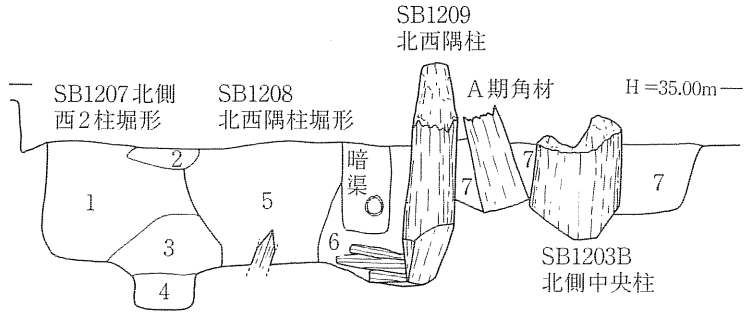
SB1207北東隅柱

1　7.5YR3／1 黒褐色土に 2.5GY4／1暗オリーブ灰色粘土が均等に混じる。Ａ期柱掘形
2　7.5YR2／1 黒色土に 2.5GY4／1暗オリーブ灰色粘土が少し混じる。Ｂ期柱掘形



SB1207南西隅柱

1　10YR2／1 黒色土
2　2.5Y2／1 黒色土
3　7.5YR2／1 黒色土
4　5YR1.7／1 黒色土、柱抜き取り痕



SB1203・1207・1208・1209

1　7.5YR2／1 黒色土、7.5YR2／2 黒褐色土、
　5GY4／1 暗オリーブ灰色粘土が混じる。
2　7.5YR3／2 黒褐色土柱抜き取り穴の一部
3　7.5YR1.7／1 黒色土、柱痕跡
4　10YR2／2 黒褐色土を主体に 5GY4／1 が少し混じる。
5　1層よりも 5GY4／1 暗オリーブ灰色粘土が多く入る。
6　10YR3／2 黒褐色土と 5GY4／1 暗オリーブ灰色粘土が混じる。
7　5YR3／1 黒褐色土

0　1m

第19図　櫓状建物土層断面図

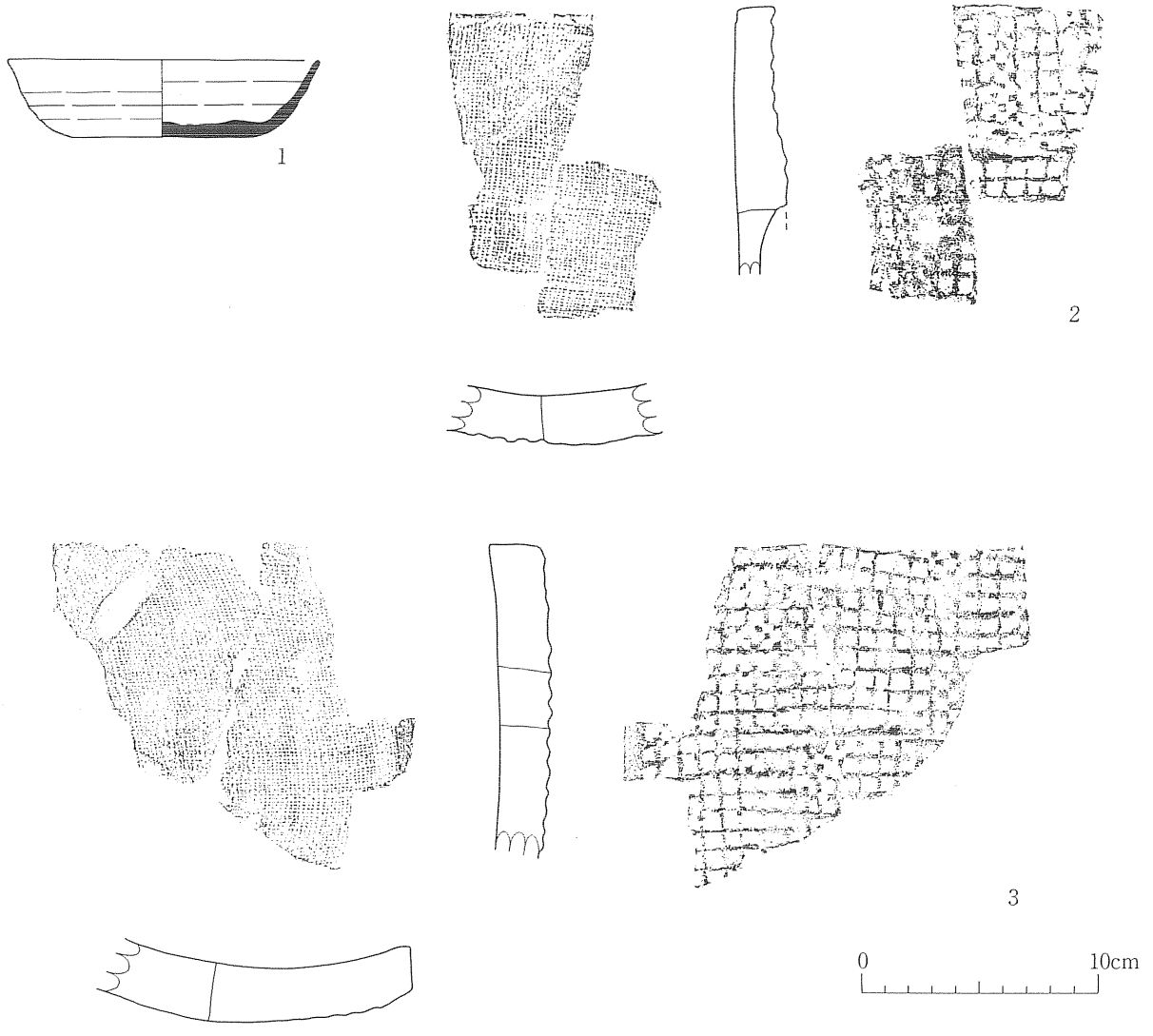
櫓状建物の南北2箇所に細いスギ材を用いた木組がある（図版17）。北側のそれは、ＳＤ1145に向かってわずかに落ち込む斜面にあり、最長65cm、幅2cmの細い材15本に同様の材が直角に交わっている。これらとは別に、長さ110cmのものや、少し離れた位置に同じような細い材が7本まとまって見られる。このほかに先端を尖らしたやや太い杭が2本ある。

南側のそれは、ＳＢ1203Ｂ建物の南東隅柱掘形を少し掘り込み、東西2.5ｍほどの範囲で青灰色粘土が分布する中にある。長さ60～80㎝、幅2～3㎝の偏平な細い材が19本あり、これを長さ1.8ｍの細い材が両側から挟む。これらとは別に長さ75㎝と90㎝のやや太い材が2本あり、これは先端を杭状に尖らしている。

これらの材の縦横の交点に紐などは残っていないが、元来は緊縛されていたものと考えられる。

ＳＢ1207北側西2柱掘形と、それに隣接するＳＢ1208北西隅柱掘形から出土した須恵器杯の破片が接合した（第20図1）。2・3（図版25－1・2）は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に格子叩き目があり、側縁にはヘラケズリ調整を施す。2はＳＢ1203北東隅柱掘形とＳＢ1210南側中央柱掘形から出土したものが接合、3はＳＢ1203西妻柱掘形や、整地層中などから出土したものが接合した。

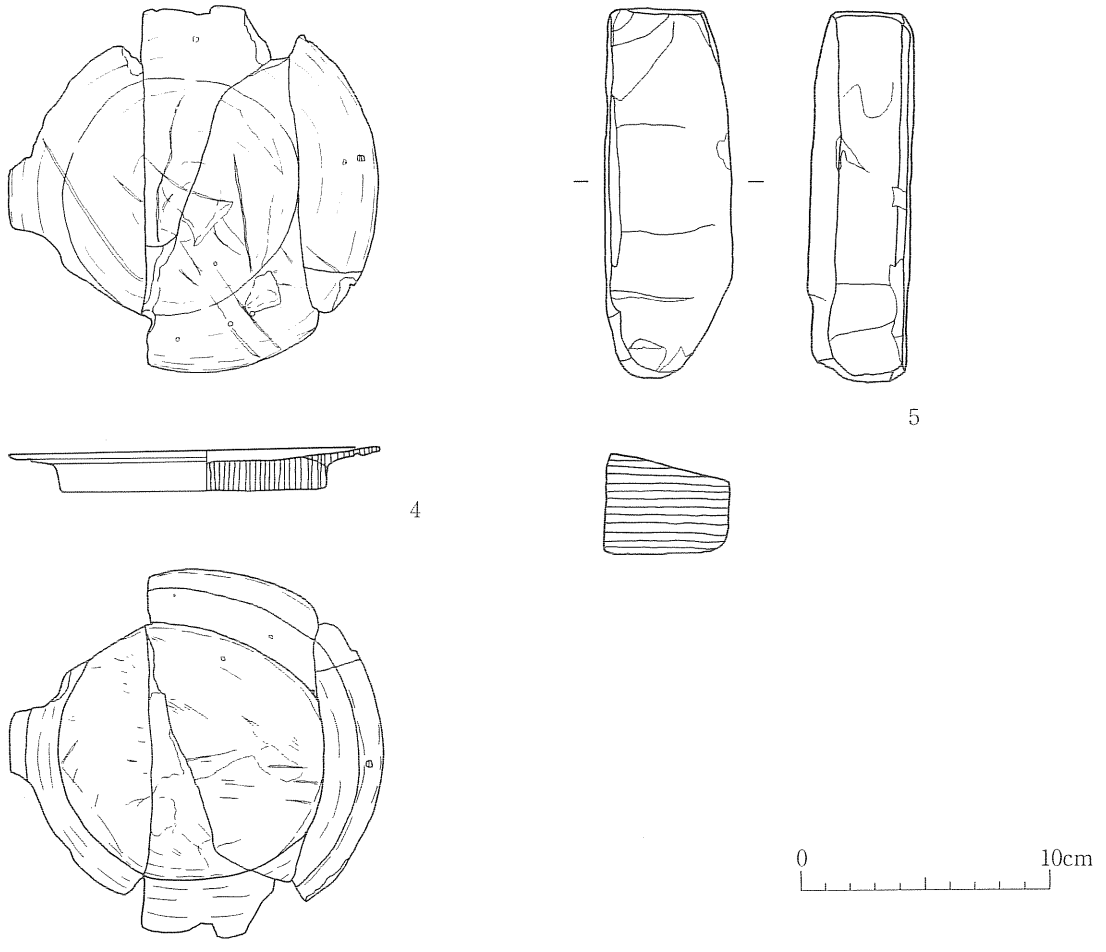
木製品としては挽物皿（第21図4，図版25－3）と楔（5，図版25－4）がある。4は器厚が薄く、高さ約1㎝の高台が付き、縦木取りである。3とともに北西隅柱掘形から出土した。5は割材を用い、刃部は両面から削って作り出している。ＳＢ1210の南側中央柱掘形から出土した。



番号	種　別	器形	特　徴	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
1	須恵器	杯	外面：ロクロナデ一回転ヘラ切り。 内面：ロクロナデ	13.1	7.8	3.3	0.59	25.1	27°	

番号	種　別	特　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
2	平　瓦	凹面：布目痕、凸面：格子叩き目。	11.2	9.2	2.3	25－1
3	平　瓦	凹面：布目痕、凸面：格子叩き目。	13.1	13.3	2.3	25－2

第20図　櫓状建物出土遺物（1）



番号	種　別	特　　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
4	挽物・皿	高さ約1cmの高台が付く。縦木取り。	口径 15.4	口径 10.7	0.3	25－3
5	楔	刃部は両面から削る。	14.9	5.1	4.1	25－4

第21図　櫓状建物出土遺物（2）

（3）溝（第22図，図版18・19）

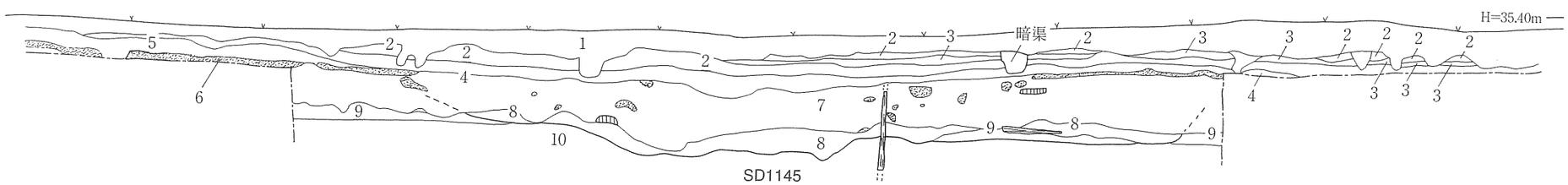
①　SD1145

角材列の北に平行して東西方向に掘られた溝で、昨年までは主として上面での検出と一部トレンチによる掘り下げによって調査して来た。今回は外郭北門の正面の位置に当たるので、門の北へ連なる道路状遺構や橋の存在を念頭に入れ、東西29mにわたり溝底まで面的な掘り下げを行った。溝はなおも西に延びている。

上面幅3.5～4.3mであるが、門正面にあたる調査区東端の土層断面では約6.0mの幅を確認でき、この位置では当初は他の箇所よりもやや広く設定したらしい。深さは溝の外に水平に堆積する火山灰層から測ると約60cmで、底面は幾分丸みを帯びて中央部が最も低い。堆積土は植物を多く含む黒褐色泥炭が主体で、溝の底部にはスギ材加工時に生じる材木の断片が多く含まれている。

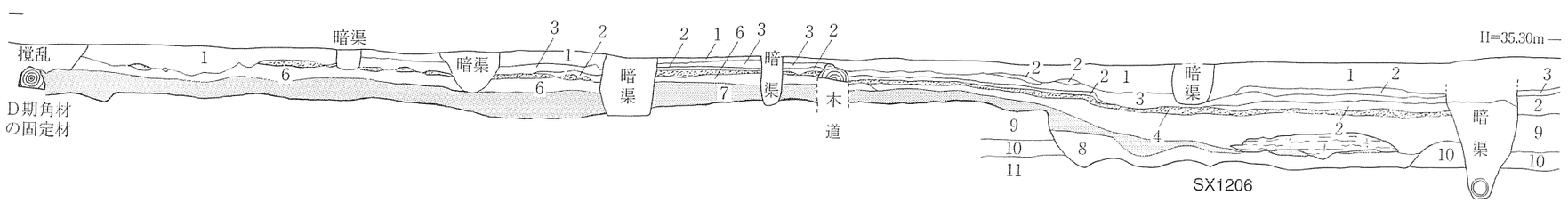
火山灰は昨年までの調査では溝底より40～50cm上位に連続して1枚の層をなして堆積していたが、外郭北門付近に至って細かく乱れている様子が観察された。今回も外郭北門の正面では細かく途切れ、溝底付近まで達している。

調査区東端MN10～ML10グリッド内土層断面



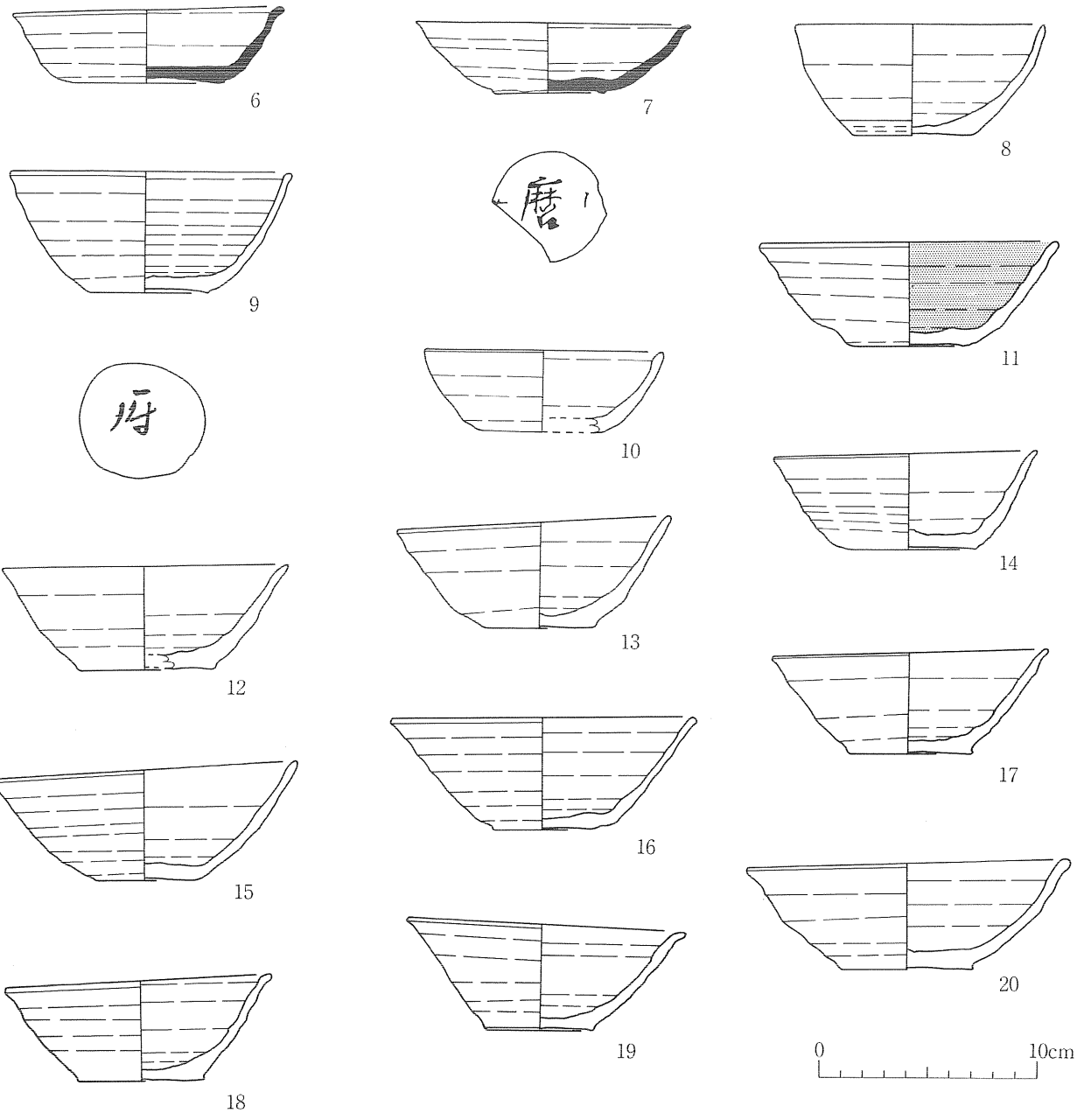
1　2.5Y3／1 黒褐色水田畦畔
2　10YR2／1 黒色泥炭、植物を多く含む
3　10YR1.7／1 黒色泥炭、植物を多く含む
4　7.5YR1.7／1 黒色泥炭、植物を多く含む
5　10YR2／2 黒褐色泥炭
6　10YR5／6 黄褐色火山灰
7　色は4層と同一だが、泥炭の植物が少ない。火山灰が、塊にならなくとも全体に入っている。
8　7.5YR1.7／1 黒色土に2.5GY4／1 暗オリーブ灰粘土2.5Y3／1 黒褐色粘土が混じる。杉材の断片、枝などを多く含む
9　7.5GY4／1 暗緑灰粘土
10　7.5GY4／1 暗緑灰砂質土

MI19～MF17グリッド内土層断面



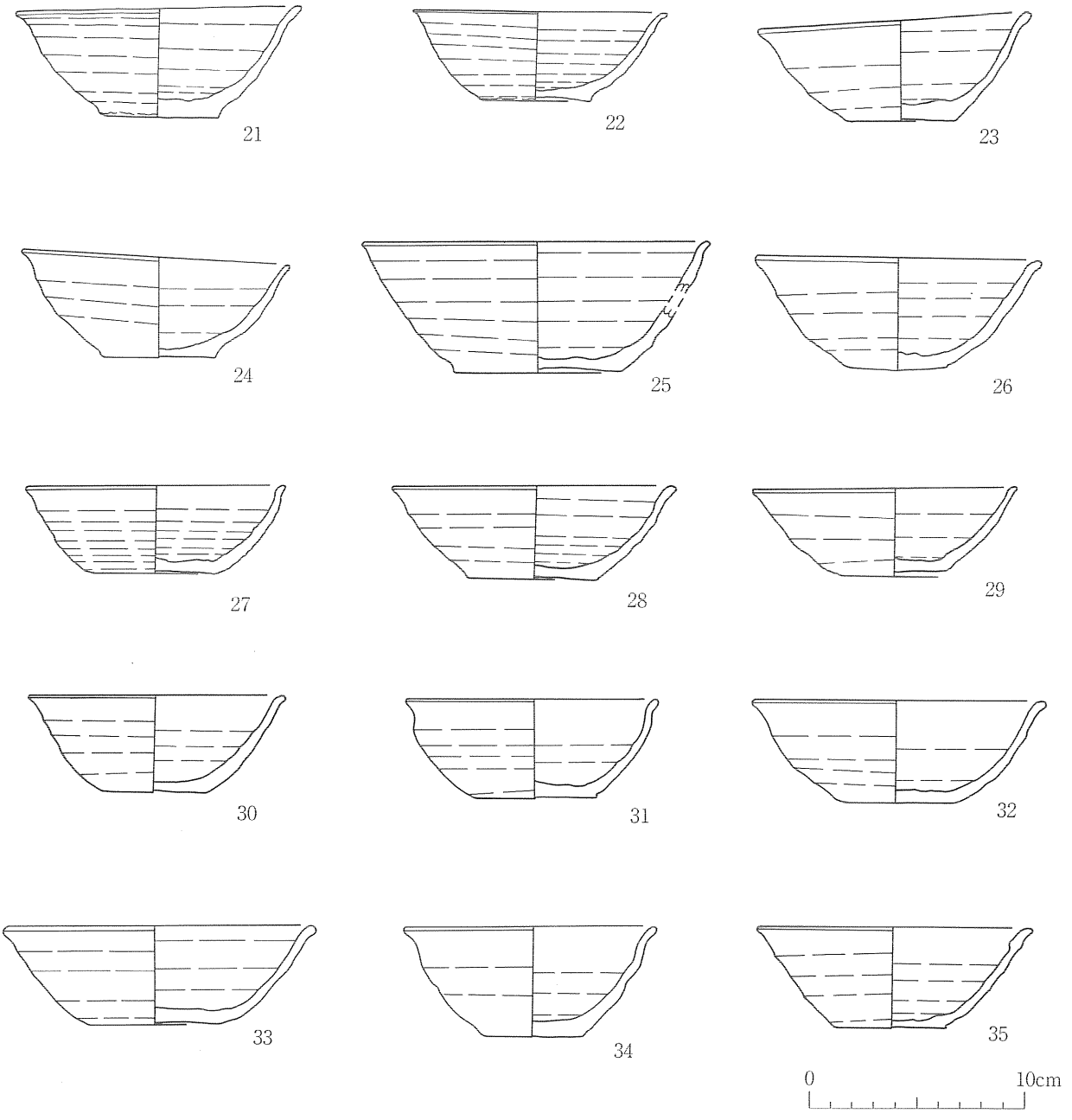
1　2.5Y3／1 黒褐色耕作土
2　7.5YR2／1 黒色泥炭
3　5YR1.7／1 黒色泥炭
4　10YR2／2 黒褐色泥炭
5　10YR2／2 黒褐色泥炭
6　10YR2／3 黒褐色粘質土、7層よりやわらかい。整地層の上の堆積土
7　10Y4／3 にぶい黄褐色ないし、2.5GY4／1 暗オリーブ灰色粘土。整地層
8　7.5YR1.7／1 黒色泥炭と10YR2／2 黒褐色泥炭に2.5GY4／1 暗オリーブ灰色粘土が少し混入する。
土器、木簡、木材加工時に生じる木片出土
9　7.5YR1.7／1 黒色泥炭
10　10YR2／2 黒褐色泥炭
11　2.5GY4／1 暗オリーブ灰色粘土

第22図　土層断面図



番号	種　別	器形	特　　徴	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
6	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り、底部に細い線で十字の刻書あり、墨付着 内面：ロクロナデ、墨付着、底部磨滅	12.5	6.7	3.6	0.53	28.8	34°	26－1
7	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り、底部に墨書「磨」、体部に墨痕あり 内面：ロクロナデ、全体に墨が付着。	12.5	5.0	3.4	0.40	27.2	40°	26－2
8	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り→回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	11.4	5.4	5.1	0.47	44.7	25°	
9	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り、底部に墨書「厨」 内面：ロクロナデ	12.9	5.6	5.6	0.43	43.4	26°	26－3
10	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	10.9	5.8	3.8	0.53	34.8	25°	
11	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ、黒色処理	13.7	5.1	4.8	0.37	35.0	33°	26－4
12	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ、底部に近い所に稲籾圧痕あり。	13.2	6.0	4.8	0.45	36.3	32°	
13	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.6	5.0	5.2	0.39	41.2	31°	
14	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.1	6.0	4.6	0.49	38.0	25°	26－5
15	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	14.4	4.4	5.5	0.30	38.1	35°	26－6
16	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	14.1	4.5	5.2	0.31	36.8	35°	
17	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.6	5.4	4.9	0.42	38.8	32°	26－7
18	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り、煤状物質付着 内面：ロクロナデ	12.3	5.8	4.9	0.47	39.8	33°	26－8
19	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.8	4.8	5.1	0.37	39.8	34°	26－9
20	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	14.8	5.9	5.1	0.39	34.4	37°	26－10

第23図　ＳＤ1145出土遺物（1）

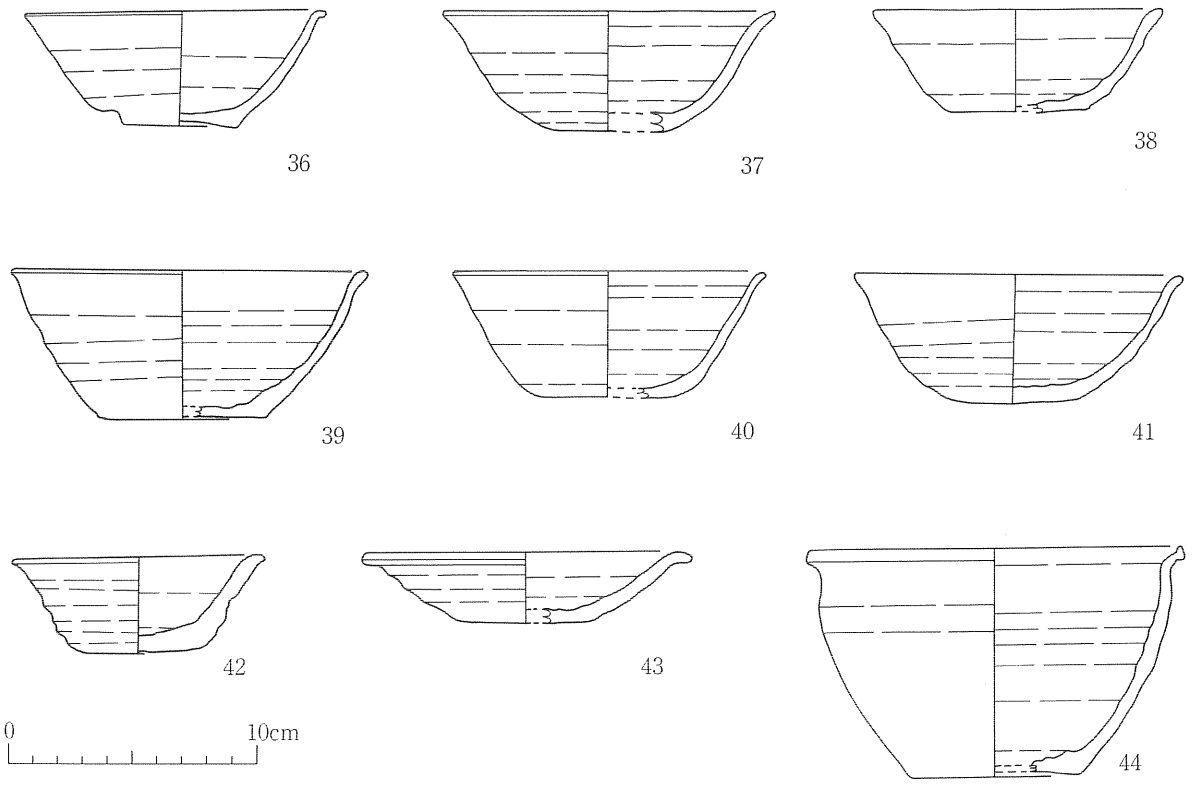


番号	種　別	器形	特　　徴	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
21	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.1	5.4	5.2	0.41	39.6	31°	27－1
22	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.7	5.0	4.2	0.42	51.2	33°	27－2
23	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.6	5.0	5.1	0.39	40.4	31°	27－3
24	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.3	5.3	5.0	0.43	35.7	31°	27－4
25	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り、煤付着 内面：ロクロナデ、煤付着	16.0	7.6	6.1	0.47	38.1	28°	27－5
26	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.2	4.4	5.4	0.33	40.9	33°	27－6
27	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.0	5.4	4.2	0.45	35.0	27°	27－7
28	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.2	5.9	4.5	0.44	34.0	33°	27－8
29	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り、底部に稲籾圧痕が３ケ所あり 内面：ロクロナデ	12.2	4.5	4.2	0.36	34.0	35°	
30	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.9	4.7	4.7	0.39	39.4	31°	27－9
31	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.6	5.3	4.7	0.45	40.5	24°	
32	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.6	5.3	4.8	0.38	35.2	32°	27－10
33	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	14.4	6.0	4.6	0.41	31.9	36°	
34	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.7	4.5	5.2	0.38	44.4	28°	27－11
35	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.8	5.0	4.7	0.39	36.7	35°	27－12

第24図　ＳＤ1145出土遺物（２）

溝の底よりわずかに上位に、長さ約2ｍ、太さ10～20㎝の広葉樹の丸太が3本、幅約60㎝で溝に対し直角方向に並んで検出された。また、その付近の溝の南縁に打ち込む杭も見られる。これらは門の正面の位置にあるので、溝を渡るための施設の一部であろうと推定される。しかし、これと関連する橋脚や道路状の遺構は特に検出されなかった。

第23図6（図版26－1）は完形の須恵器杯で、上半部が灰色、下半部は褐色を呈す。底部切り離しは回転糸切りである。底面に細い線で十字の刻書がある。内外両面に墨が付着し、内面底部が磨滅しているので、硯に転用したものであろう。7（図版26－2）も須恵器で、底部切り離しは回転糸切りによる。内面全体に墨が付着し、外面の体部にも墨痕がある。底面に「麿」の墨書がある。ＳＢ1210南側中央柱掘形など5箇所から出土した破片が接合した。第23図8～第25図42は土師器杯で、底部切り離しは全て回転糸切りによる。8～10は、底部から体部がやや内湾ぎみに立ち上がるもので、8は底部周縁に回転ヘラケズリによる再調整を施す。9（図版26－3）は底面に「厨」の墨書がある。11～17は口縁部の外反の度合が少なく、体部が直線的であるが、他は体部が膨らみ、口縁部が外反する。11（図版26－4）は内面に黒色処理を施す。第24図25は内外両面に煤状の物質が付着している。42（図版27－16）は内面に同様の物質が付着している。第25図43（図版27－17）は土師器皿、44は小型の甕である。



番号	種　別	器形	特　　徴	口径（㎝）	底径（㎝）	器高（㎝）	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
36	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.1	4.5	4.8	0.37	39.6	31°	27－13
37	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.2	4.8	4.8	0.36	36.4	33°	
38	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.6	5.4	4.1	0.46	35.3	27°	
39	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	14.3	6.7	6.2	0.46	43.0	26°	27－14
40	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.5	5.4	5.1	0.43	40.8	28°	
41	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.2	5.3	5.2	0.40	39.3	31°	27－15
42	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ、煤状物質付着	10.1	5.0	4.1	0.50	40.2	30°	27－16
43	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.2	5.2	2.9	0.39	21.9	52°	27－17
44	土師器	甕	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ、煤状物質付着	15.0	6.8	9.2	0.45	61.3	18°	

第25図　ＳＤ1145出土遺物（3）

木製品や、木材加工時に生じる木片が最下層から出土した。

横槌（第26図45，図版28－1）

クリの割材を用い、身と柄が明確に分かれる。身は断面が三角形で、平坦面のほか三角の端部に敲打による凹みが見られる。

木錘（第26図46，図版28－2）

丸太材を用い、一端を削って尖らすが、他の一端は平坦である。両方に丸木面を残し、中央部の半分を両側から削り込んでいる。

楔（第26図47，図版28－3）

割材を用い、頭頂部から刃部に向かってわずかに幅が狭くなる。刃部を欠損する。

箆（第26図48，図版28－4）

細長の身で、先端を欠く。これをさらに細く削って柄を作り出している。

挽物（第26図49・50，第27図51～53，図版28－5，29－1～3）

49は高台部で、高さ2㎝ある。底面には工具による削り痕、側面にロクロ目が見られる。50は、低い高台の付く皿で内外両面に黒漆をかける。51・52も高台の付く皿、53は高台の付かない皿である。

その他の木製品（第27図54～58，第28図，図版29・30）　54（図版29－4）は薄い板材の一端を柄のように丸く削り出す。55（図版29－5）は一側縁にV字状の切り込みを並べる。56（図版29－6）は先端を細く尖らせる。斎串か。57（図版29－7）は柄のある篦状工具のようにも見えるが柄の身の両側に途中まで切り込みを入れる。58（図版29－8）は薄板の両側にV字状の切り込みを1箇所づつ入れる。両端欠損。59（図版30－1）は 細長の材の両端を両側から削って細くする。
容器の把手か。60（図版30－2）は断面が楕円形となるように全体を削り、先端も篦先状に丸く加工する。上部折損。61（図版30－3）は材の一端を丸く加工する。62（図版30－4）は長さ58㎝、幅18.2㎝のスギ板で、両側から7㎝の幅で相対する抉りを入れる。

絵馬（第29図63，図版30－5）

調査区東端の溝底部から出土したもので、横18.5㎝、縦9.6㎝、厚さ0.5㎝の長方形のスギ板に、墨で馬の側面像を描く。分断されて3片が残るが後肢部分を欠く。上部中央に小孔があり、紐で懸け吊したか、釘で打ち付けられていたと考えられる。墨線は板面よりも盛り上がっている。馬は左向きで、右の前肢を上げている。たてがみは太い線で描くほか、細い線でも1本づつ描く。背には鞍が乗り、2本の手綱も表現する。体部に斑点があり、尾は少し上に上げる。木目に沿って割れているほか、木目に直交する方向や釘孔を中心に折れていることから、意図的に破損して溝内に捨てたものと考えられる。

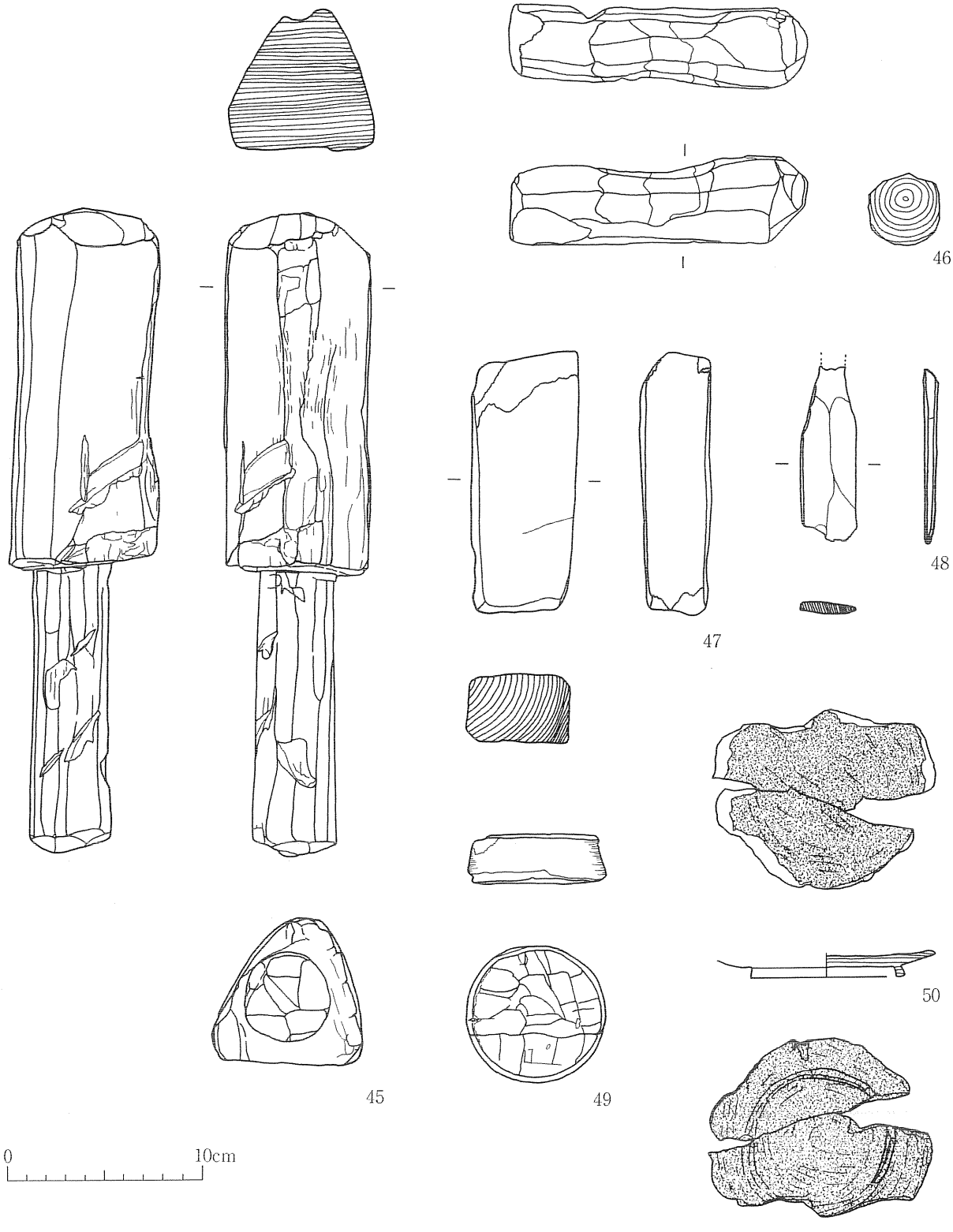
このほか第86～89号木簡が溝最下層から出土した（付編参照）。

（4）木　道（巻首図版3・4，図版13・19）

①　SX1202

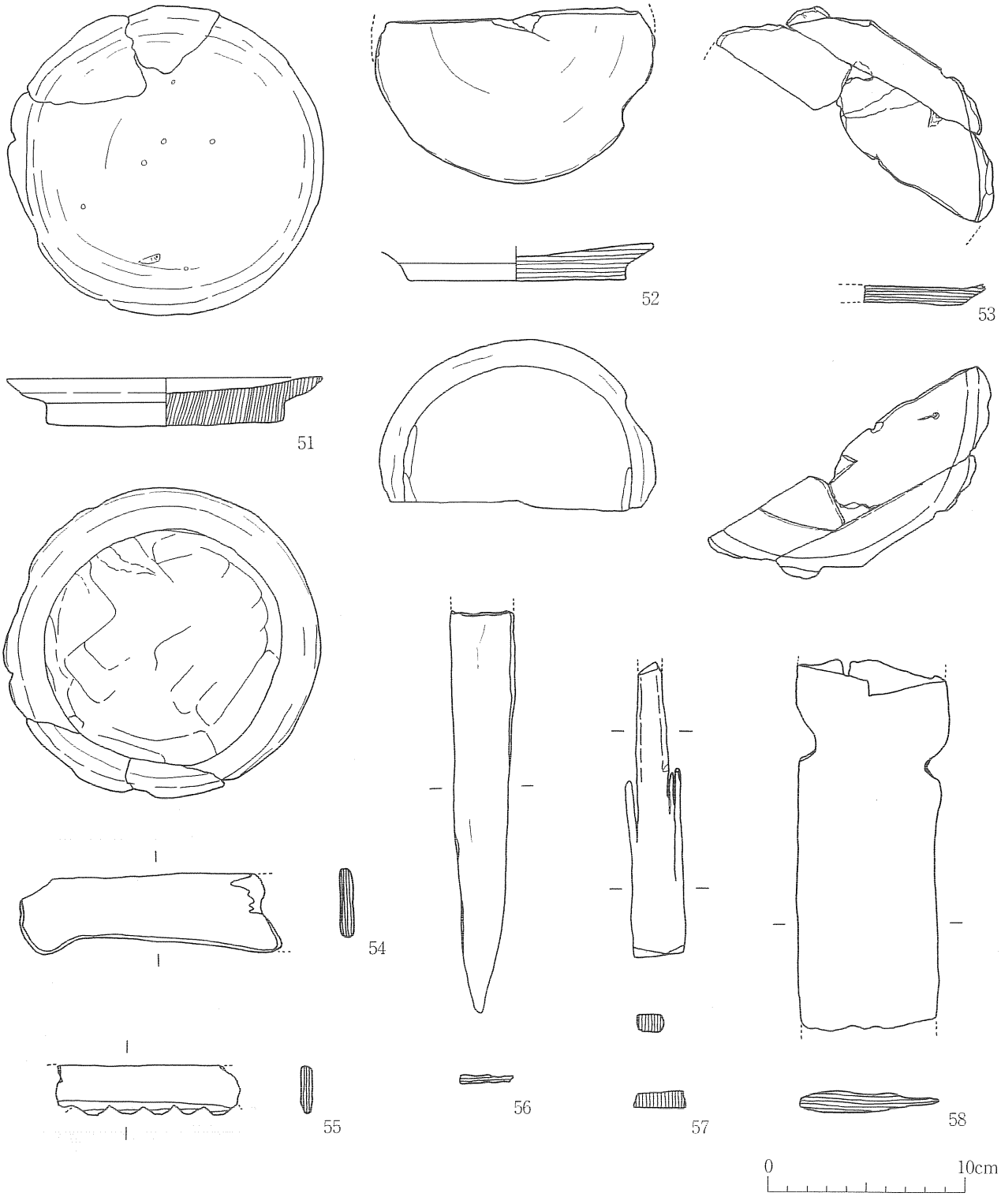
角材列の南にあり、その内側を歩行するための木道である。角材列は櫓状建物付近の東では門に向かって弧を描いているが、建物付近から西では直線状となっていて、この木道もそれらと同様の形状をなす。

材木は腐食が激しいが、弧状となる位置では長さ3.1ｍのものが最も長く、幅は25～30㎝あり、幅約30㎝の貫穴が凹みとなって残っているものが3本ある。貫穴のあるものは外郭線角材からの転用材であろう。部分的に4列になっている所もあり、ここでは木道の幅が1.5ｍほどとなる。



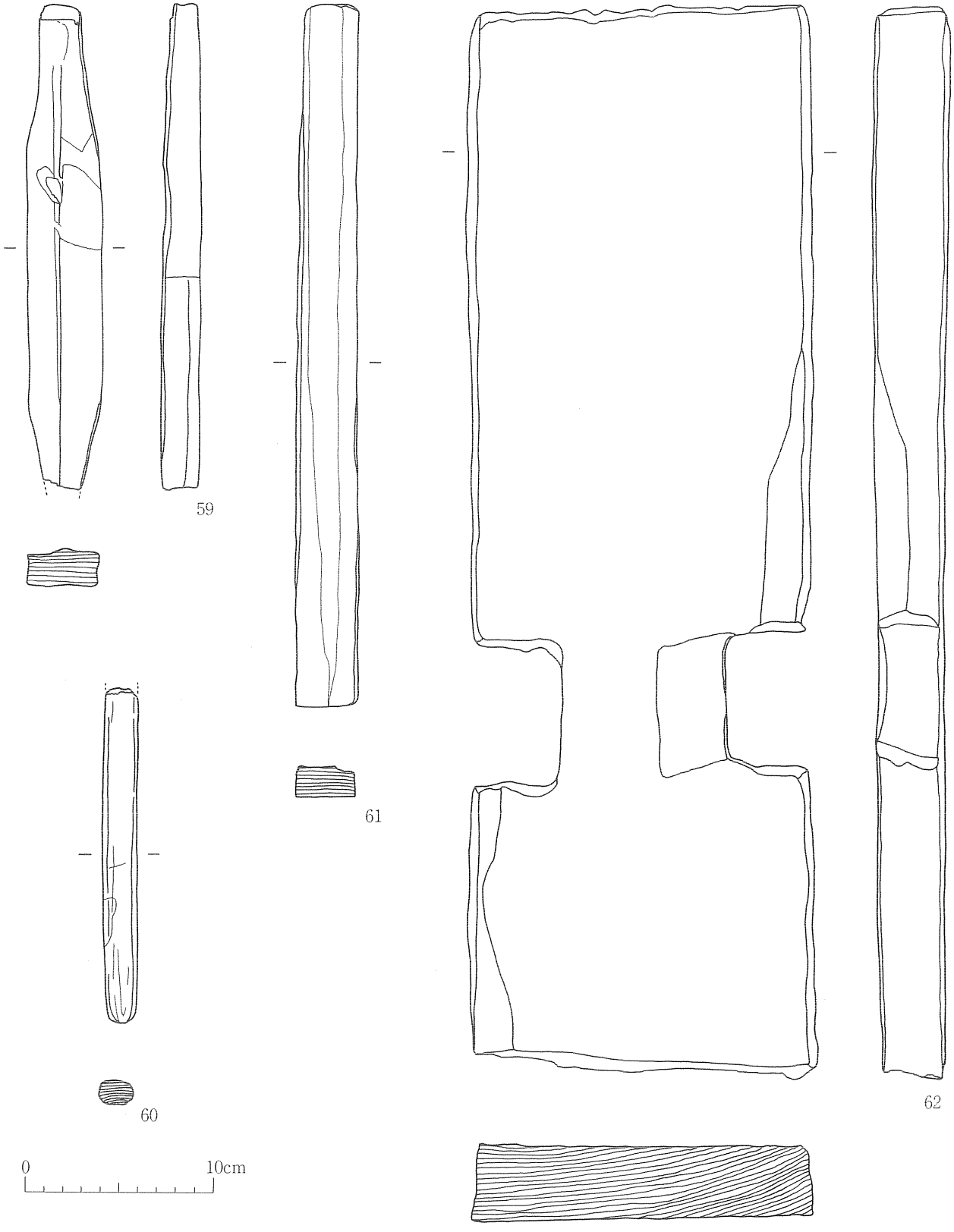
番号	種　別	特　　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
45	横　槌	身は断面が三角形で、三角の端部に敲打による凸みがある。	33.0	7.5	7.2	28－1
46	木　錘	一端を削って尖らす、中央部の半分を両側から削り込んでいる。	10.1	4.5	4.1	28－2
47	楔	刃部破損。	13.3	5.4	3.5	28－3
48	篦	細長で先端を欠く。	8.9	2.8	0.6	28－4
49	挽物・高台	底面に工具による削り痕、側面にロクロ目がある。	7.0	7.0	2.0	
50	挽物・皿	低い高台が付き、内外両面に黒漆塗り。	口径 11.0	底径 7.7	0.6	28－5

第26図　ＳＤ1145出土遺物（４）



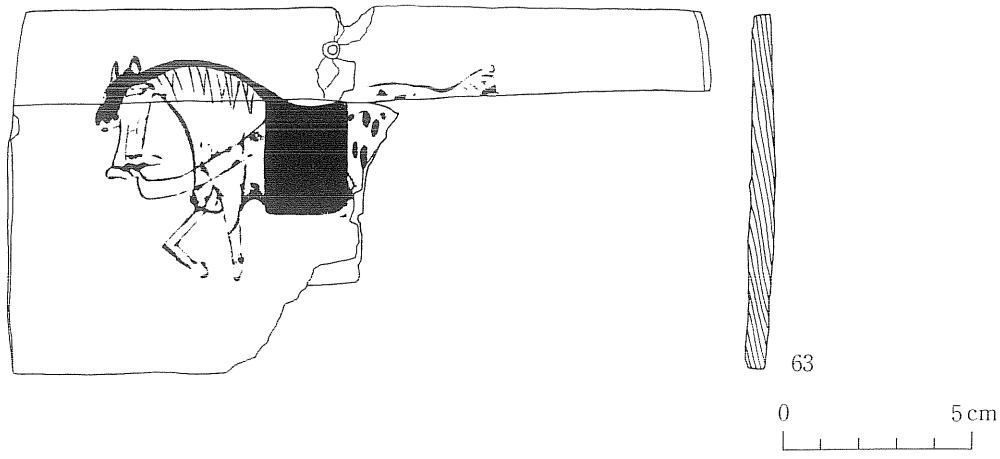
番号	種　別	特　　徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図　版
51	挽物・皿	高台が付く。	口径 16.0	底径 11.9	1.6	29－1
52	挽物・皿	高台が付く。	口径 14.1	底径 10.8	1.2	29－2
53	挽物・皿	高台なし。			0.9	29－3
54	不　明	薄い板材の一端を柄のように丸く削り出す。	13.2	4.1	0.6	29－4
55	不　明	一側縁にＶ字状の切り込みを並べる。	9.3	2.5	0.6	29－5
56	不　明	先端を細く尖らせる。斎串か。	20.5	3.3	0.5	29－6
57	不　明	柄の身の両側に途中まで切り込みを入れる。	15.1	2.6	1.0	29－7
58	不　明	薄板の両側にＶ字状の切り込みを１箇所ずつ入れる。両端欠損。	18.7	7.6	0.9	29－8

第 27 図　ＳＤ1145 出土遺物（５）



番号	種　別	特　　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
59	不　明	細長の材の両端を両側から削って細くする。容器の把手か。	25.7	3.9	2.0	30－1
60	不　明	断面の楕円形となるように全体を削り、先端も篦先状に丸く加工。上部破損。	17.7	1.9	12.0	30－2
61	不　明	材の一端を丸く加工。	37.3	3.4	1.6	30－3
62	不　明	両側から7㎝の幅で相対する抉りを入れる。	57.0	24.5	4.2	30－4

第28図　ＳＤ1145出土遺物（6）



第29図　ＳＤ1145出土遺物（7）

材木の下には、これと直交するように別の材木が入れられている。元来泥炭地で地盤が軟弱である上に、ＳＸ1206の掘り込みの上をこの木道が通っていて、いっそう軟弱であるので、木道の沈下を防ぐために採られた措置であろう。木道が直線状となる調査区の西方ではＳＸ1206の北を通っているので、そうした措置は施されていない。また、この付近での木道は明確に3列になっていてその幅は約1ｍ、Ｄ期角材列との距離は5.5～6ｍである。

外郭北門の調査区内では材木が見られないので、この木道の東端が門に取り付く位置の状況は不明である。

材木は十和田ａ火山灰層に覆われているので、火山灰降下よりは古い時期に作られたことが明らかである。火山灰はＣ期角材列の存続期間中に降下しているので、木道の転用材そのものはＡ期またはＢ期のものを使用していることになる。しかし、Ａ期角材列は建て替えにあたって抜き上げられることなく布掘り内に残存しているので、Ｂ期角材列からの転用と考えることができ、したがって、この木道はＣ期角材列に伴って作られ、Ｄ期角材列の時期にも引き続き使用されていたと考えられる。

（5）　土　坑

①　ＳＫ1204（第30図，図版20）

櫓状建物とＳＤ1145溝の間にあり、長軸1.7ｍ、短軸1.55ｍの楕円形で、深さは25㎝ある。底面はおおよそ平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。火山灰層を切っており、火山灰降下後の遺構である。暗渠排水溝によって切られている。

木製品が2点出土した。第31図64（図版31－1）は一端を側面から削って細くする。楔であろう。65（図版31－2）は台形状の身に細い柄が付く。上部は鋸によって切断されている。

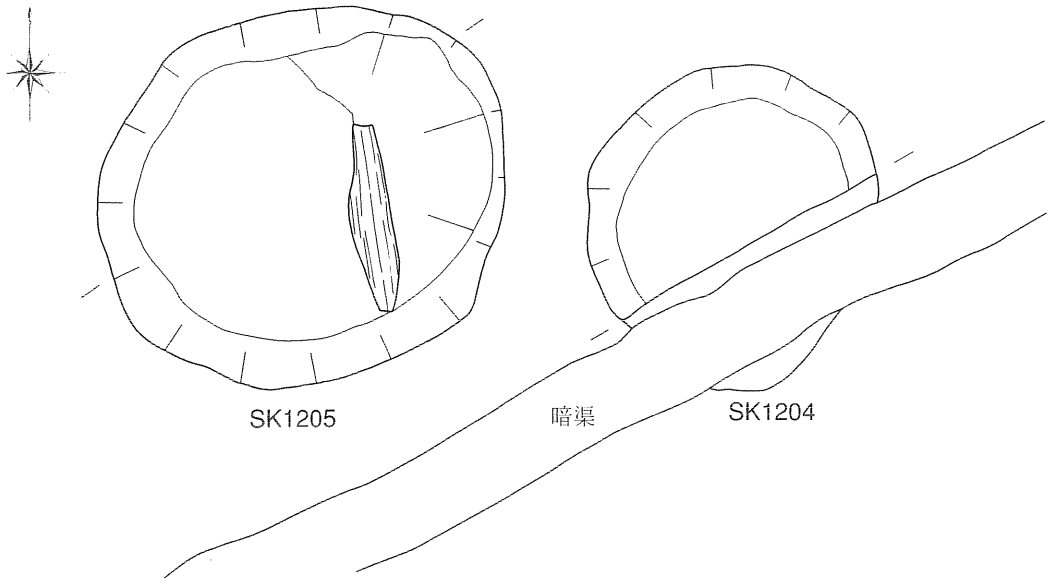
②　ＳＫ1205（第30図，図版20）

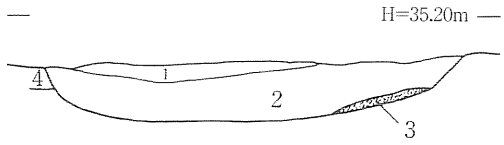
ＳＫ1024の西に並び、長軸2.3ｍ、短軸1.95ｍの楕円形で、深さは35㎝である。中央部が最も低く、壁はなだらかに立ち上がる。火山灰が底面に堆積していて、火山灰降下時には存在した遺構である。

木製品が1点出土した。第31図66（図版31－3）は台形状の身に細い柄が付く。

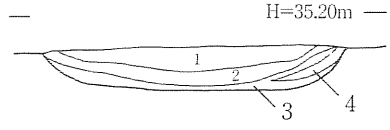
③　ＳＫ1211（第30図，図版21）

角材列の内側、櫓状建物と重複する位置にある。長軸1.1ｍ、短軸0.9ｍの東西に長い略方形で、深さは検出面より38㎝、底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

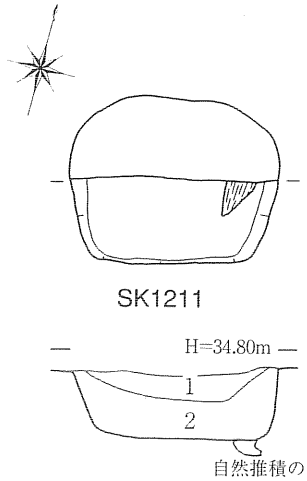




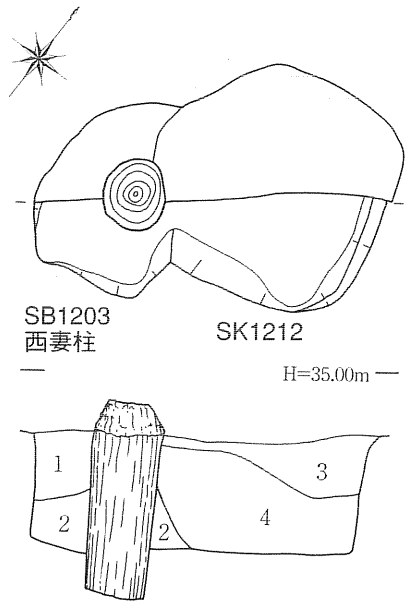
1　10YR1.7／1 黒色土
2　10YR2／3 黒褐色泥炭、植物を多く含む
3　10YR4／3 にぶい黄褐色火山灰



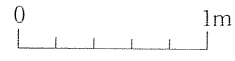
1　10YR2／2 黒褐色土
2　10YR1.7／1 黒色土
3　10YR2／3 黒褐色泥炭、植物を多く含む
4　10YR3／2 黒褐色土



1　7.5YR3／2 黒褐色土
2　10YR2／1 黒色土に 5GY4／1 暗オリーブ灰粘土、
7.5YR1.7／1 黒色土混入



1　7.5YR2／1 黒色土に 2.5GY4／1
暗オリーブ灰粘土が少し混じる
2　7.5YR2／1 黒色土よりも 2.5GY4／1
暗オリーブ灰粘土が多く混じる
3　10YR2／1 黒色土に 2.5GY4／1
暗オリーブ灰粘土が上方東寄りに混じる
4　10YR2／1 黒色土に 2.5GY4／1
暗オリーブ灰粘土が下方に少し混じる

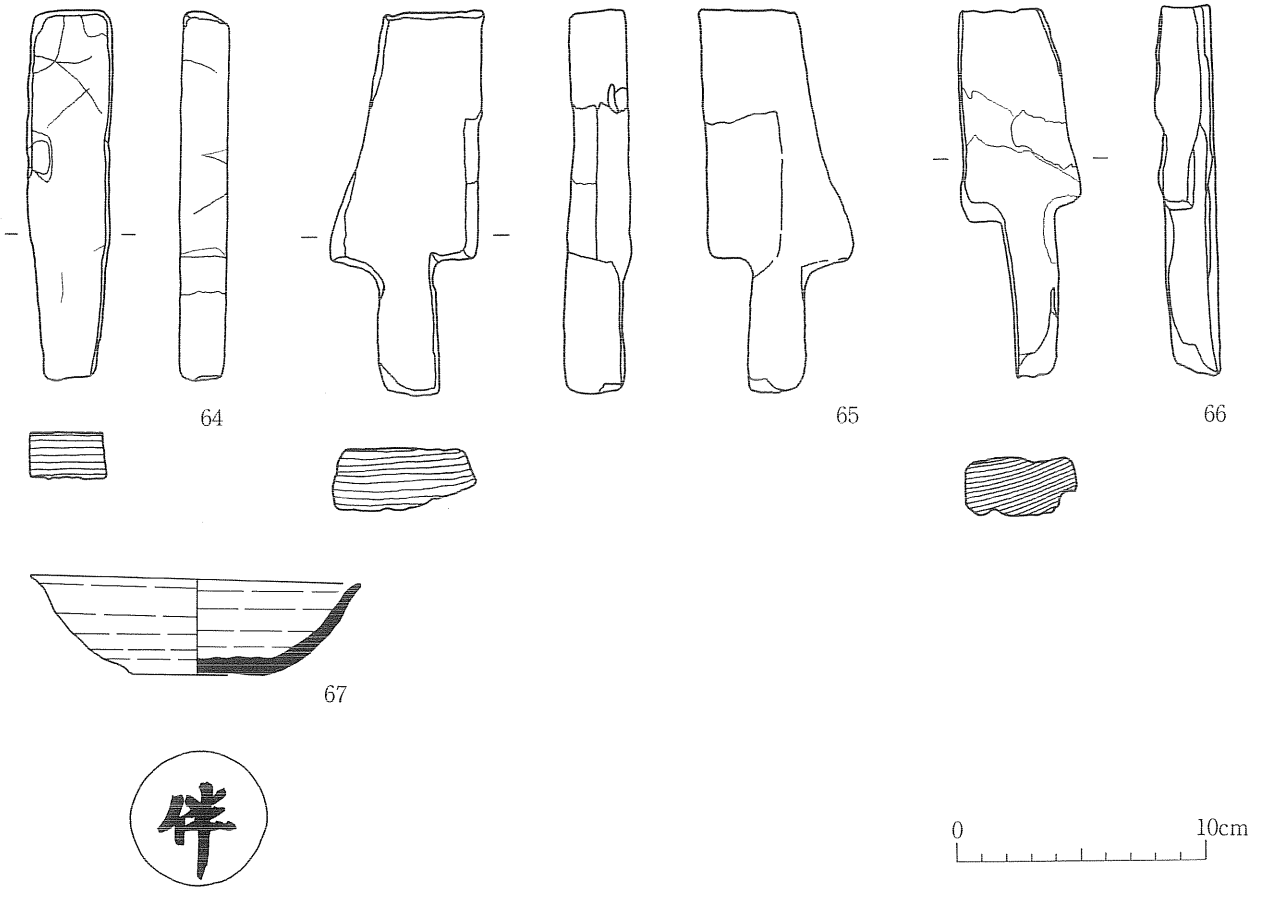


第30図　ＳＫ1204・1205・1211・1212

④　ＳＫ1212（第 30 図，図版 16）

ＳＫ1211 の西約３ｍにある。長軸 1.30ｍ、短軸 1.20ｍの略円形で、深さは検出面より 62㎝あり、底面は平坦で、壁は西側のみ幾分傾斜して立ち上がる。ＳＢ1203 櫓状建物の西妻柱の掘形を切っている。

遺構上部から完形の須恵器杯が１点出土した（第 31 図 67，図版 31－４）。底部切り離しは回転糸切りで、底面に「伴」の墨書がある。



番号	種　別	特　　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
64	不　明	一端を側面から削って細くする。	14.8	3.4	1.9	31－１
65	不　明	台形状の身に柄が付く。上部は鋸によって切断。	15.3	6.2	2.5	31－２
66	不　明	台形状の身に細い柄が付く。	14.8	4.8	2.4	31－３

番号	種　別	器形	特　　徴	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
67	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り。底部に墨書「伴」 内面：ロクロナデ	13.1	5.4	4.0	0.41	30.5	37°	31－４

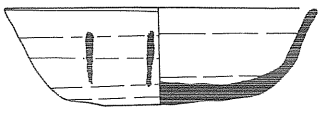
第 31 図　土坑出土遺物

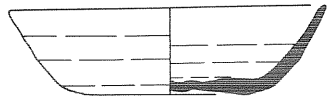
（６）その他の遺構

①　ＳＸ1206（第 15・22 図，図版 21）

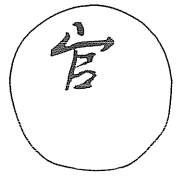
櫓状建物の東側と南側にある溝である。東側の溝は長さ６～8ｍ、幅約 2.5ｍ、深さ 40㎝あり、北端は角材列に達している。南側の溝の長さは少なくとも約 12ｍあり、西端は調査区外に及ぶ。幅約 2.8ｍ、深さ 40㎝である。ＳＸ1202 木道の下は掘り下げができないが連続して逆Ｌ字形となっているものと思われ、昨年の櫓状建物の西側と東側を区切るＳＸ1192 とは外郭北門を中心として左右対称の形になっている。

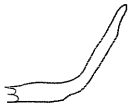
溝底は平坦で、最下層に泥炭と灰色粘土が混じる土層が堆積し、南側の溝ではその上を櫓状建物の創建時

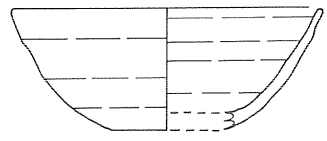

68

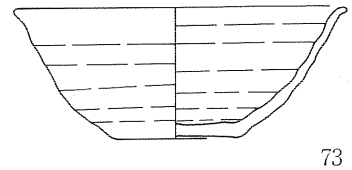

69

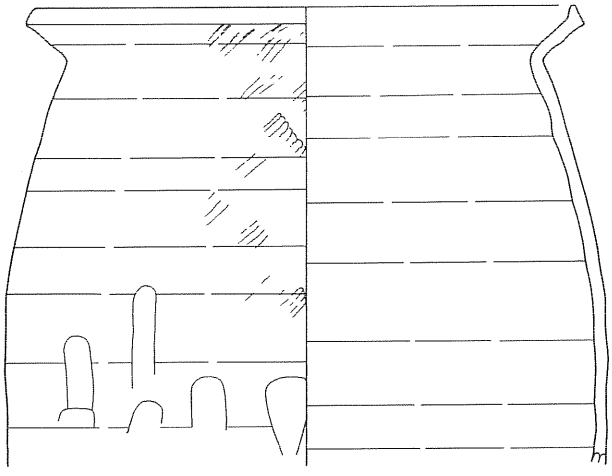
70

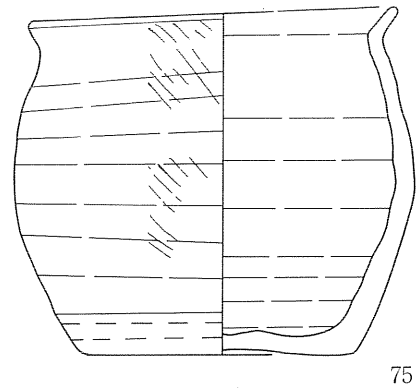


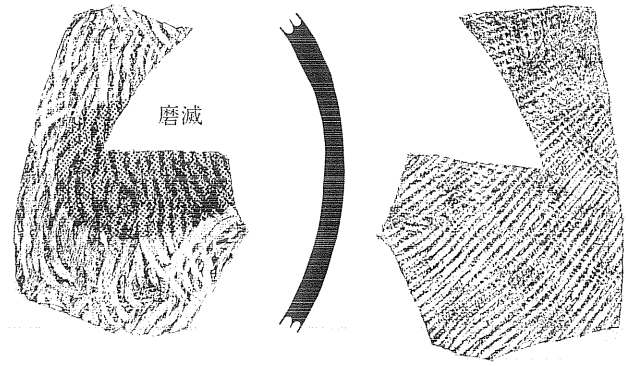

71


72


73


74


75

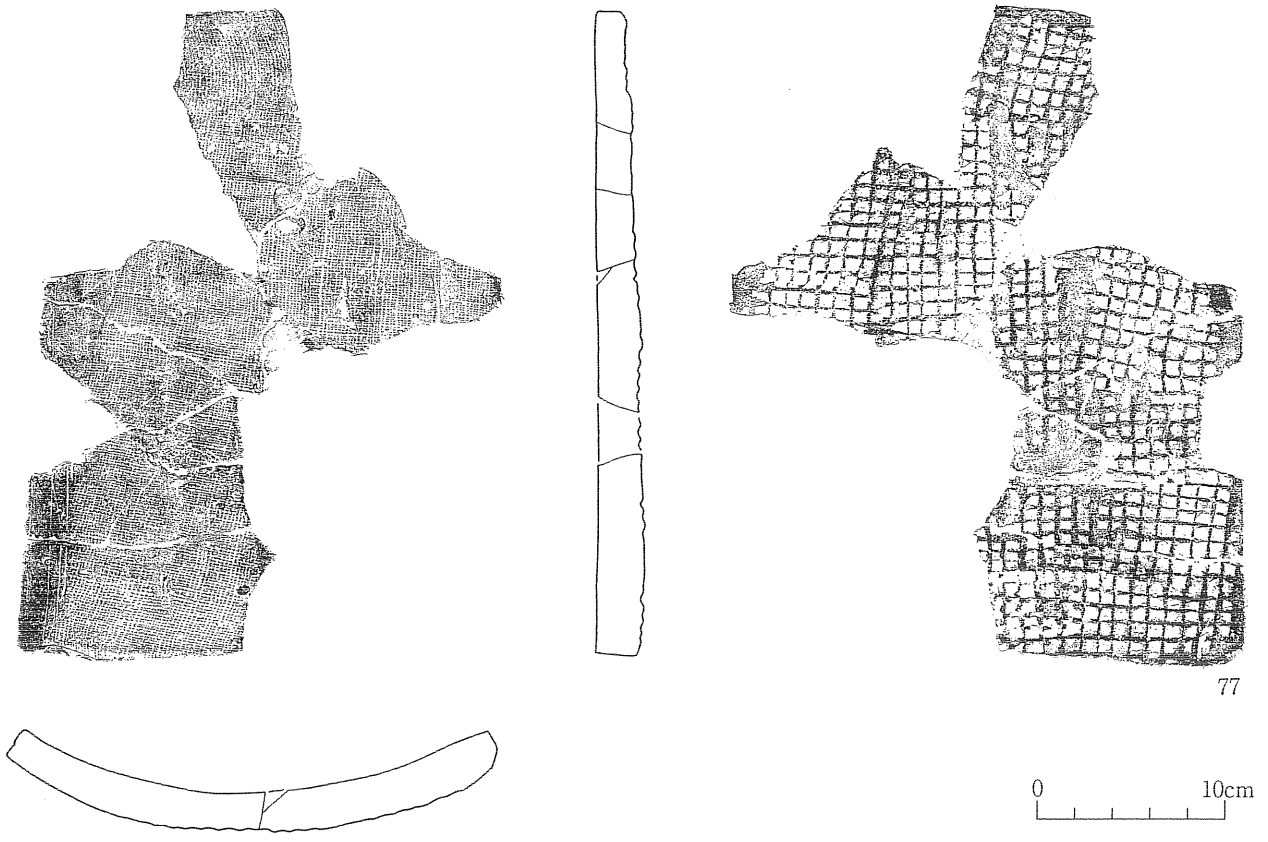


76

0　10cm

番号	種　別	器形	特　徴	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
68	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り、体部逆位に墨書「門」カ 内面：ロクロナデ	12.4	7.8	4.0	0.62	32.2	26°	31－5
69	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り、柿の渋付着、底面に墨書「官」 ロクロナデ、柿の渋付着	12.6	6.5	3.6	0.28	28.5	27°	31－1
70	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り、底面に墨書「宅」 内面：ロクロナデ	13.8	5.8	3.7	0.42	26.8	34°	31－2
71	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り、底面に墨書「官」 内面：ロクロナデ、煤付着							31－3
72	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.4	4.8	4.9	0.38	39.5	26°	
73	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.4	5.1	5.3	0.38	39.5	29°	
74	土師器	甕	外面：ロクロナデ、胴部の下方ヘラ削り　内面：ロクロナデ	21.6						31－4
75	土師器	甕	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ	14.8	10.8	14.1	0.72	95.2		31－5
76	須恵器 転用硯	甕	内面中央部が磨滅。内面全体に墨が付着。							31－6

第32図　ＳＸ1206出土遺物（1）



番号	種　別	特　　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
77	平　瓦	凹面：布目痕、凸面：格子叩き目。	25.6	34.2	2.4	33－1

第 33 図　ＳＸ1206 出土遺物（２）

に施した整地層が覆いながら溝内に落ち込んでいる。したがってこの遺構は創建時の遺構である。土層断面では、溝の上方に堆積する火山灰層がそのわずかに下に凹んで堆積しているので、火山灰が降下した 10 世紀前半にもごくわずかに凹んだ状態となっていたと考えられる。

最下層から須恵器、土師器、第 83～85 号木簡（付編参照）、木製品のほか、木材加工時に生じる木片、広葉樹の幹などが出土した。しかし、ＳＸ1192 と比べそれらの量は少ない。

第 32 図 68～70 は須恵器杯である。68（図版 31－5）は全体が灰色で硬く、底部切り離しは回転ヘラ切りで、体部に逆位に「門」かと考えられる墨書がある。69（図版 32－1）は全体に灰色で硬く、底面に「官」の墨書がある。遺構の最下層から出土した。70（図版 32－2）は全体が灰黄褐色であるが硬く、底部切り離しは回転糸切りによる。底面に「宅」の墨書がある。遺構内堆積土の中ほど、火山灰層に近い位置から出土した。

71～73 は褐色を呈する土師器杯である。71（図版 32－3）は底部切り離しが回転ヘラ切りで、底面に「官」の墨書がある。72 は底部切り離しが回転糸切りで、体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部の外反はほとんどない。接合した破片中に整地層から出土したものがある。73 は底部切り離しが回転糸切りで、溝内堆積土の上方からの出土である。74（図版 32－4）は長胴甕でロクロ成形後、下半にヘラケズリを施す。口縁部が鋭く外反し、口唇部が立ち上がる。内面に稲籾の圧痕がある。火山灰層よりも下から出土した。75（図版 32－5）は小形の甕で、全体が淡い灰黄褐色を呈し、底部周縁に回転ヘラケズリ調整を施す。遺構内に落ち込んだ整地層の下から出土した。76（図版 32－6）は須恵器の破片で、内面に墨が付着し、アテ具痕が磨滅しており、転用硯である。第 33 図 77（図版 33－1）は平瓦で、縦 35.5cm、横 25.5cmの大きさである。凹面に布目痕、凸面に格子叩き目があり、小口面や側縁にヘラケズリ調整を施す。

木製品には以下のものがある。

横槌（第34図78・79，図版33－2・3）

78は芯持ち丸太材から作り、身と柄は明確に分かれる。身よりも柄の方が長く、身の一方が敲打によってわずかに凹んでいる。79は身のごく一部が残っているので、横槌の柄と思われる。

楔（第34図80～84，第35図85・86，図版33－4～6，34－1～4）

スギ、広葉樹の割材を用い、片面から刃部を作る。刃部は80・82のように薄いものと81・86のように角張って厚みのあるものとがある。86の頂部は鋸による切断痕が明確に見られる。

木錘（第35図87，図版34－5）

芯のある丸太材を用い、一方に丸木面、他方には樹皮も残す。材の中央部に向かって両方から円錐状に削り込む。

挽物（第35図88，図版35－1）

椀で、偏平な底部から体部が内湾して立ち上がる。横木取りで、内面を黒色に塗る。

曲物（第35図89～91，図版35－2～4）

89は蓋で、直径16.5cmあり、樺皮結合は4箇所で、外縁を薄く削る。90も蓋で、樺皮結合は1箇所が残るだけであるが、恐らくは4箇所と推定される。側板の痕跡が残る。91は底板で、直径16.0cmあり、釘および釘穴が少なくとも3箇所に見られる。

箸（第36図92～97，図版36－1）

6本出土したが、すべて折損している。

箸状製品（第36図98，図版36－2）

箸と同様に細く加工するが、全長が37cmあるので箸とは思われない。ほぼ同じ太さの両端が残る。

串（第36図99～101，図版36－3～5）

99は全長36.1cmあり、頭部が平坦で先端は細く尖る。100は全長24.3cmあり、頭部は平坦で先端は細く尖る。111は両端が折損しているが、両端とも細くなる。

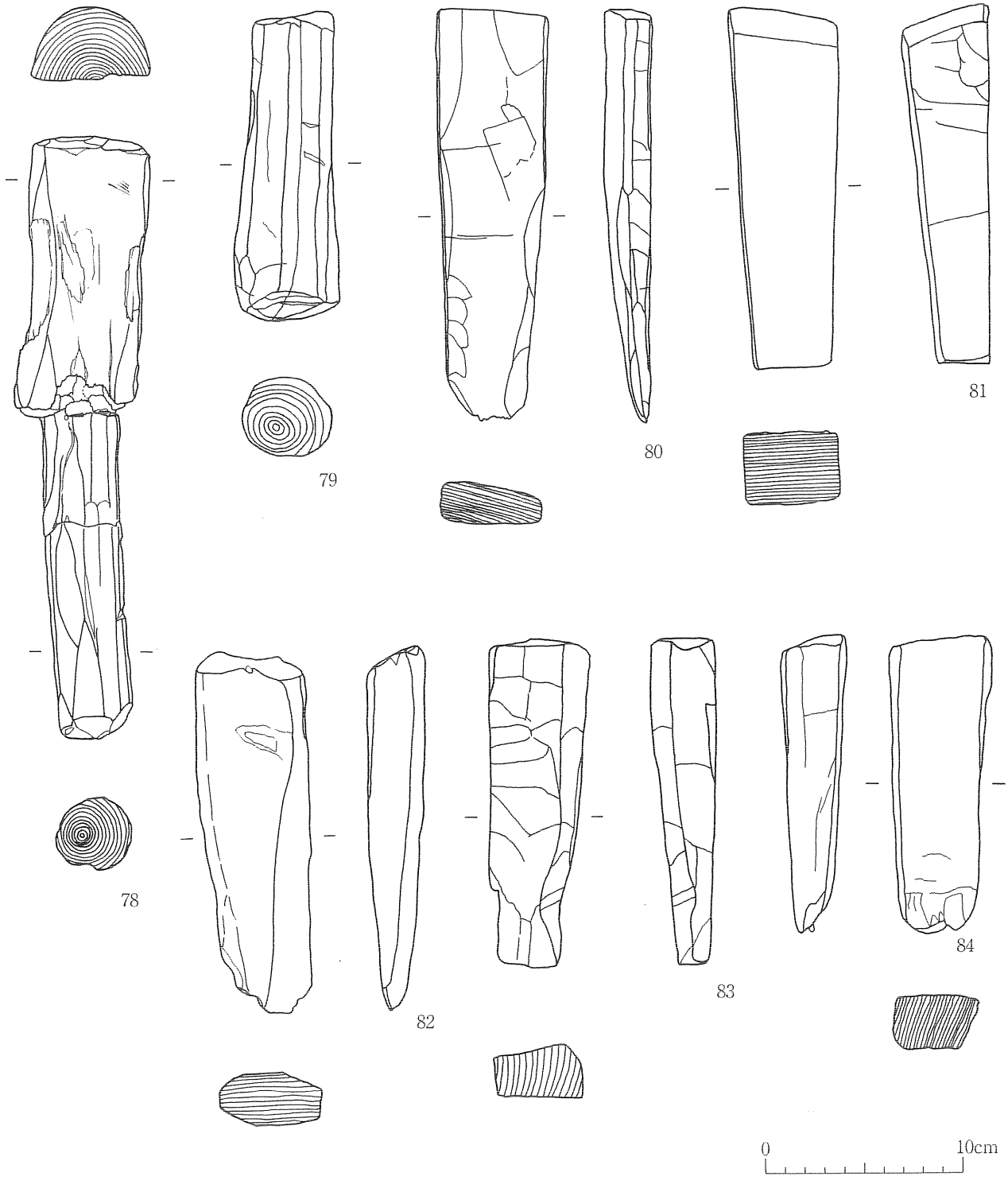
その他の木製品（第36図102～105，図版36－6～9）

102は断面が方形で、両端を削って細くする。103は断面が円形で先端を丸く削っている。104も断面が楕円形で、両端が折損しているが、一端がしだいに細くなる。105は全長21.8cm、幅4.5cm、厚さ1.7cmあり、全体を湾曲する形に作る。容器の把手か。

2　遺構外出土遺物（第37～43図，図版36～40）

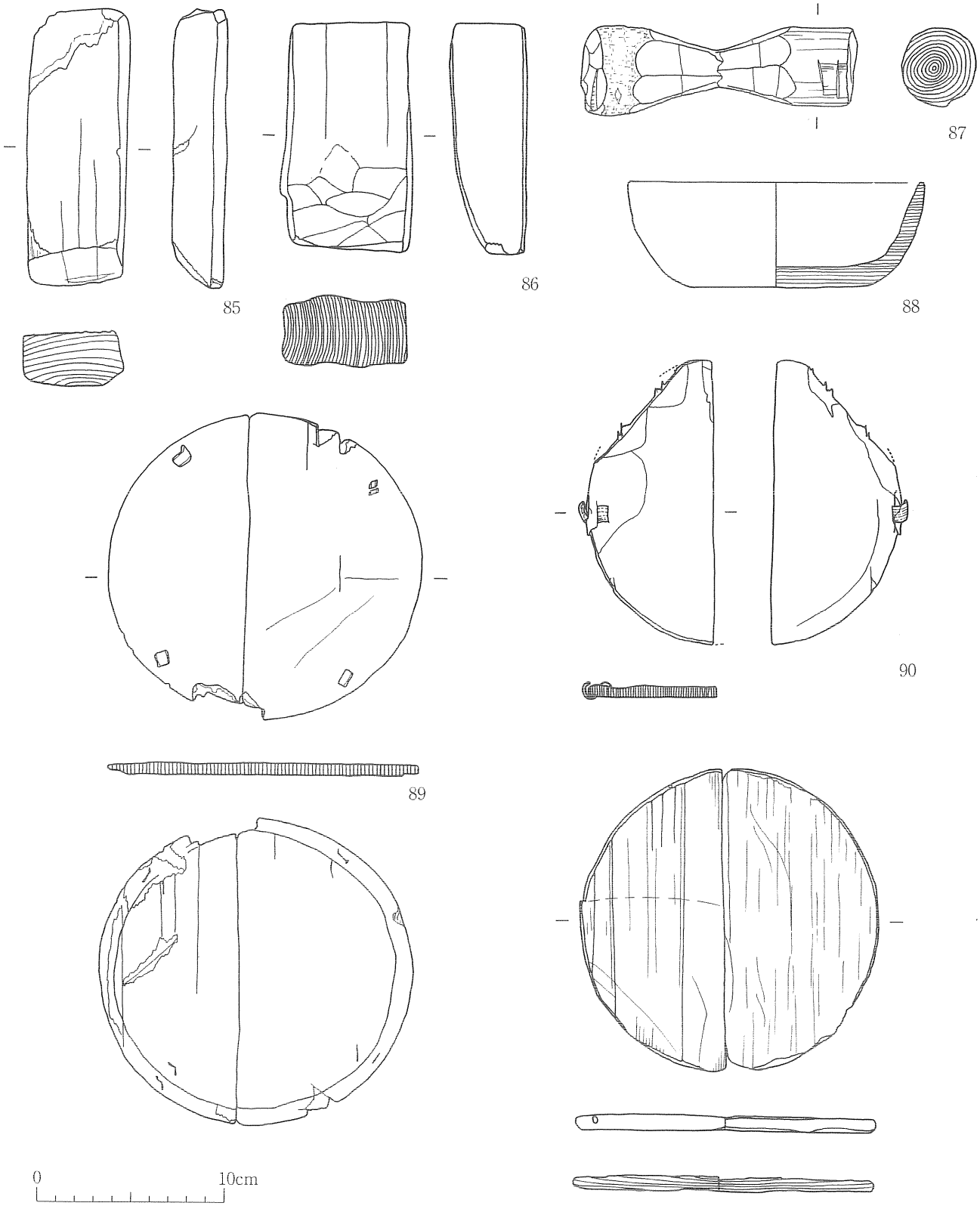
（1）　**須恵器**　第37図106～109は杯で、いずれも灰色硬質で、底部切り離しは106・107が回転ヘラ切り、108が回転糸切りによる。106（図版36－10）の底面に「新」の墨書、109（図版36－11）の体部に墨書がある。110は長頸壷と思われ、高台が付く。内面に漆と墨、底部外面に漆が付着する。

（2）　**土師器**　第37図111～118、第38～40図は杯で、底部切り離しは回転糸切りで、無調整である。111～125は、ごく少し膨らむ体部が内湾ぎみか直線的となって、口縁部はほとんど外反しない。113（図版37－1）の体部には「北門」の墨書がある。外郭北門の正面付近から出土した。114（図版36－14）は体部に「厨」の墨書がある。115（図版37－2）は内面に漆が厚く付着しており、漆を入れた容器である。底面に「吉」の墨書がある。118には内外両面に墨が付着する。124（図版37－6）は高台が付き、内面に黒色処理を施す。八の字形角材列部分のA期角材の上から出土したが、A期布掘りに伴うものではない。



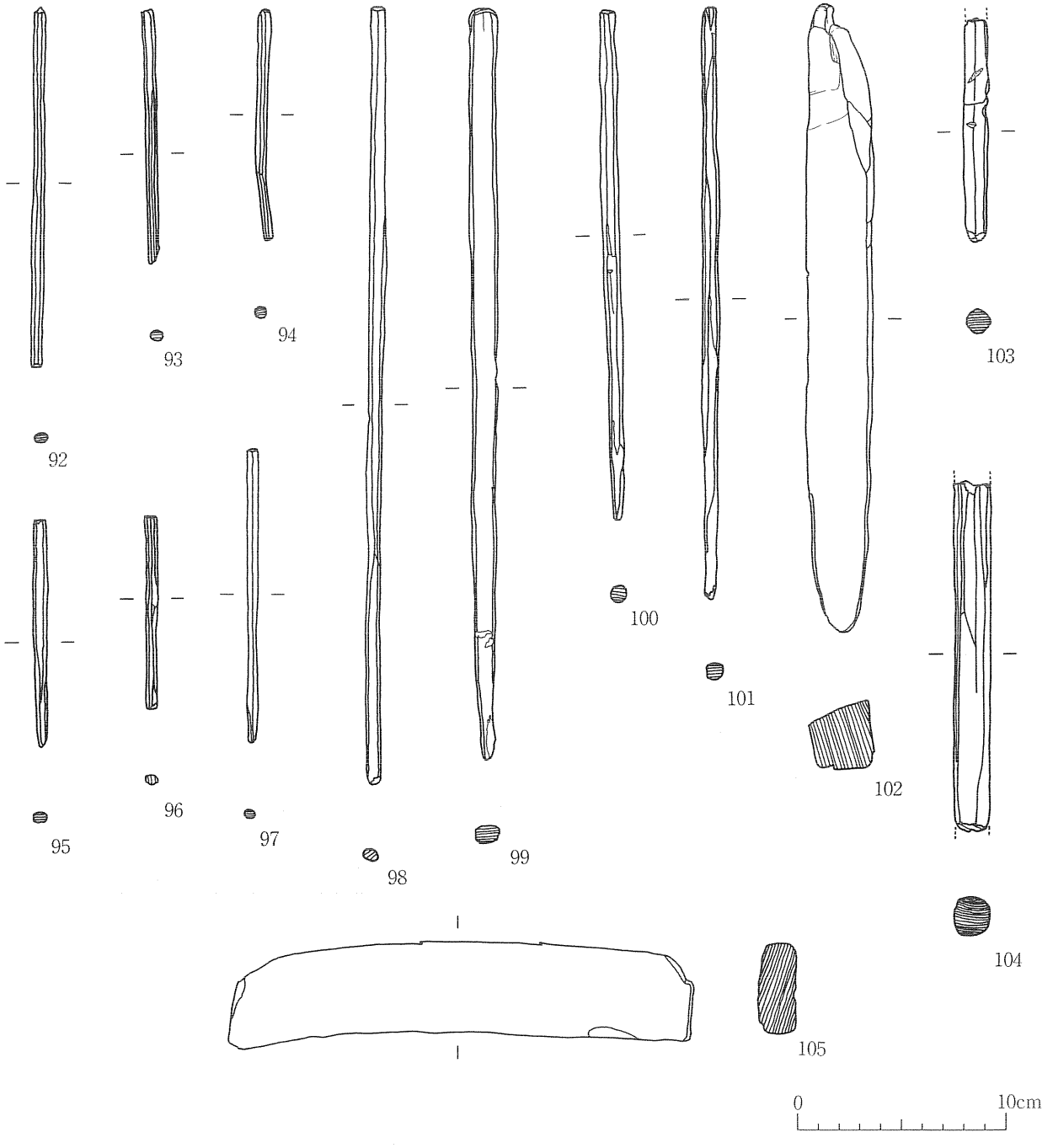
番号	種別	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	図版
78	横槌	身よりも柄の方が長く、身の一方が敲打によってわずかに凹む。	30.7	6.7	3.7	33－2
79	横槌	柄と思われる。	15.6	5.3	4.7	33－3
80	楔	片刃。	20.8	5.6	2.1	33－4
81	楔	片刃。	18.2	5.5	3.6	33－5
82	楔	片刃。	18.5	5.7	3.2	33－6
83	楔	片刃。	17.6	5.1	3.3	34－1
84	楔	片刃。	15.0	5.2	3.4	34－2

第34図　ＳＸ1206出土遺物（3）



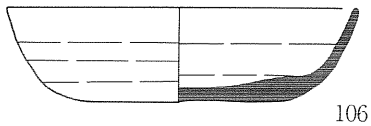
番号	種別	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	図版
85	楔	片刃。	14.6	5.4	2.9	34－3
86	楔	片刃。頂部は鋸により切断。	12.2	6.9	3.8	34－4
87	木錘	材の中央部に向かって両方から円錐状に削り込む。	14.7	4.8	3.9	34－5
88	挽物	内面を黒色に塗る。横木取り。	口径 15.8	底径 9.5	1.0	35－1
89	曲物・蓋板	樺皮結合は4箇所。	16.4	16.5	0.7	35－3
90	曲物・蓋板	樺皮結合は1箇所が残る。側板の痕跡が残る。	15.0	7.1	0.9	35－2
91	曲物・蓋板	釘および釘穴が少なくとも3箇所に残る。	16.1	16.0	8.5	35－4

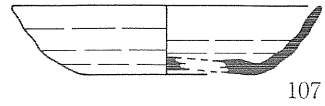
第35図　ＳＸ1206出土遺物（4）

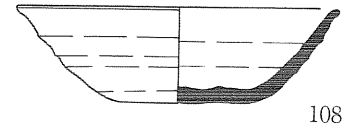


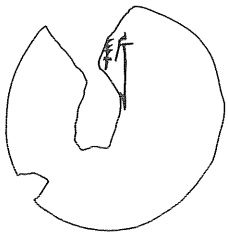
番号	種　別	特　　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
92	箸	折損。周囲を縦に削り調整。	17.1	0.5	0.4	36－1
93	箸	折損。周囲を縦に削り調整。	12.1	0.6	0.5	36－1
94	箸	折損。周囲を縦に削り調整。	11.0	0.6	0.6	36－1
95	箸	折損。周囲を縦に削り調整。	11.0	0.7	0.5	36－1
96	箸	折損。周囲を縦に削り調整。	9.3	0.5	0.5	36－1
97	箸	折損。周囲を縦に削り調整。	14.2	0.6	0.4	36－1
98	箸状・製品	ほぼ同じ太さの両端が残る。	37.1	0.7	0.6	36－2
99	串	頭部が平坦で先端は細く尖る。	36.1	1.5	0.9	36－3
100	串	頭部が平坦で先端は細く尖る。	24.4	0.8	0.8	36－4
101	串	両端が折損しているが、両端とも細くなる。	27.4	0.8	0.8	36－5
102	不　明	断面が方形。両端を削って細くする。	29.1	3.3	3.4	36－6
103	不　明	断面が円形。先端を丸く削っている。	10.7	1.2	1.2	36－7
104	不　明	断面が楕円形。両端が欠損。	16.8	1.8	1.8	36－8
105	把　手	容器の把手か。	22.1	4.3	1.8	36－9

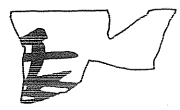
第36図　ＳＸ1206出土遺物（５）


106

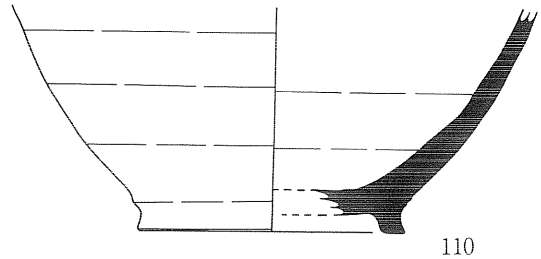

107

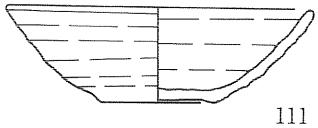

108

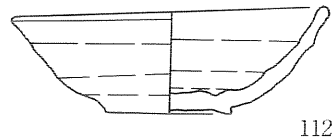


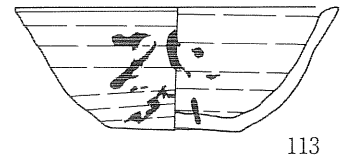


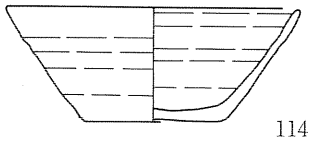
109

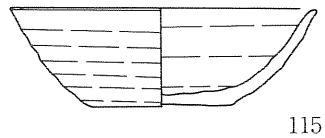

110

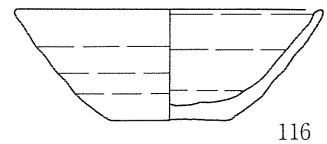

111

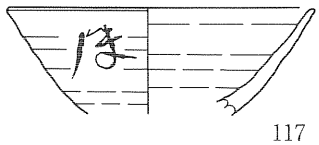

112


113

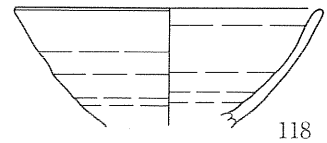

114

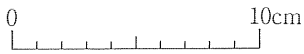

115


116



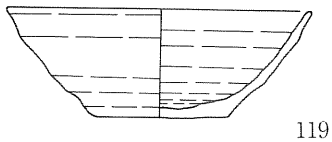
117

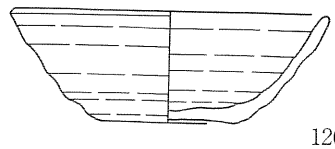

118

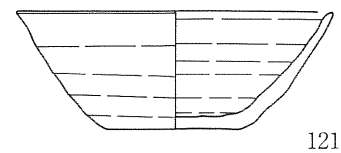


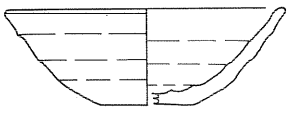
番号	種　別	器形	出土地・層位	特　　徴	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
106	須恵器	杯	MH20整地層の下	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り、底面に墨書「新」 内面：ロクロナデ	14.0	9.4	3.8	0.67	27.1	24°	36－10
107	須恵器	杯	MH10整地層上部	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り　内面：ロクロナデ	12.4	7.0	2.8	0.56	22.5	30°	
108	須恵器	杯	MH17火山灰下泥炭	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ、墨付着	14.0	5.3	3.9	0.37	27.8	34°	
109	須恵器	杯	MI17火山灰下粘土	外面：ロクロナデ→体部に墨書「口」内面：ロクロナデ							36－11
110	須恵器	長頸壺	MI17布掘りその他	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り、漆が底面に付着 内面：ロクロナデ、煤？墨状のもの付着		高台径 10.8	高台径 0.9				
111	土師器	杯	ML11火山灰より上	外面：ロクロナデ→回転糸切り、口縁部に稲籾圧痕 内面：ロクロナデ	12.4	4.7	3.8	0.37	30.6	37°	36－12
112	土師器	杯	MG17火山灰より上	外面：ロクロナデ→回転糸切り、約半分に煤付着 内面：ロクロナデ、口縁部に煤付着、底部に高まりあり	12.5	5.0	4.4	0.40	35.2	29°	36－13
113	土師器	杯	MI10整地層上部	外面：ロクロナデ→回転糸切り、体面に墨書「北門」 内面：ロクロナデ	12.9	5.2	5.1	0.40	39.5	26°	37－1
114	土師器	杯	MI18整地層その他	外面：ロクロナデ→体部に墨書「厨」内面：ロクロナデ	12.5						36－14
115	土師器	杯	MF17火山灰下泥炭	外面：ロクロナデ→回転糸切り、底部に墨書「吉」 内面：ロクロナデ、約½位まで漆が付着	12.4	5.7	4.1	0.45	33.0	32°	37－2
116	土師器	杯	MC14火山灰のすぐ下	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.4	5.0	4.5	0.40	36.2	34°	
117	土師器	杯	ML12火山灰より上その他	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.9	5.6	4.6	0.47	38.6	31°	
118	土師器	杯	MG18火山灰直土	外面：ロクロナデ、墨痕あり　内面：ロクロナデ、墨痕あり	12.4						

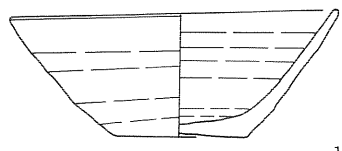
第37図　遺構外出土遺物（1）

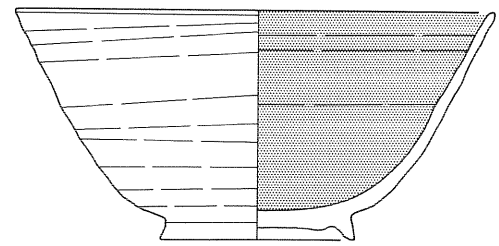

119

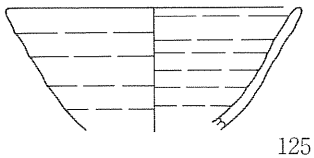

120

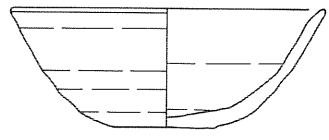

121

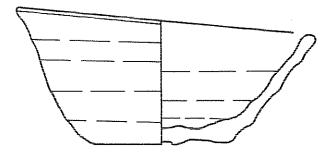

122

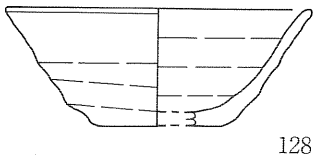

123

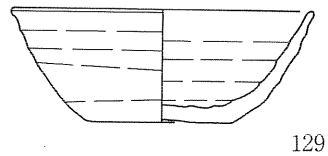

124

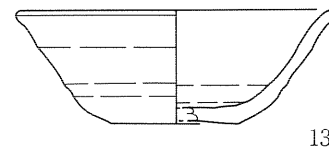

125

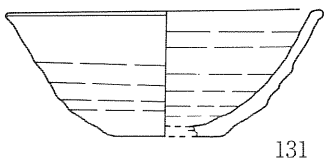

126

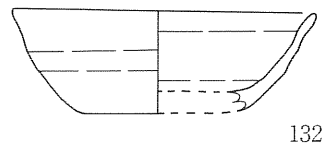

127

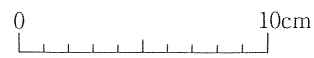

128


129


130

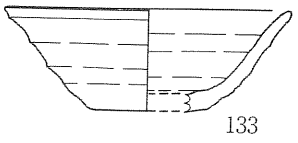

131

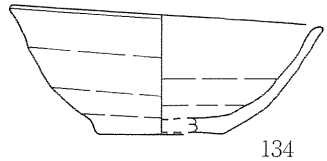

132

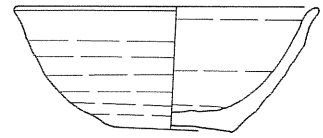


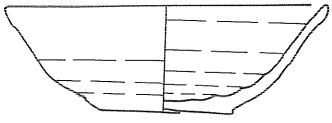
番号	種　別	器形	出土地・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
119	土師器	杯	ＭＪ10火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.2	5.6	4.4	0.45	36.0	33°	37－3
120	土師器	杯	ＭＪ10火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.8	5.5	4.5	0.42	35.1	32°	
121	土師器	杯	ＭＩ17火山灰直下整地層	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.6	5.4	4.7	0.42	37.3	32°	37－4
122	土師器	杯	ＭＬ14火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.2	3.8	3.9	0.33	34.8	35°	
123	土師器	杯	ＭＫ15暗渠	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.1	5.4	5.1	0.41	38.9	34°	37－5
124	土師器	高台付杯	ＭＨ12西から3列目の角材に密着	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ、黒色処理	19.2		9.2	0.40	47.9		37－6
125	土師器	杯	ＭＫ10火山灰直土	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ	11.8						
126	土師器	杯	ＭＩ18火山灰上・下整地層	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.6	4.0	4.8	0.31	38.0	30°	
127	土師器	杯	ＭＪ10火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.1	5.5	5.3	0.45	43.8	38°	37－7
128	土師器	杯	ＭＩ18Ｄ期整地層の上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.7	4.7	5.1	0.37	40.1	30°	37－8
129	土師器	杯	ＭＪ09火山灰のすぐ下	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.1	5.8	4.6	0.47	38.0	27°	37－9
130	土師器	杯	ＭＩ11火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.7	5.1	4.6	0.40	36.2	33°	
131	土師器	杯	ＭＩ11火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.2	5.3	4.8	0.43	39.3	31°	
132	土師器	杯	ＭＨ11火山灰下整地層上部	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.1	6.0	4.1	0.49	33.8	23°	

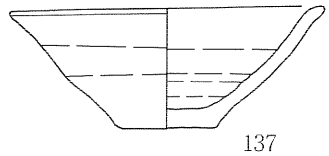
第38図　遺構外出土遺物（2）

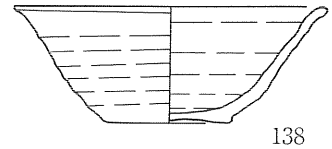

133

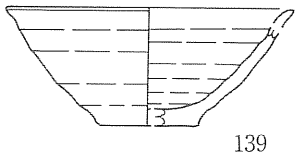

134

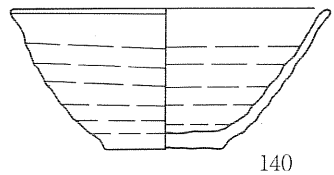

135

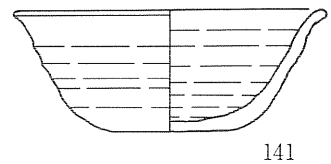

136

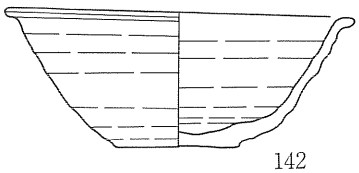

137

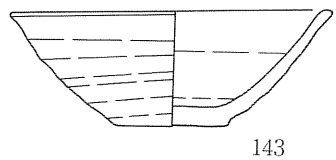

138

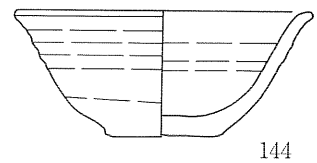

139

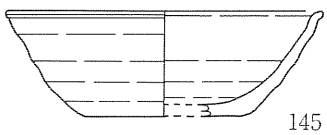

140

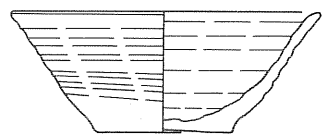

141

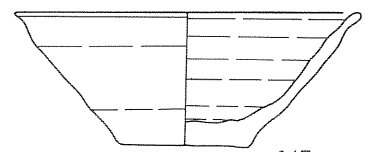

142


143


144


145

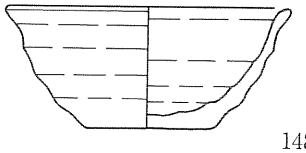

146

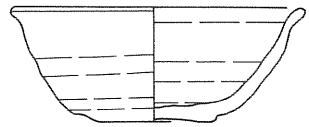

147

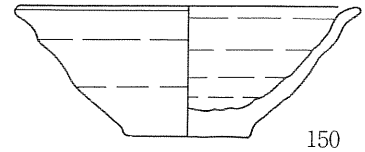
0　10cm

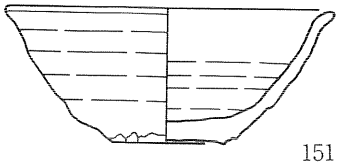
番号	種　別	器形	出土地・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
133	土師器	杯	ＭＩ17Ｄ期整地層上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.5	4.8	4.2	0.41	36.0	35°	
134	土師器	杯	ＭＬ16火山灰より上その他	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.6	5.0	5.2	0.39	41.2	31°	37－10
135	土師器	杯	ＭＫ10火山灰の下その他	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ、漆付着	12.3	5.1	5.1	0.41	41.5	28°	
136	土師器	杯	ＭＪ20火山灰直上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.1	5.5	4.5	0.41	34.4	36°	37－11
137	土師器	杯	ＭＩ10火山灰上その他	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.6	4.1	5.0	0.32	39.7	40°	37－12
138	土師器	杯	ＭＪ10火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.5	5.0	4.7	0.40	37.6	35°	37－13
139	土師器	杯	ＭＫ15暗渠	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.6	4.1	4.8	0.35	41.3	35°	
140	土師器	杯	ＭＨ12　２層火山灰下	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.8	4.7	5.7	0.36	44.5	28°	
141	土師器	杯	ＭＩ11火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.5	5.4	5.0	0.43	40.0	30°	
142	土師器	杯	ＭＫ13火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	14.1	4.8	5.6	0.34	39.7	36°	37－14
143	土師器	杯	ＭＩ13	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.9	4.6	4.8	0.35	37.2	37°	38－1
144	土師器	杯	ＭＨ11火山灰上その他	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.0	4.6	5.1	0.38	42.5	31°	
145	土師器	杯	ＭＪ09火山灰下	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.8	6.4	4.3	0.50	33.5	39°	
146	土師器	杯	ＭＪ13火山灰直上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.4	5.4	4.9	0.43	39.5	34°	
147	土師器	杯	ＭＫ12火山灰より上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.8	5.1	5.5	0.36	39.8	36°	38－2

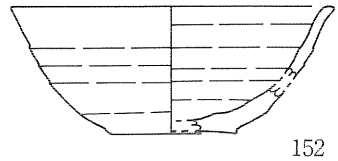
第39図　遺構外出土遺物（3）

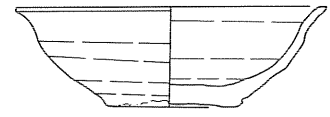

148

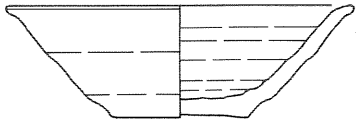

149

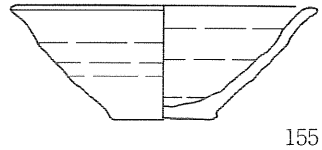

150

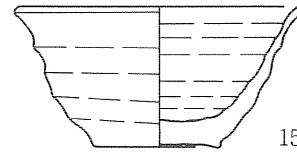

151

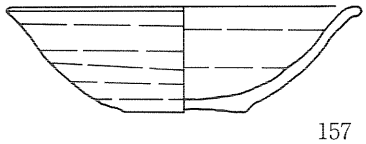

152

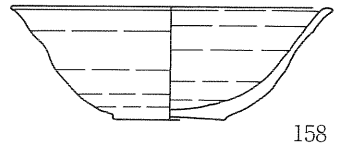

153

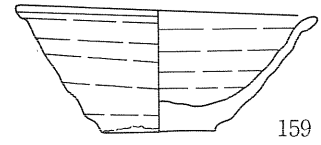

154

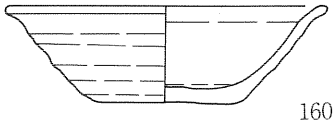

155

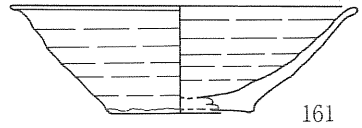

156

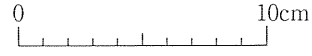

157


158


159

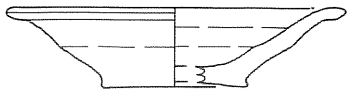

160

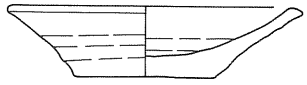

161



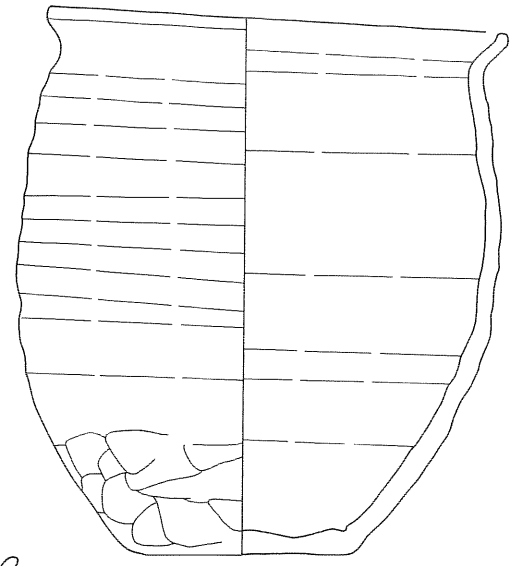
番号	種　別	器形	出土地・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
148	土師器	杯	MK12火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.4	5.0	4.9	0.43	42.9	26°	
149	土師器	杯	MH15火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.8	4.8	4.6	0.40	38.9	31°	
150	土師器	杯	MI16火山灰レベル	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.8	5.0	5.3	0.36	38.0	37°	
151	土師器	杯	MI11火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.2	4.6	5.4	0.34	41.2	32°	
152	土師器	杯	MH11　1層	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.8	5.1	5.0	0.39	39.0	30°	
153	土師器	杯	MI11火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.4	5.3	4.1	0.42	33.0	35°	
154	土師器	杯	MI17火山灰下	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	14.0	5.4	4.5	0.38	32.1	42°	
155	土師器	杯	MI10火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.2	4.3	4.5	0.35	37.2	41°	
156	土師器	杯	MJ17火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.6	5.1	5.7	0.43	49.1	26°	
157	土師器	杯	MI17火山灰下	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	14.2	5.0	4.3	0.35	30.2	43°	38－3
158	土師器	杯	MJ15角材列	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.9	4.5	4.6	0.34	35.6	35°	
159	土師器	杯	MK16暗渠	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.1	4.7	5.3	0.38	43.8	30°	38－4
160	土師器	杯	ML19　2層	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.7	5.6	4.0	0.44	31.4	40°	38－5
161	土師器	杯	MM18火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り、ヘラミガキ 内面：ロクロナデ	13.8	5.5	4.4	0.39	31.8	41°	38－6

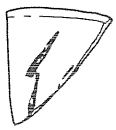
第40図　遺構外出土遺物（4）


162


163

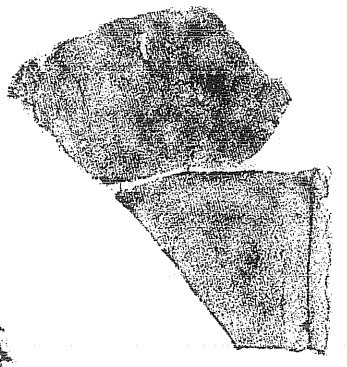
164

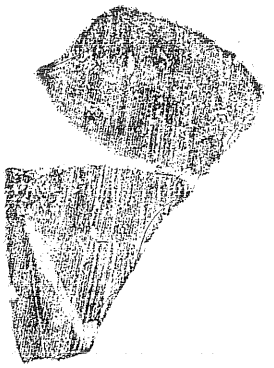

167

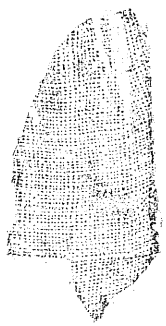
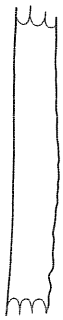
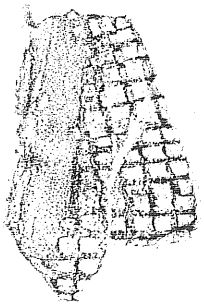


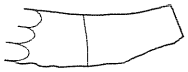
165

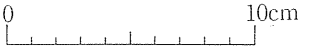
166




169




168

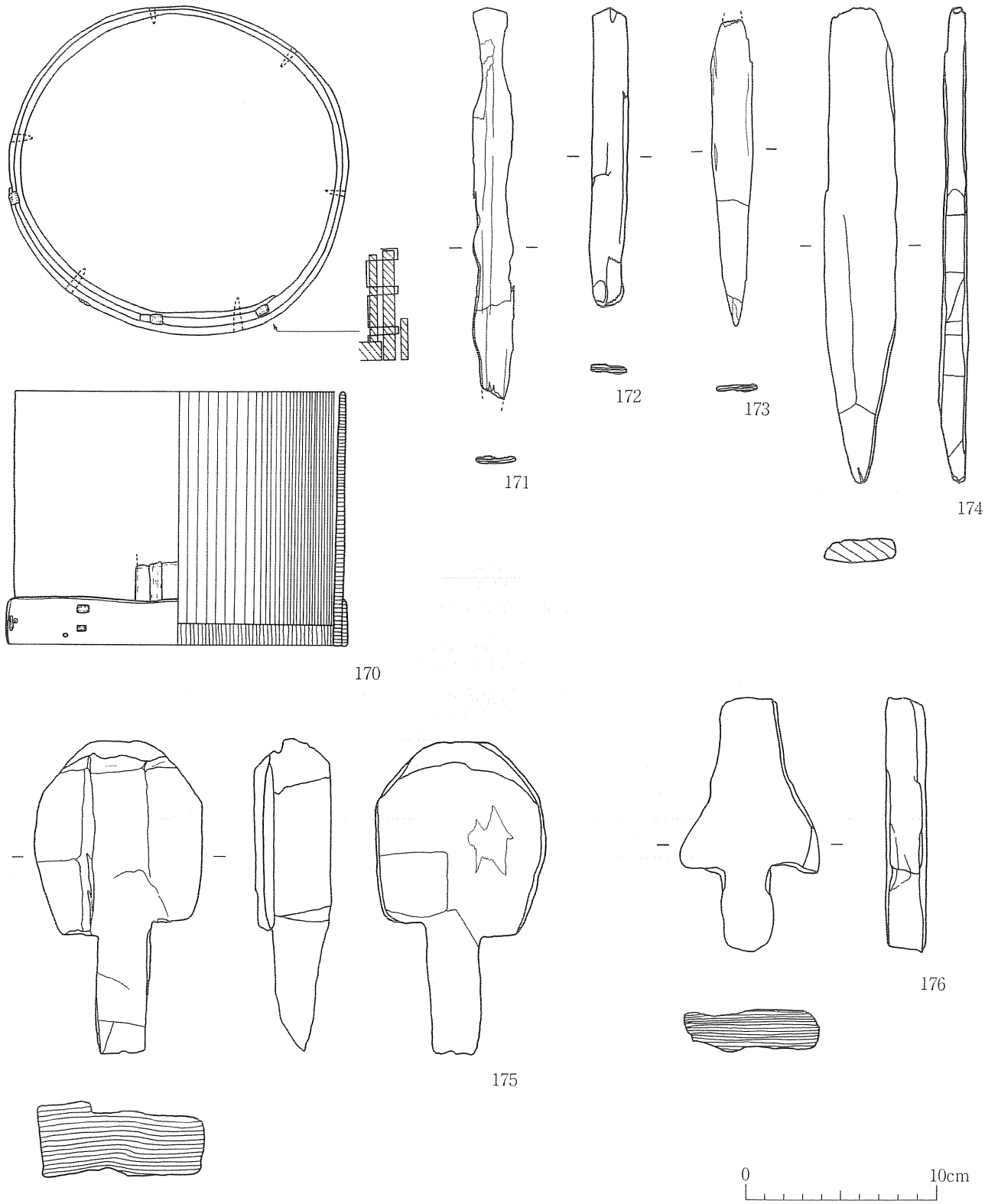




番号	種　別	器形	出土地・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
162	土師器	皿	ＭＩ17•18火山灰上•下	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.6	5.8	3.2	0.42	23.5	54°	38－7
163	土師器	皿	ＭＩ13角材列布掘り上方	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.7	5.6	2.9	0.47	24.7	58°	38－8
164	土師器	皿	ＭＩ11火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.1	4.5	1.6	0.40	14.4	66°	38－9
165	土師器	杯	ＭＩ10火山灰上	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ 体部に墨書							38－10
166	土師器	杯	ＭＨ12火山灰下	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ 体部に墨書							
167	土師器	篦	ＭＪ10火山灰上	外面：ロクロナデ、下部６cm程の所までヘラ削り 内面：ロクロナデ	18.6	8.8	21.8				38－11

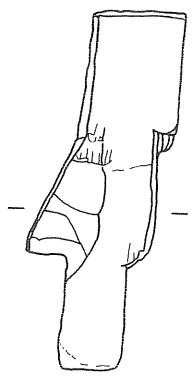
番号	種　別	出土地・層位	特　　徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	図　版
168	平　瓦	ＭＭ20最初の整地層上 ＭＦ19　１層	凹面：布目痕、凸面：格子叩き目。側縁と凸面の側縁にヘラケズリ。	12.6	7.3	2.3	38－12
169	丸　瓦	ＭＨ11火山灰 ＭＨ12西から3列目	凸面：無文、凹面：布目痕。	13.7	8.1	2.0	38－13

第41図　遺構外出土遺物（５）

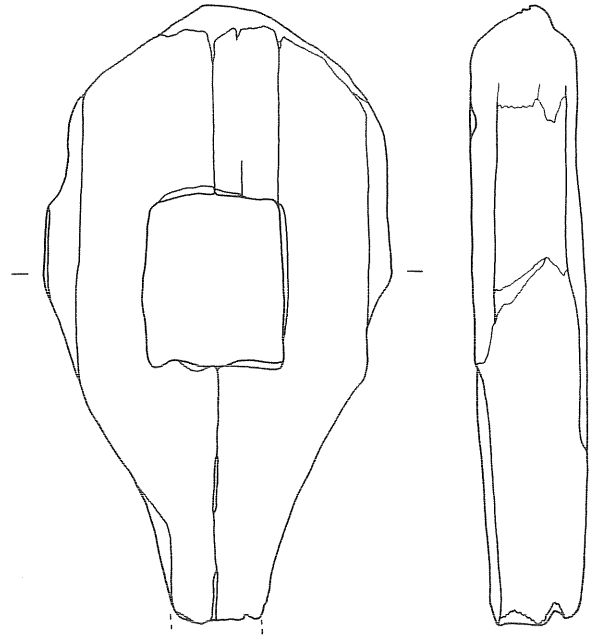


番号	種　別	出土地・層位	特　　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
170	曲　物	ＭＦ19火山灰直下	箍の綴り合わせ１箇所、底板に６箇所の釘。側板の綴じ合わせは２箇所。	径 17.8	高さ 13.4	0.4	39－1
171	斎　串	ＭＪ15角材列 火山炭のすぐ下	圭頭。両側からの切り込み３回。	20.7	2.2	0.4	39－2
172	斎　串	ＬＮ13 2層 火山炭上	圭頭。	15.6	1.9	0.4	39－3
173	斎　串	ＭＪ15角材列 火山炭のすぐ下	頭部破損。	16.2	2.2	0.4	39－4
174	軸状製品	ＭＪ16	頭部破損。先端を尖らす。	25.0	3.8	1.2	39－5
175	不　明	ＭＦ18	円形の体部から下部を楔状に加工する。	16.4	9.0	4.0	39－6
176	不　明	ＭＪ18整地層	鏃の形状で、先端は平坦。	13.6	7.3	2.2	39－7

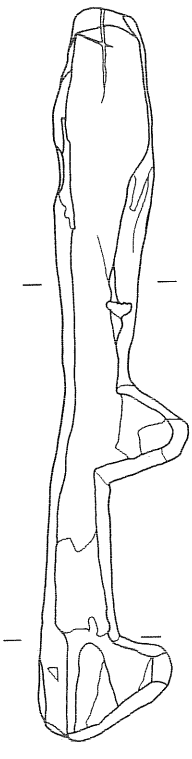
第42図　遺構外出土遺物（６）



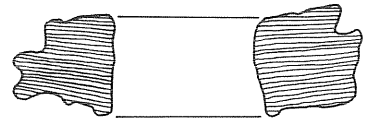
177

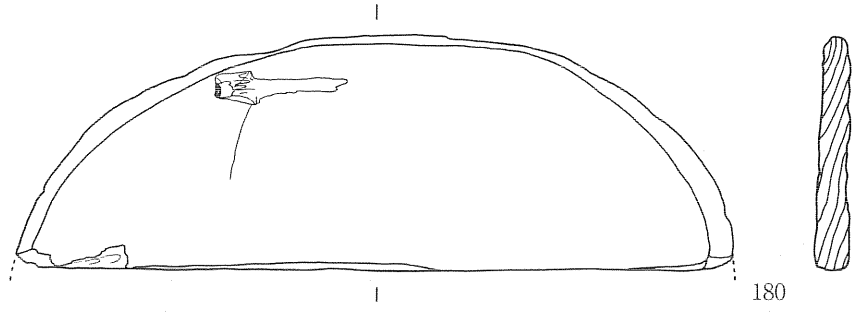


178



179





180

0　10cm

番号	種　別	出土地・層位	特　　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
177	不　明	ＭＦ18	鏃の形状で、上部は鋸によって切断。	14.3	6.3	2.9	40－1
178	不　明	ＭＪ16火山灰上	鋤の柄部分に似る。部材か。	20.8	13.8	4.5	40－2
179	不　明	ＭＧ15 火山灰の下の泥炭層	断面が楕円形で2箇所に山形の突起がある。	29.5	6.0	2.7	40－3
180	不　明	ＭＮ18	側縁を粗く削る。容器の蓋か。	28.8	9.4	1.4	40－4

第43図　遺構外出土遺物（7）

126～161は口縁部が外反するものである。150の内面には墨が付着している。第41図162～は164は皿で、底部切り離しは回転糸切りで無調整である。162（図版38－7）は火山灰層の下、163（図版38－8）は角材列布掘りの上部から、164（図版38－10）は火山灰層よりも上から出土した。第41図165（図版38－11）・166は杯の破片で、体部にそれぞれ墨書がある。167（図版38－11）は土師器甕である。ロクロ成形で、胴下部に手持ちヘラケズリ調整を施す。底面の胎土中には砂が多く付着する。外郭北門の正面付近からの出土で、土器内に砂と小粒の石が充満していた。

（3） **瓦** 第41図168（図版38－12）は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に格子叩き目があり、側縁と凸面の側縁にヘラケズリ調整を施している。169（図版38－13）は丸瓦で、凸面は無文、凹面には布目痕がある。

（4） **木製品** 第42図170（図版39－1）は円形曲物で、直径18cm、高さ13.4cm、箍の綴合わせは1箇所、底板に6箇所の釘を打つ。側板の綴じ合わせは2箇所で、内面の全体に縦平行線のケビキを入れる。SX1206の上に堆積した火山灰層の直下から出土したので、この遺構に伴ったものではない。

171～173は斎串で、171（図版39－2）は両側からの切り込みが3回ある。174（図版39－5）は串状の製品で、先端を両側から削って尖らす。175（図版39－6）は円形の体部から下部を幅2.5cmに細く加工し、さらに楔状に両面から刃部を作る。176（図版39－7）は鏃の形状をなし、先端は平坦である。細く基部を作り出す。

第43図177（図版40－1）もこれに似た形状で、上端は鋸によって切断されている。178は（図版40－2）頂部を丸く削り、中央部に縦7cm、横5.5cmの方形の孔をあけ、その下方を両側から削って細くする。鋤の柄部分に似るが何らかの部材か。179（図版40－3）は断面が楕円形で、2箇所に山形の突起がある。180（図版40－4）は全体としては楕円形となり、側縁を粗く削る。容器の蓋か。

第3節 小 結

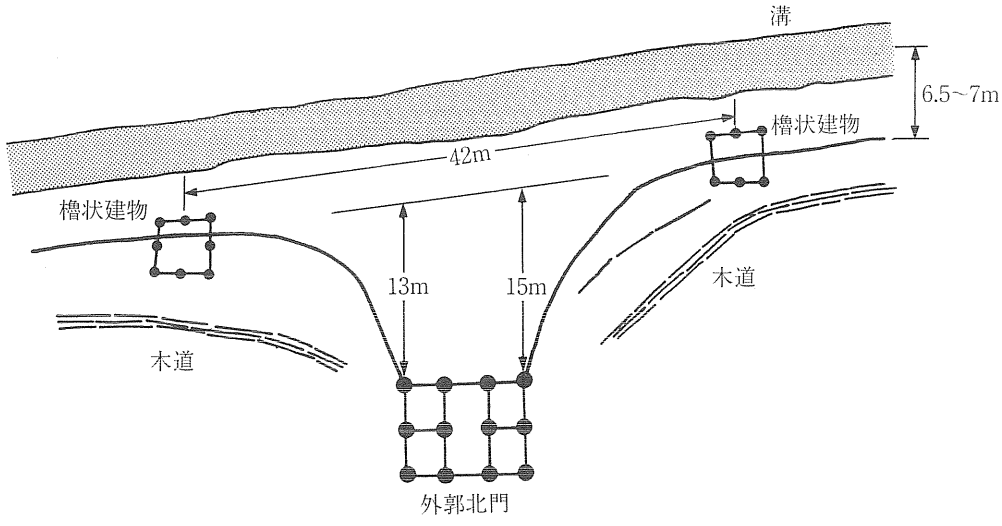
（1）角材列について

外郭北門の西側角材列に4期あることが確かめられた。門の東側角材列や東西南北4門も4期あるので、外郭線区画施設全体に4期の造営があることが確実となった。

門東側の状況と同様に、残存する角材はほぼA期とD期のみで、B・C期角材は抜き上げて基部の固定や木道に転用している。また、一部ではあるがB・C期角材列の布掘り間に距離があって、B期角材列からC期角材列に建て替える際に位置を南に移動しているのも東側角材列の状況と同じである。このことは、第111次調査においてC期の外郭北門がB期建物よりも南に1.2～1.5m移動していることと符合し、C期には門を南に移動した結果、東西角材列も南への移動距離が大きくなったのであろう。

倒壊したD期角材の上部に貫穴のあるものが1本あり、地下部分の長さを合わせると全長4.70mとなる。昨年検出した全長4.60mのそれに近い長さとなり、角材全体の長さが追認されたことになる。軟弱地盤であるので角材自体の沈下も考慮に入れると、地上部分の高さはやはり、3.60m前後であろう。

外郭の門の場合、角材列が内側に八の字形に入り込んだ位置に門が取り付く。門の両側の、東西方向となる角材列を直線で結び、門の正面までの距離を測ると、D期の場合は北西隅柱で13m、北東隅柱で15m内側に入り込んでいることになる（第44図）。また、D期角材列からSD1145溝中央までの距離は6.5～7mである。



第44図　遺構間の距離

（2）櫓状建物とＳＸ1206について

櫓状建物は門東側と同じく7期の造営がある。各時期の建物をＡ～Ｄ期の角材列に対応させると、埋土に火山灰を含むＳＢ1210が最も新しく、Ｄ期角材列に対応することが明らかである。角材列の内側に構築されるＳＢ1203Ａ・Ｂが最も古い建物であるので、これがＡ期、角材列をまたぐ形となって、桁行が3間となるＳＢ1207Ａ・ＢがＢ期、残るＳＢ1208・1209がＣ期にそれぞれ対応するかと推定される。門の東側の櫓状建物とは基本的に同様の変遷をたどることができる。また、十和田ａ火山灰降下後は1時期しか建物が存在しない。東西両側の櫓状建物の距離は、Ｄ期建物の梁行中央の柱で測定すると42.0ｍである。

これら櫓状建物の創建段階の遺構であるＳＸ1206は、昨年検出した同様の遺構であるＳＸ1192に対応し、門を中心として左右対称となる。木簡や木製品、廃材などの投棄はＳＸ1192に比べ、出土量がはるかに少なく、この点がＳＸ1192の状況とは異なる。

（3）ＳＤ1145溝について

角材列の北に平行するＳＤ1145溝は門の正面でも直線的に西に延びている。

外郭北門の北方には、外柵北門に連なる道路状の遺構や、それに伴って溝に架かる橋の存在を予想したが、それらの明確な遺構は見られなかった。しいて取り上げるとすれば、溝の底付近に見られる3本の広葉樹の丸太で、全体の幅はわずか60㎝であるが、初期の段階で簡単な橋を架けたものであろう。溝内や付近に打ち込み杭があることからも、太い橋脚を用いない形で架設した橋の上部構造の一部かと推定される。

さらに、門の北方の位置に限って火山灰層が細かく途切れて溝の下部にまで達している状況から、10世紀段階には橋の施設はあえて設けずに、半ば土が堆積して浅くなった溝を徒歩渡るといったこともなされていたことを示すと考えられる。外郭南門と外柵南門との間における橋のあり方とは様相を異にしている。(註1)

（4）外郭北門を中心とする状況

これまでに調査した外郭東・西・南門では、道路や地形上の制約から、門両側の区画施設のあり方が必ずしも明確ではなかったが、第107次調査と今回の調査により、外郭北門においてその状況が初めて明かとなっ

第5表　外郭北門東西の遺構の変遷

	創建期	外郭線A期	外郭線B期	外郭線C期	外郭線D期
	年輪年代	801年		907年	
	SX1192				
【門東側】	角材列	SA100A	SA1100B	SA1100C	SA1100D
	櫓状建物	SB1189A・B	SB1188A－1・2	SB1188B・C	SB1188D
	木道	SX1191			
				SX1180 →	
					SX1190
	溝	SD1145 →			
	SX1206				
【門西側】	角材列	SA1201A	SA1201B	SA1201C	SA1201D
	櫓状建物	SB1203A・B	SB1207A・B	SB1208・1209	SB1210
	木道			SX1202 →	
				十和田a火山灰降下	

た。外郭北門を中心とする外郭線角材列と、それに伴う櫓状建物には、角材列に4期、櫓状建物に7期の造営があり、両者は東西両側で基本的に同様の変遷を示す（第5表）。

外郭線A期には角材列の内側に接するように東側にSB1189、西側にSB1203櫓状建物が建てられ、それぞれ1回建て替えがなされる。SB1189には棟通りに柱が検出されなかったが、重複によって完全に失われていることも考えられるので、西のSB1203と同様の総柱建物である可能性はある。この建物の西に木道らしいものがあるが詳細は不明である。

創建時に櫓状建物の構築予定地にL字形のSX1192、逆L字形となるSX1206が掘られ、整地層がこの溝内に落ち込んでいるが、A期の古い段階では埋まり切らずに凹んでいたと思われる。

角材列の北にSD1145溝が設けられる。この時期、深さは約1mである。

外郭線B期になると、外郭北門はA期柱を抜き取り、ほぼ同じ位置に建て替えを行う。A期角材列のすぐ内側に接して建て替えを行う。櫓状建物は角材列をまたぐ形に変わり、桁行は3間となり最大規模になる。1回建て替えがある。

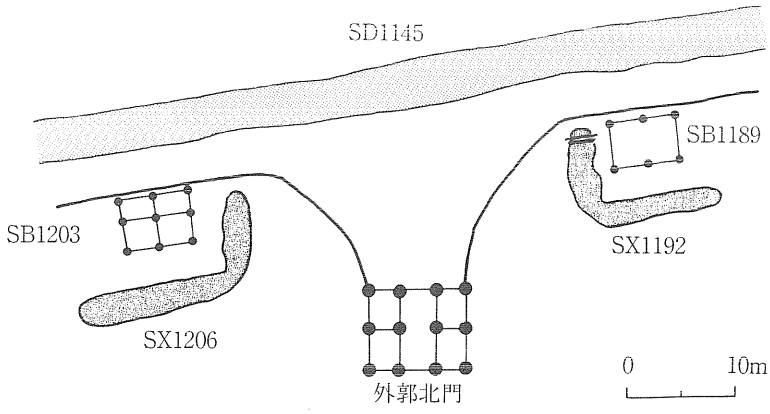
外郭線C期には、外郭北門はB期柱を切り取り、その柱根を残して南に幾分位置をずらして建て替える。角材列もB期のそれの内側に建て替えるが、B期角材の多くは抜き上げて根元の固定に使用する。櫓状建物は角材列をまたぐ形であることは変わらないが、規模が縮小される。1回建て替えを行う。

角材列の内側に、B期角材列の転用材を用いたSX1180木道が新たに設けられる(註2)。この時期に十和田a火山灰が降下する。角材列の北にある溝SD1145は土が堆積して浅くなり、火山灰降下時には周囲の地表よりも30cmほど帯状に凹んだ状態となっている。このことによる溝の排水機能の低下や、周辺河川の流路の変化にもとづく水位の上昇が木道を設けた背景として推定される。

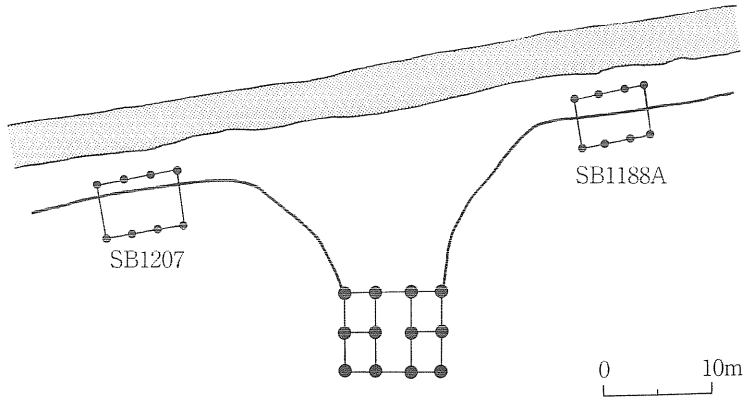
外郭線D期には、外郭北門はC期柱を抜き取り、ほぼ同じ位置かごく少し南に建て替える。C期角材の多くを抜き取り、ほぼ同じ位置かすぐ内側に角材列を建てる。抜き取った材木を使用して布掘り内の固定材に使用する。この時期の材木はスギのほか、クリ、キハダなどの広葉樹も多く用いるようになる。

櫓状建物は角材列をまたぐ形で、規模は最小となる。溝はこの時期になると大半が埋まりごくわずかに凹みが見える程度であろう。角材列の南の木道は、C期のものを引き続き使用している。そのほか、東側の櫓状建物SB1188Dと外郭北門を結ぶSX1190木道が設けられる。これも角材列からの転用材を使用してい

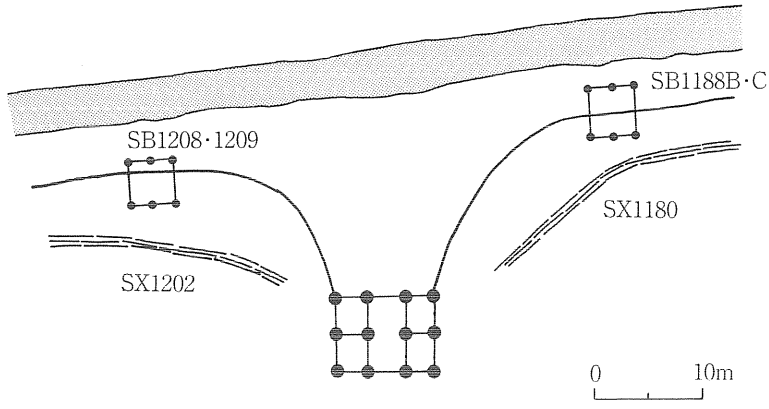
〔A　期〕



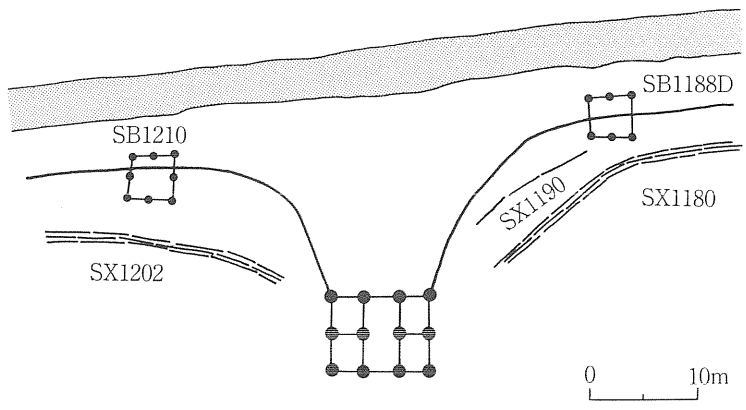
〔B　期〕



〔C　期〕



〔D　期〕



第45図　外郭北門周辺遺構の変遷

る。

このように、門の周辺では門を中心として左右対称に設計、造営がなされていたことが明らかである（第45図)。

註1　外郭南門と外柵南門との間の低地には、古代において南北最大幅約200ｍの河川敷が存在し、その中に幅９ｍの蛇行する流路がある。二つの門を結ぶ線上に太さ45～50㎝の橋脚を用いた橋が架けられ、その長さは17ｍ、幅3.3ｍと推定される。路面や側溝は検出されなかった。河川と溝の幅の違い、政庁の南と北の違いはあるが、外郭北門と外柵北門との間にはこのような橋は設けられていなかったことになる。

註2　第107次調査で外郭北門の東方にあるＳＸ1180木道をＢ期以降としたが、ＳＸ1202と同様にＢ期角材列を転用したＣ・Ｄ期の遺構と考えた方が自然であるので訂正する。

第6章　調査成果の普及と関連活動

1　現地説明会の開催

平成9年10月4日

第110～112次調査について

2　諸団体主催行事への協力活動

外柵南門、政庁跡や、発掘調査の現場において、朝日カルチャーセンター・横浜、六郷町立六郷小学校、岩手県矢巾町郷土史講座、國學院大学大学院古代史研究会などの遺跡見学会に対し、払田柵跡の説明を行った。

3　払田柵跡環境整備審議会への出席

第1回　　平成9年8月6日

第2回　　平成10年3月25・26日

4　顧問会議の開催

第45回　　平成9年9月24日

第46回　　平成10年2月26日

5　報告・講演

児玉　準「なぞの城柵－払田柵跡」　古代東北の城柵と蝦夷－調査の現場から－　平成9年4月9日
　場所：朝日カルチャーセンター・横浜

児玉　準「史跡払田柵跡について」　県立六郷高校ふれあい体験学習　平成9年7月14日
　場所：県立六郷高校

児玉　準「払田柵跡調査の現状」『第25回古代史サマーセミナー資料』　平成9年7月24日
　場所：秋田温泉さとみ

児玉　準「払田柵跡」『蝦夷・律令国家・日本海－シンポジウムⅡ・資料集－』　日本考古学協会1997年度秋田大会　平成9年10月10日　場所：秋田市文化会館

児玉　準「秋田・払田柵跡」『木簡研究』　第19号　木簡学会　1997年11月

児玉　準「払田柵跡－平成9年度調査の概要－」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
　平成10年2月14・15日　場所：盛岡市都南文化会館

児玉　準「払田柵跡（第110 ～112 次調査）」『秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
　平成10年3月14・15日　場所：能代市文化会館

6　資料の貸し出し

大阪府立近つ飛鳥博物館　平成9年度秋季特別展『「あつれき」と「交流」－古代律令国家とみちのくの文化－』　平成9年9月30日～11月24日

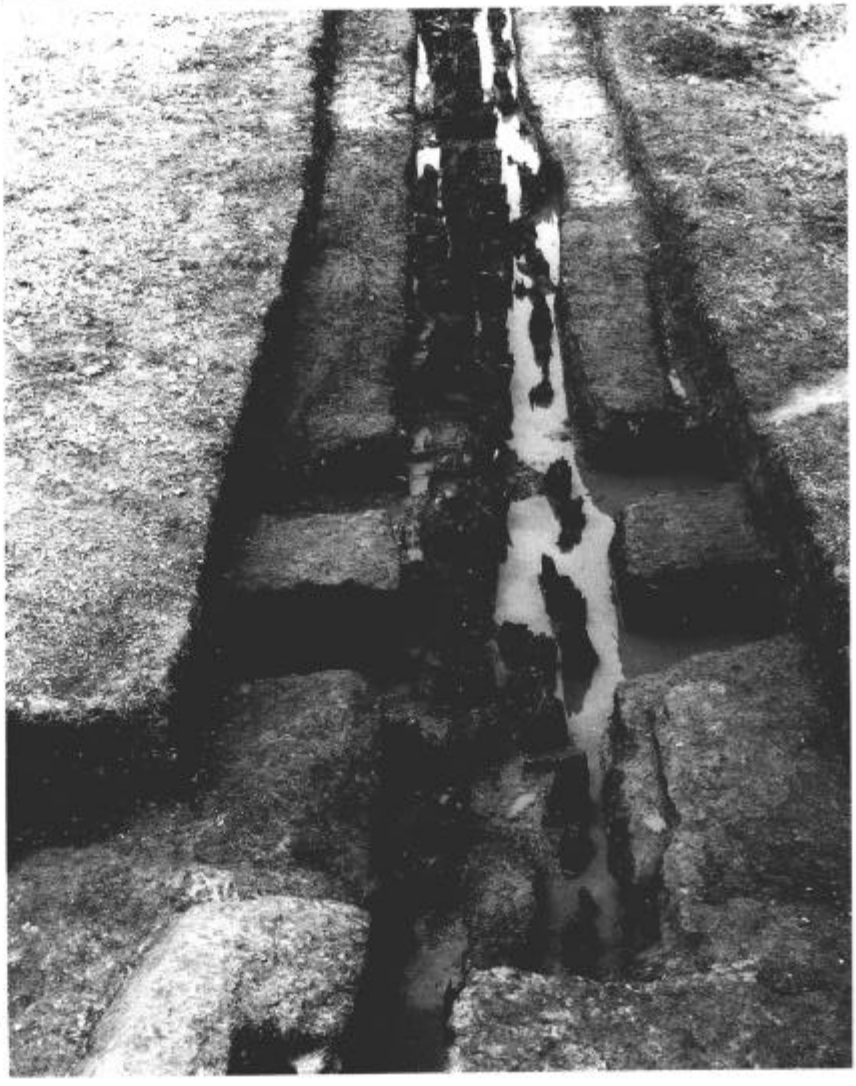
報告書抄録

ふりがな	ほったのさくあと　だい　　じちょうさ がいよう
書名	払田柵跡－第110～112次調査概要－
副書名	
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第280集
編著者名	児玉　準
編集機関	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
所在地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　TEL 0187-69-2442
発行年月日	1998年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ほったのさくあと 払田柵跡	あきたけんせんぼくぐん 秋田県仙北郡 せんぼくまちほった 仙北町払田 せんはたまちほんどうしろまわり 千畑町本堂城回	53429 53432		39度 27分 57秒	140度 33分 11秒	第110次 19970421～ 19970613	103	学術調査
						第111次 19970522～ 19970801	180	学術調査
						第112次 19970619～ 19971017	550	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
払田柵跡 第110次	城柵	平安時代	外郭線角材列　1条 築地土塀　1基		外郭線角材列の年輪年代測定を行い、C期角材が西暦907年と確定した。
第111次	城柵	平安時代	外郭北門　1基	土師器、須恵器	外郭北門の造営回数の再調査を行い、外郭東・西・南門と同様に4期あることが明らかとなった。
第112次	城柵	平安時代	外郭線角材列　1条 櫓状建物　1基 溝　1条 木道　1基 土坑　4基 その他の遺構　1基	土師器、須恵器 木簡7点、絵馬、 楔・曲物・挽物皿 箸・斎串などの木製品	外郭北門の北には道路状遺構や太い橋脚を用いた橋はない。門を中心として、角材列、櫓状建物、木道などが、基本的に左右対象に設計、造営されていることが判明した。

1　外郭線角材列（西から）
右上外郭東門



2　同　　上（東から）
手前築地土塀

図版2　第110次調査

1　築地土塀と角材列の接続部（北西から）

2　同　　上（北から）

1　4列ある角材列（北から）

2　同上断面（西から）

図版4　第111次調査

1　外郭北門（南から）

2　同　　上（北から）

1　北側西2柱（北から）手前B期柱

2　同　　上（北西から）

図版6　第111次調査

1　墨書のある廃材

2　南側西2柱（南から）手前D期柱

1　南側西2柱（西から）左B期柱、右D期柱

2　同　　上（北西から）

図版8　第111次調査

1　南側西2 B期柱（北西から）

2　同上柱掘形の重複状況（東から）

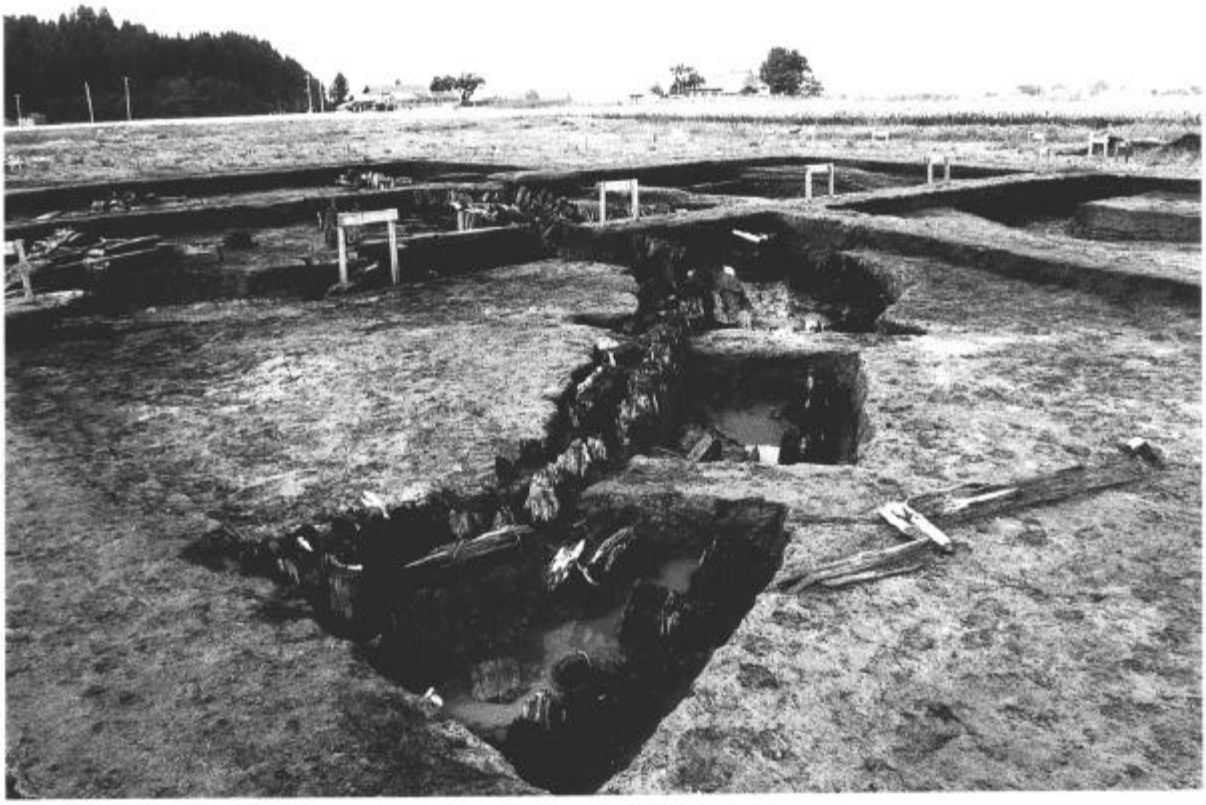
1　全　　景（西から）

2　カーブする角材列と槽状建物（北から）

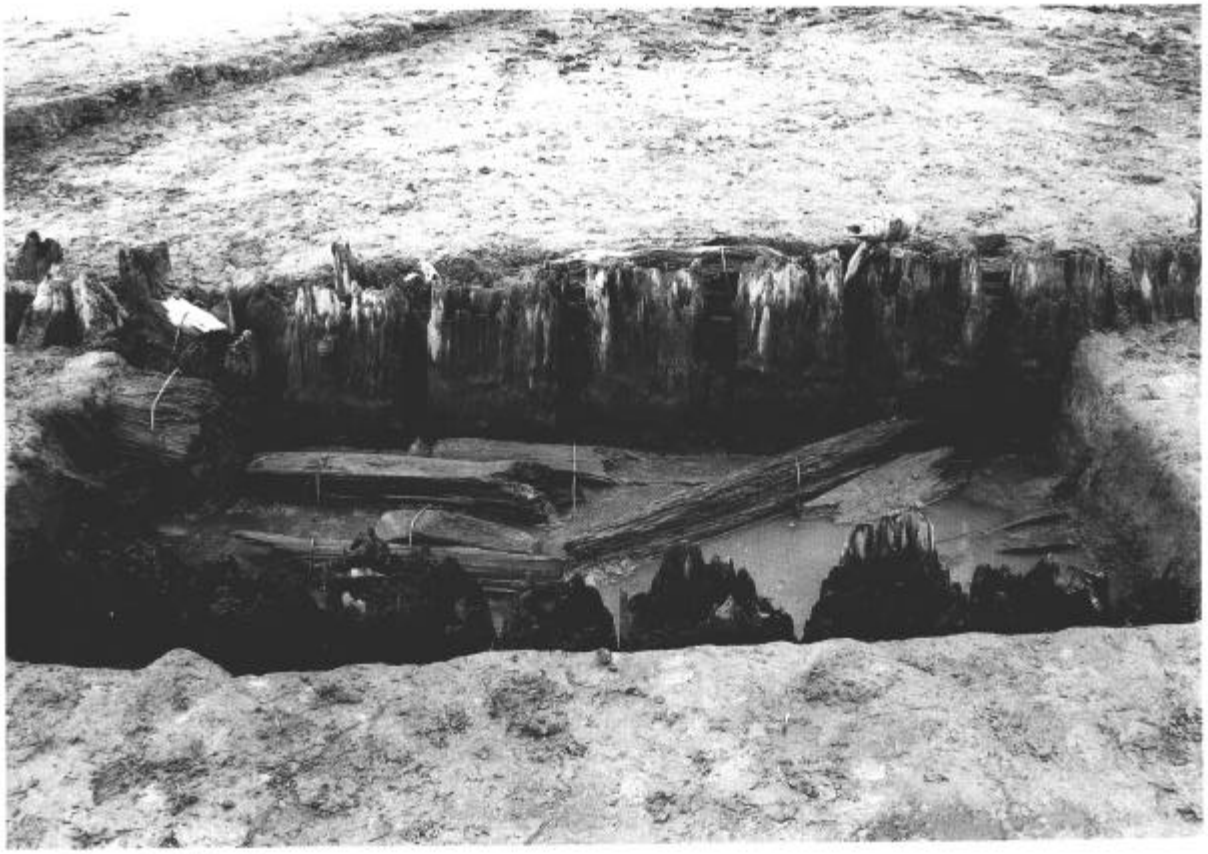
図版10　第112次調査

1　外郭北門北西の角材列（北から）

2　同　　上（北から）



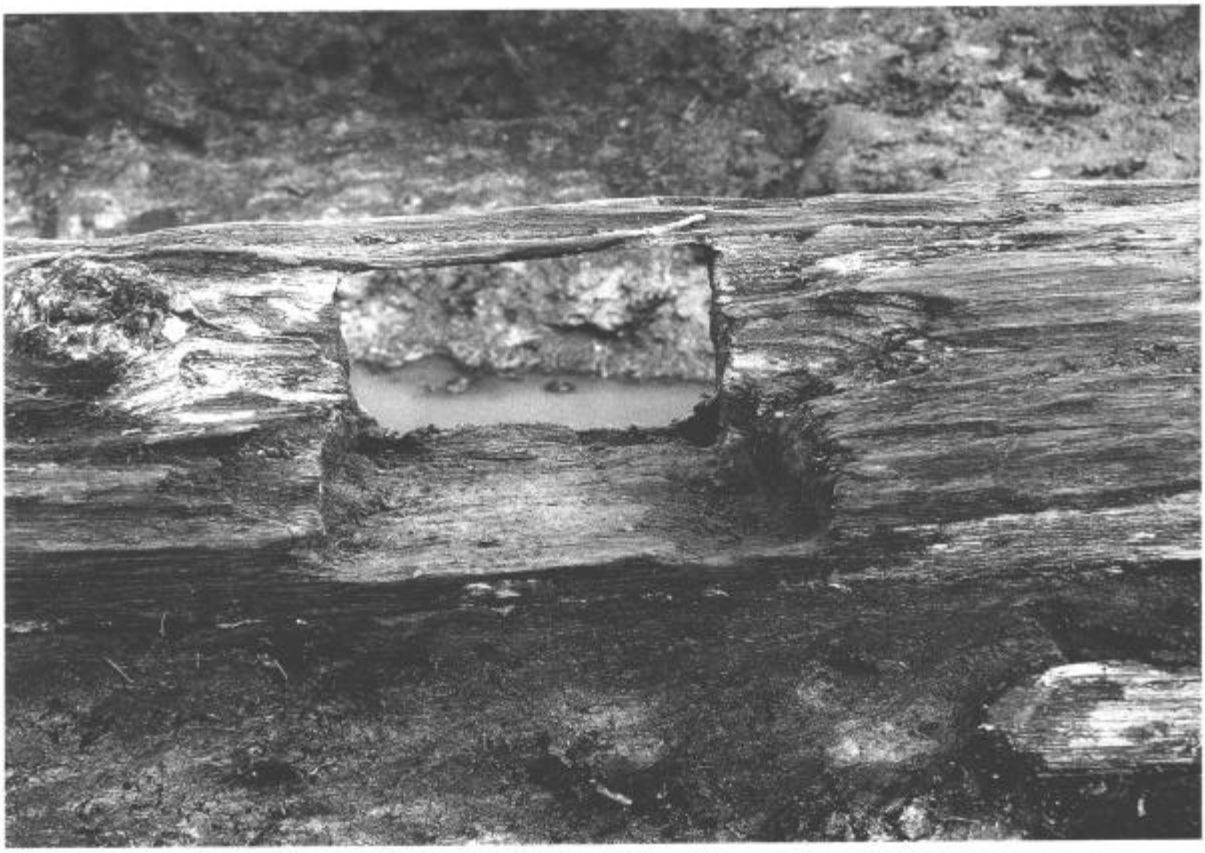
1　外郭北門北西の角材列（南東から）



2　同　　上（東から）

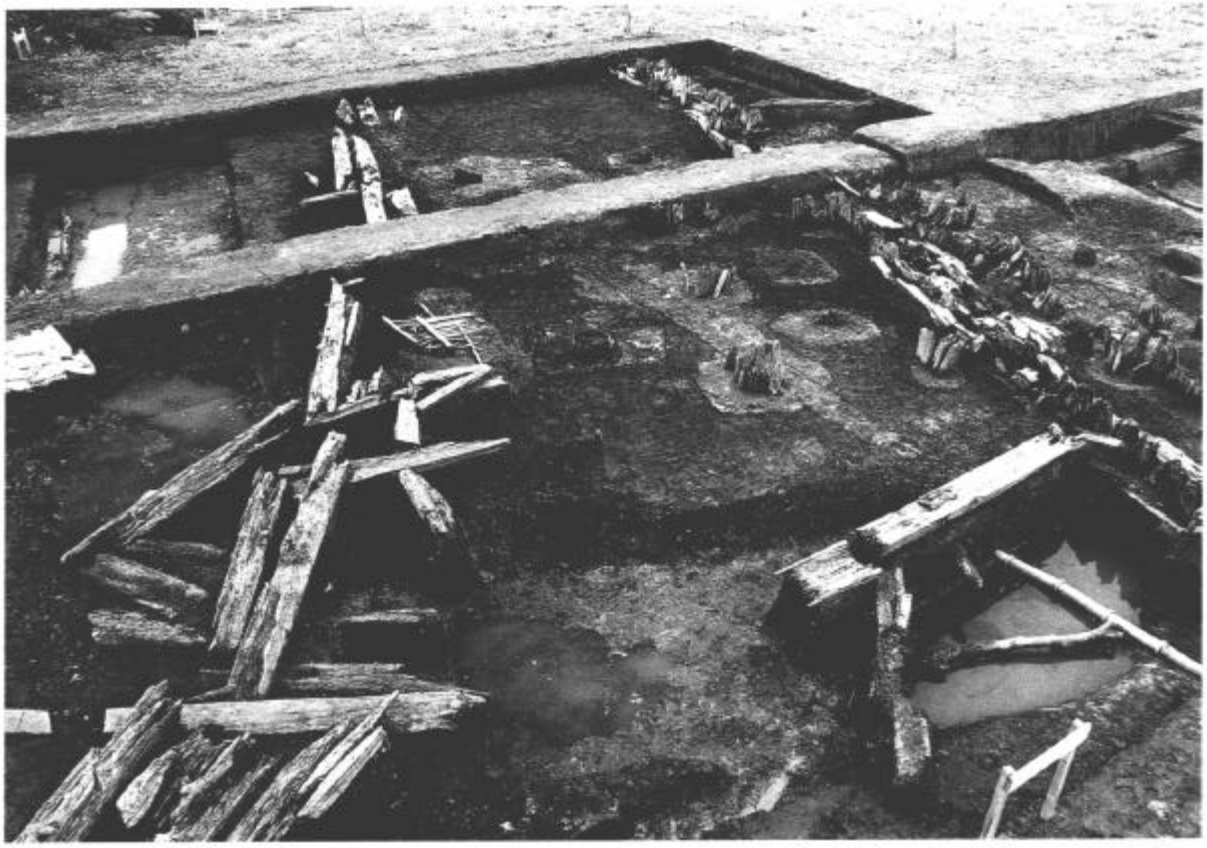
図版12　第112次調査

1　南に倒壊したD期角材（西から）



2　同上材木の貫穴（西から）

1　櫓状建物（北から）



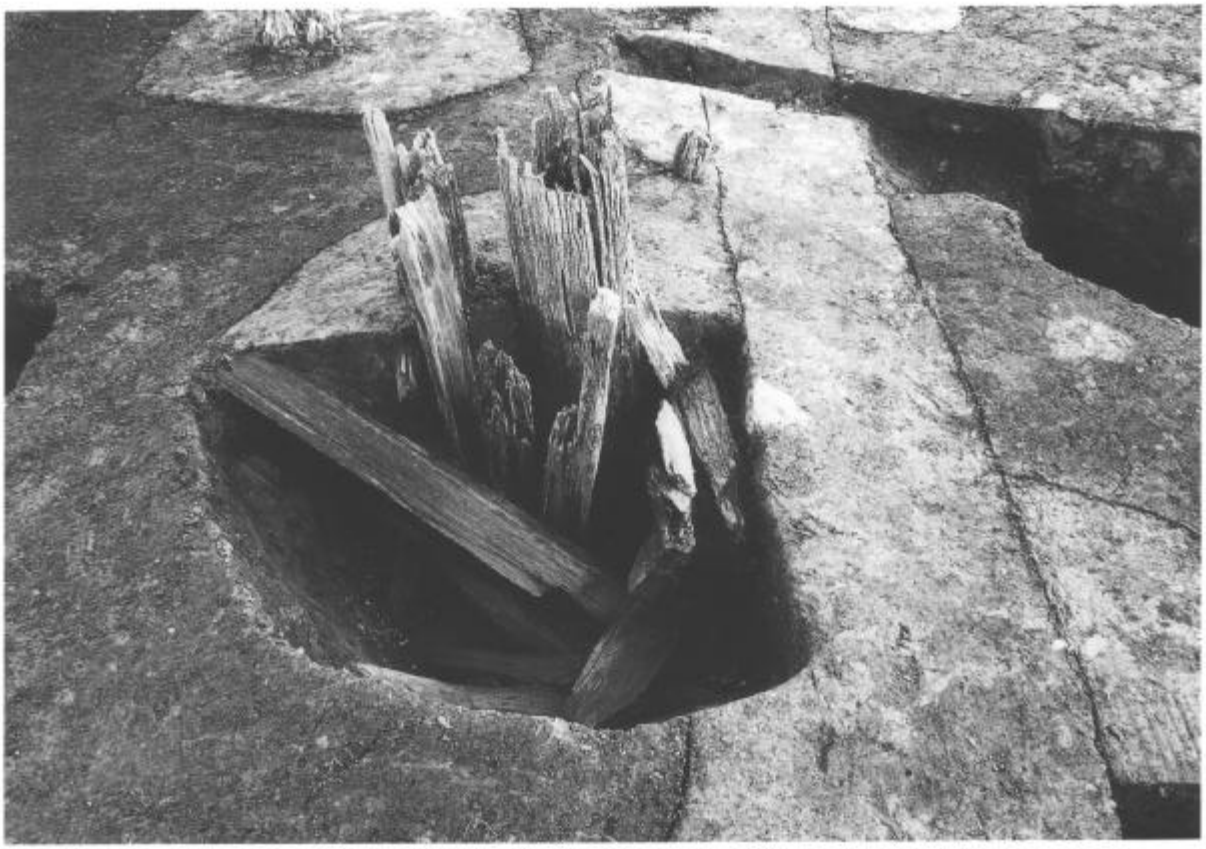
2　櫓状建物と木道（東から）

図版14　第112次調査

1　櫓状建物の柱の断ち割り（北から）

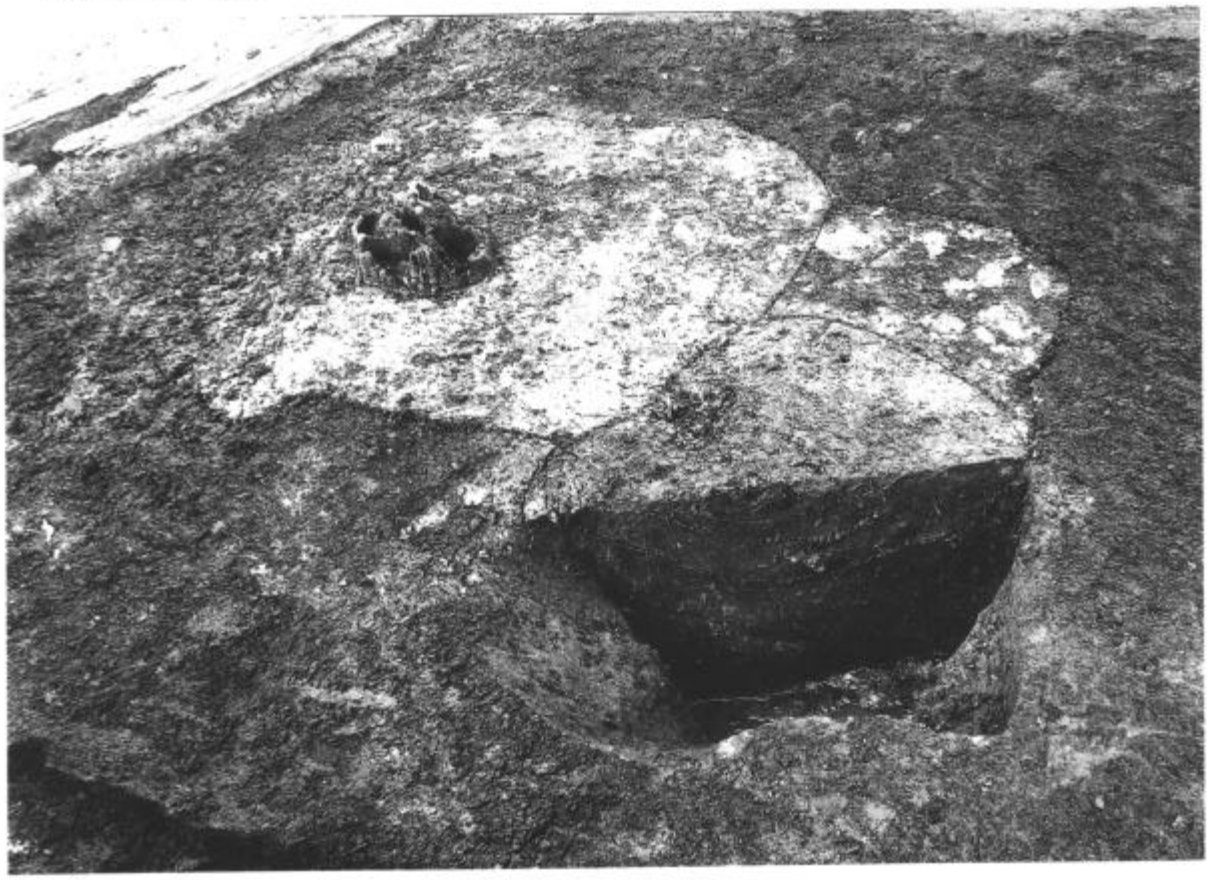
2　ＳＢ1203南東隅柱（西から）

1　角材列と櫓状建物の柱（西から）

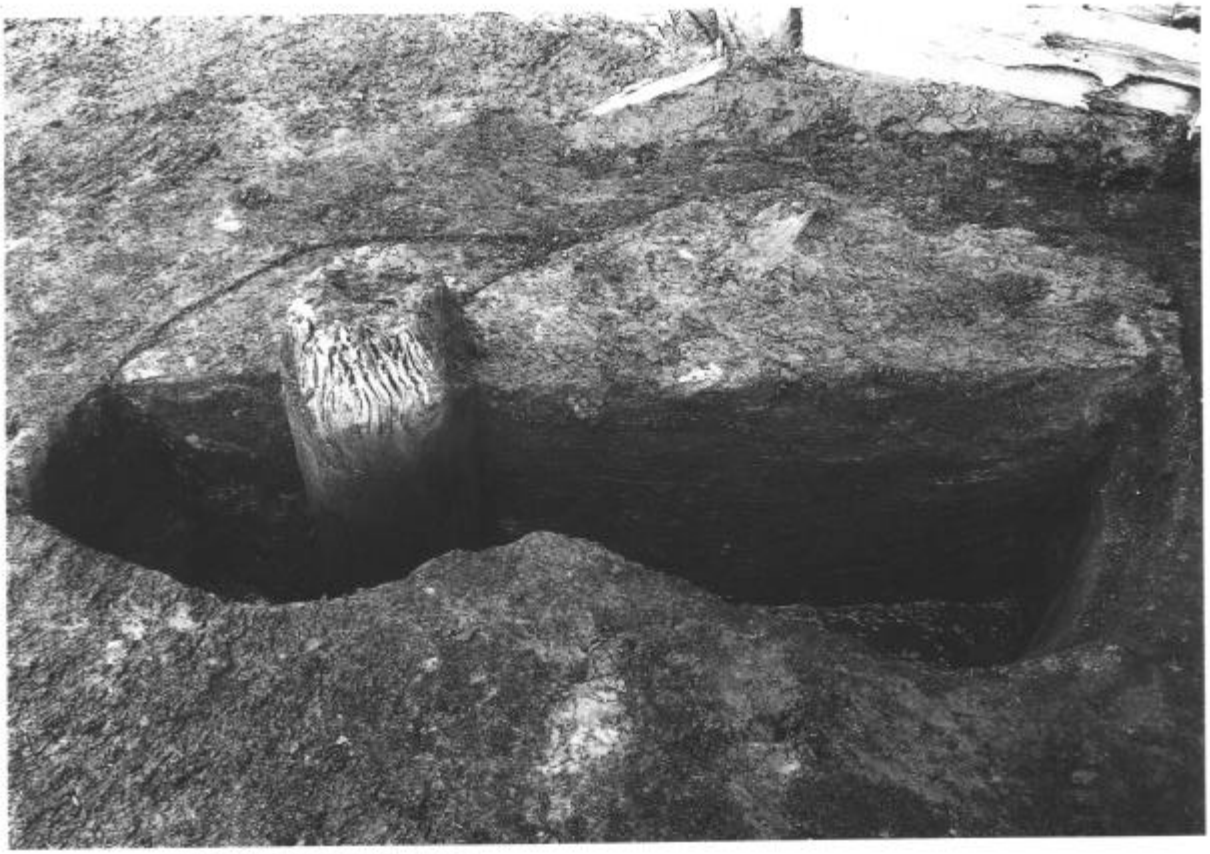


2　ＳＢ1210南側中央の柱（西から）

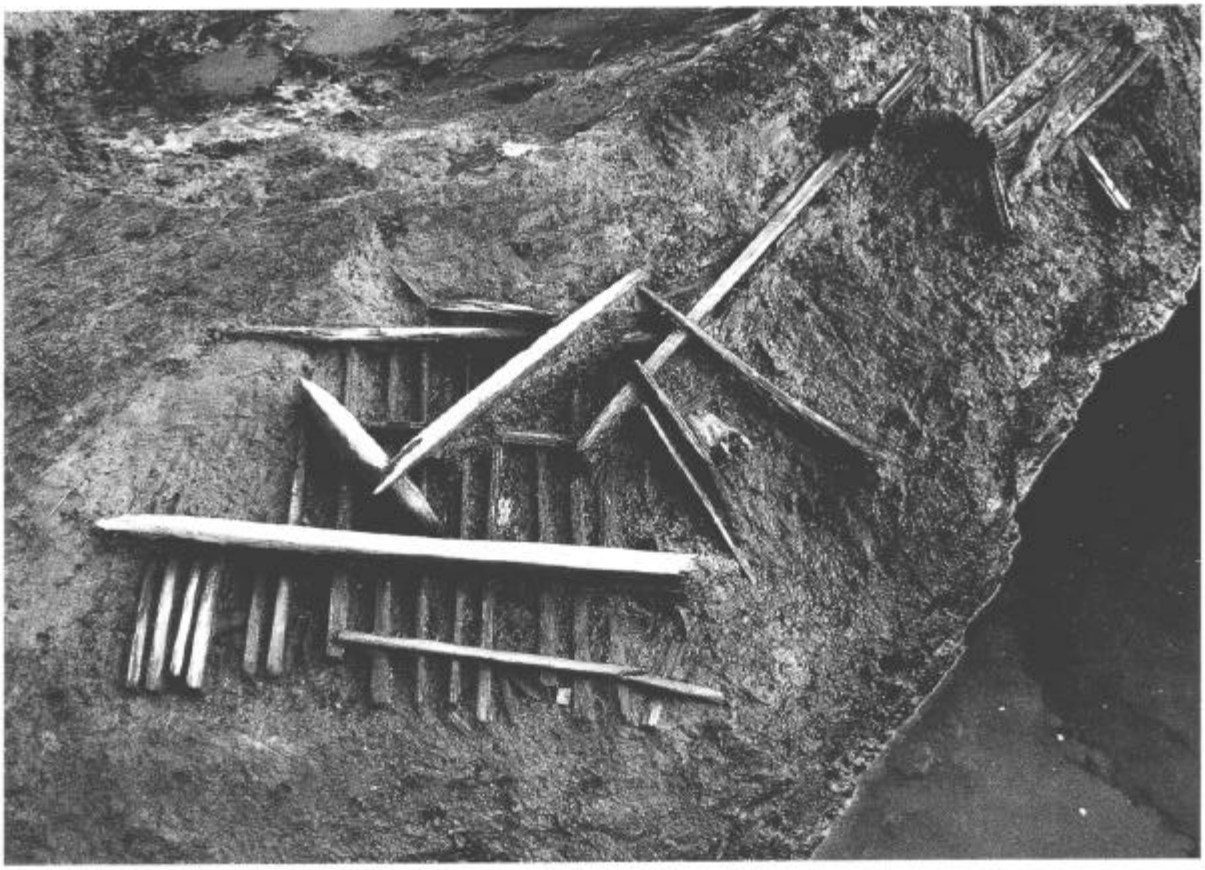
図版16　第112次調査



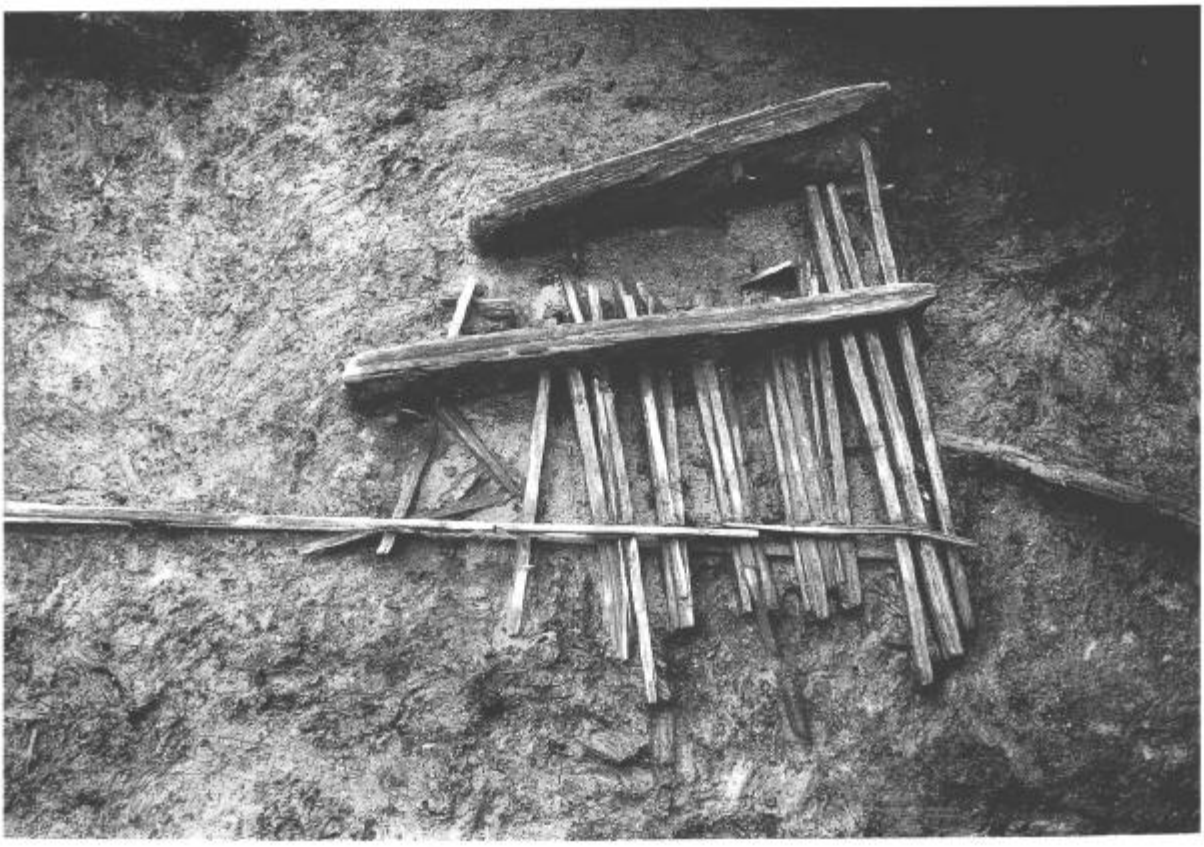
1　ＳＢ1203とＳＢ1207の南西隅柱（東から）



2　ＳＢ1203西妻柱とＳＫ1212（南から）



1　櫓状建物の北にある木組（北東から）



2　櫓状建物の南にある木組（北から）

図版18　第112次調査

1　ＳＤ1145（西から）

2　同上東端の土層（南西から）

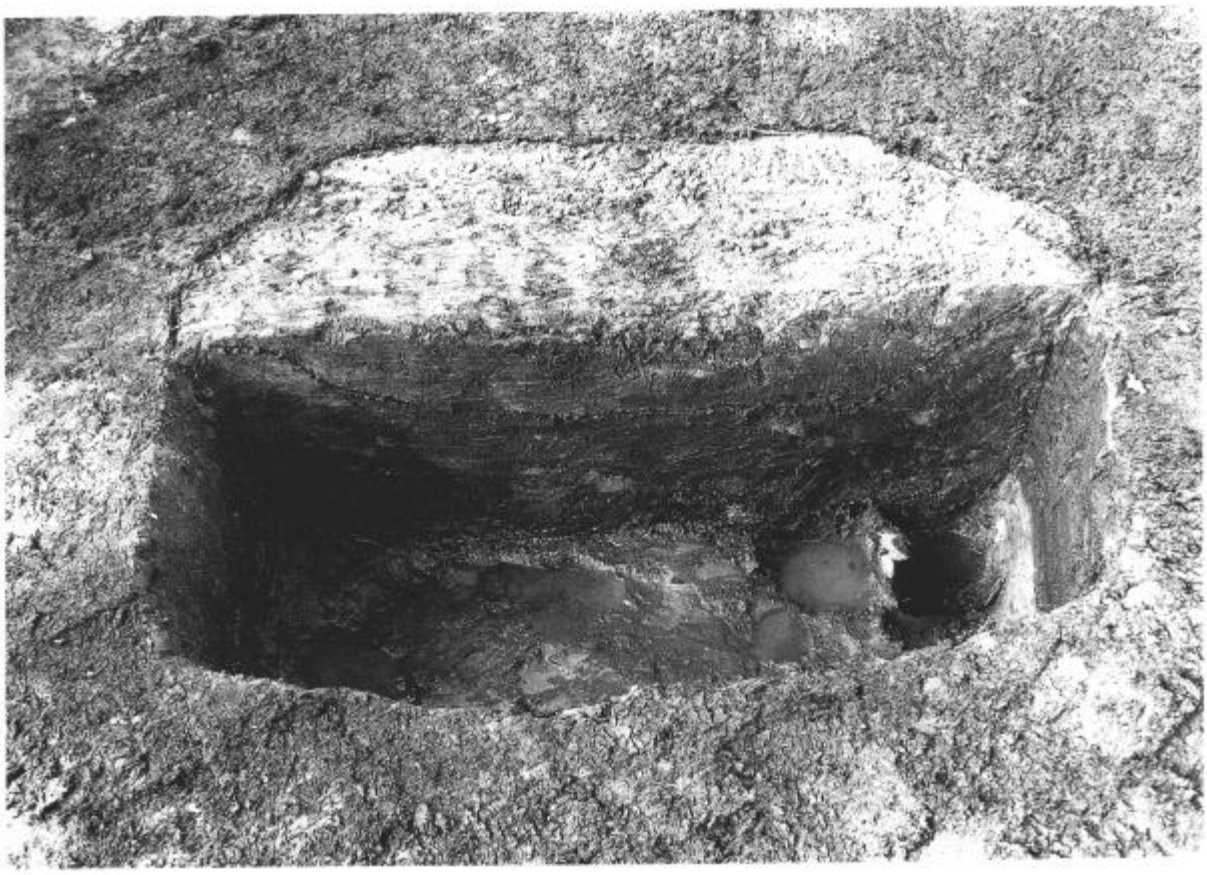
1　ＳＤ1145底部の丸太材（南から）

2　ＳＸ1202木道（東から）

図版20　第112次調査

1　ＳＫ1024・1025（東から）

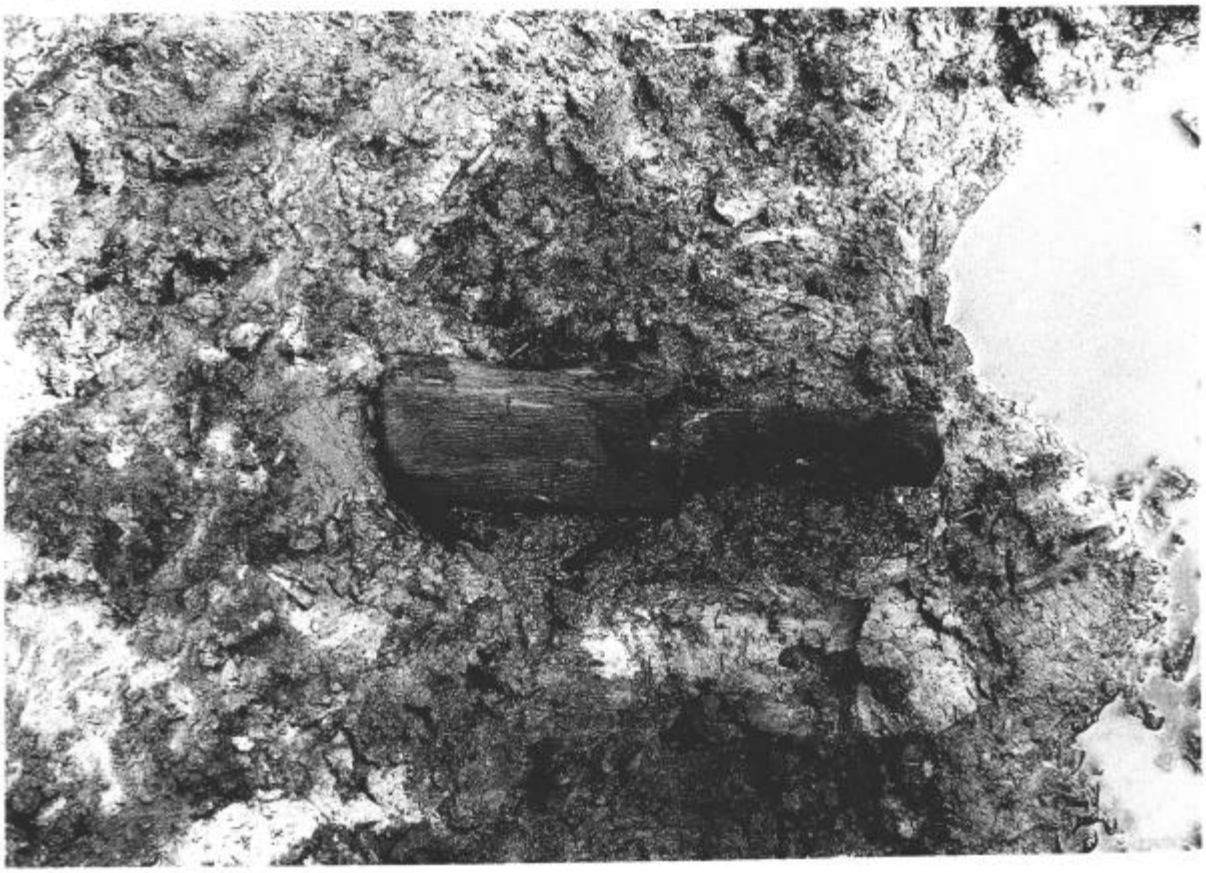
2　ＳＫ1024・1025（南西から）



1　ＳＫ1211（南から）

2　ＳＸ1206土層断面（西から）

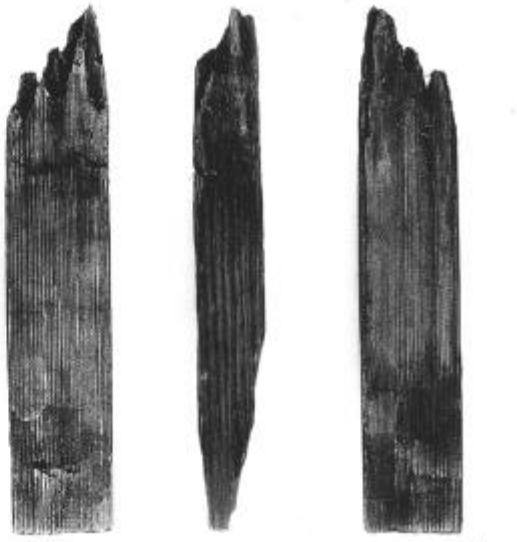
図版22　第112次調査



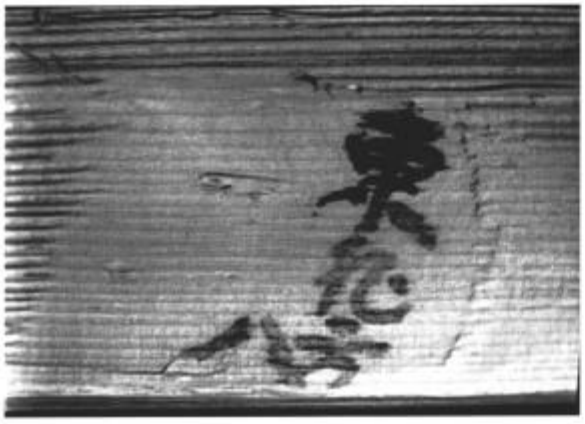
1　ＳＤ1145内横槌出土状況

2　曲物出土状況

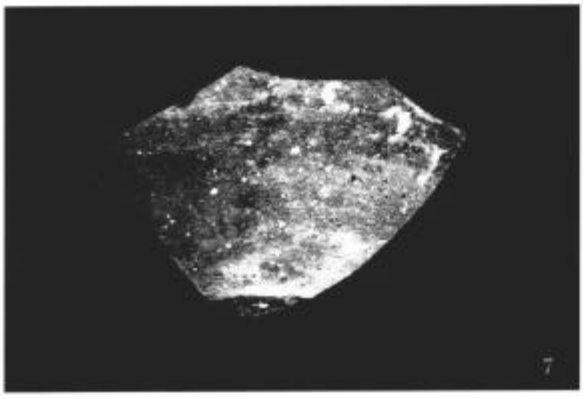
1　2　3



4



5



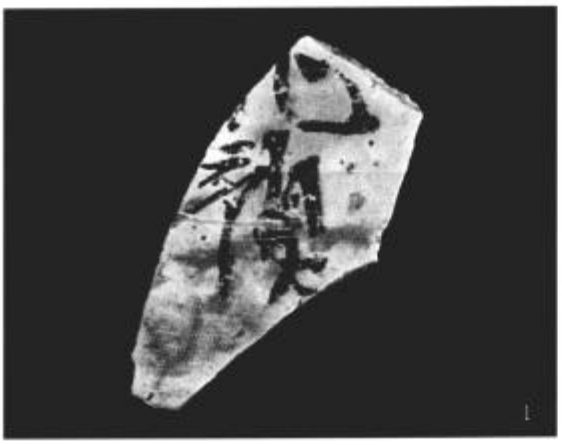
7

6

8

1～5　SB1200　6～8　遺構外

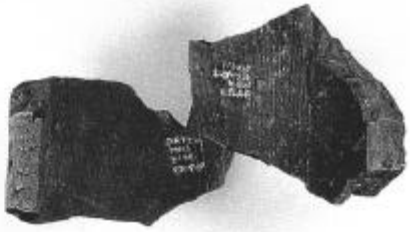
図版24　第111次調査　遺　　物（2）


1

2

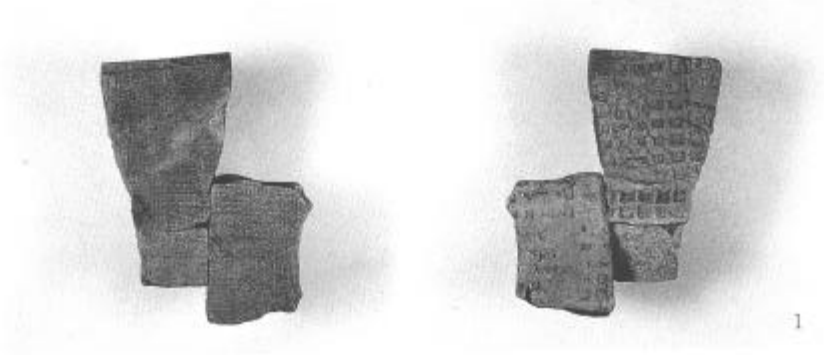
3

4

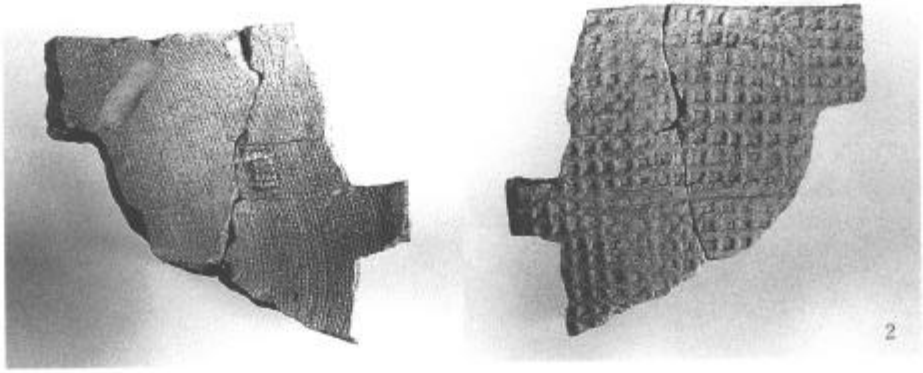

5

6

1～6　遺構外

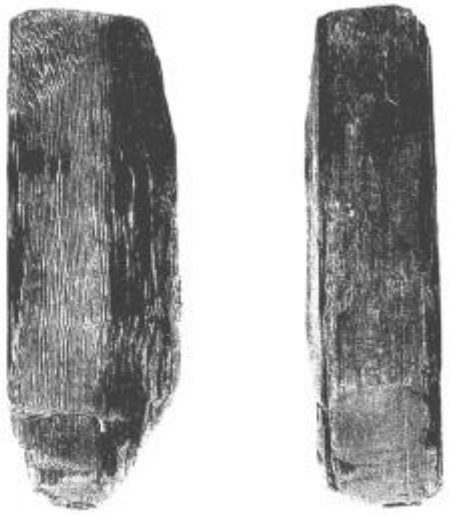


1



2

3

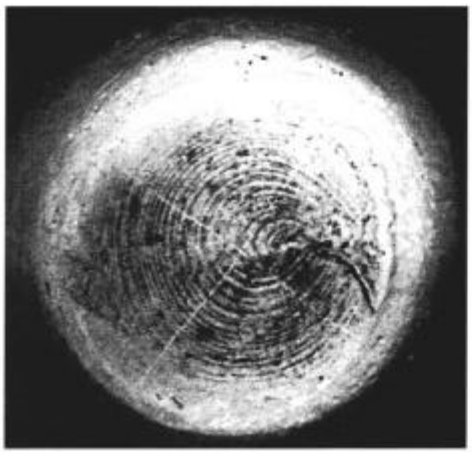


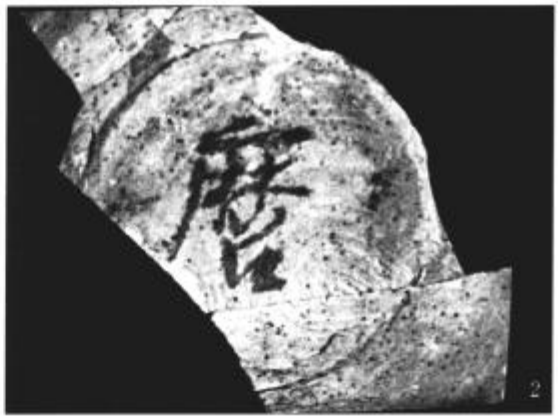
4

1・2　SB1203・1210　3・4　SB1208

図版26　第112次調査　遺　物（4）

1





2

4

3

5

6

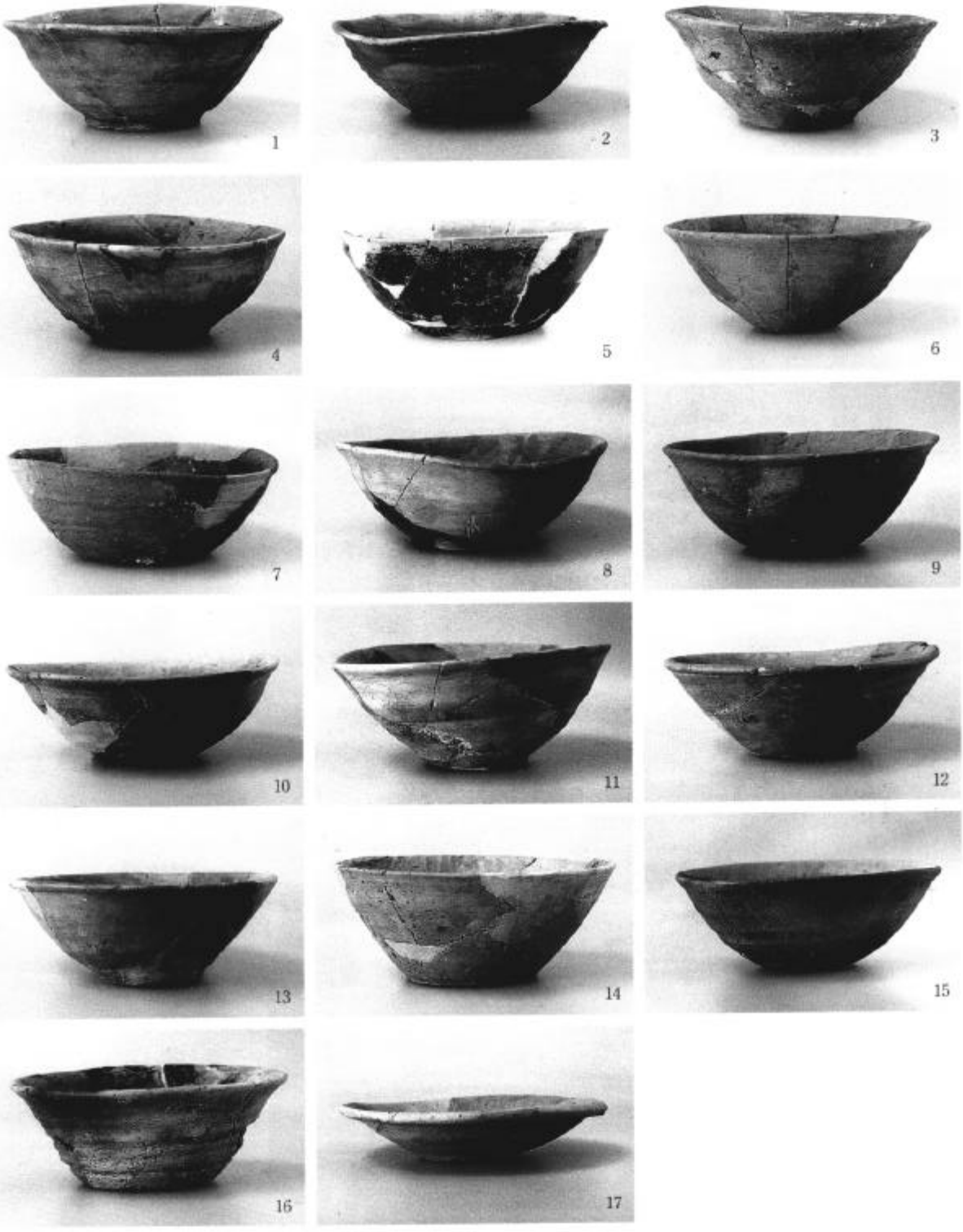
7

8

9

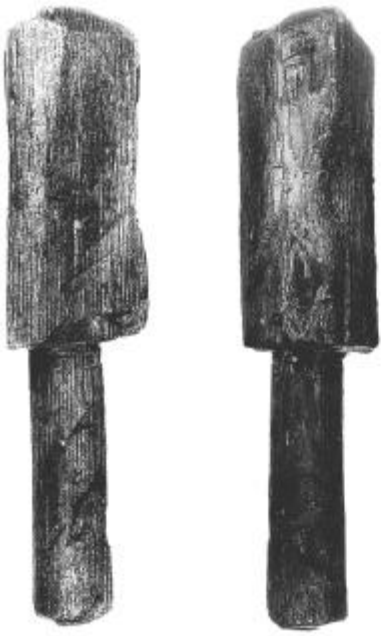
10

1～10　SD1145



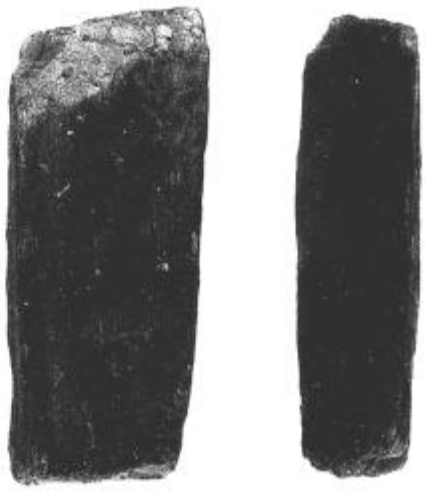
1～17　SD1145

図版28　第112次調査　遺　物（6）



1

2



3

5

4

1～4　SD1145

1

2

3

4

5

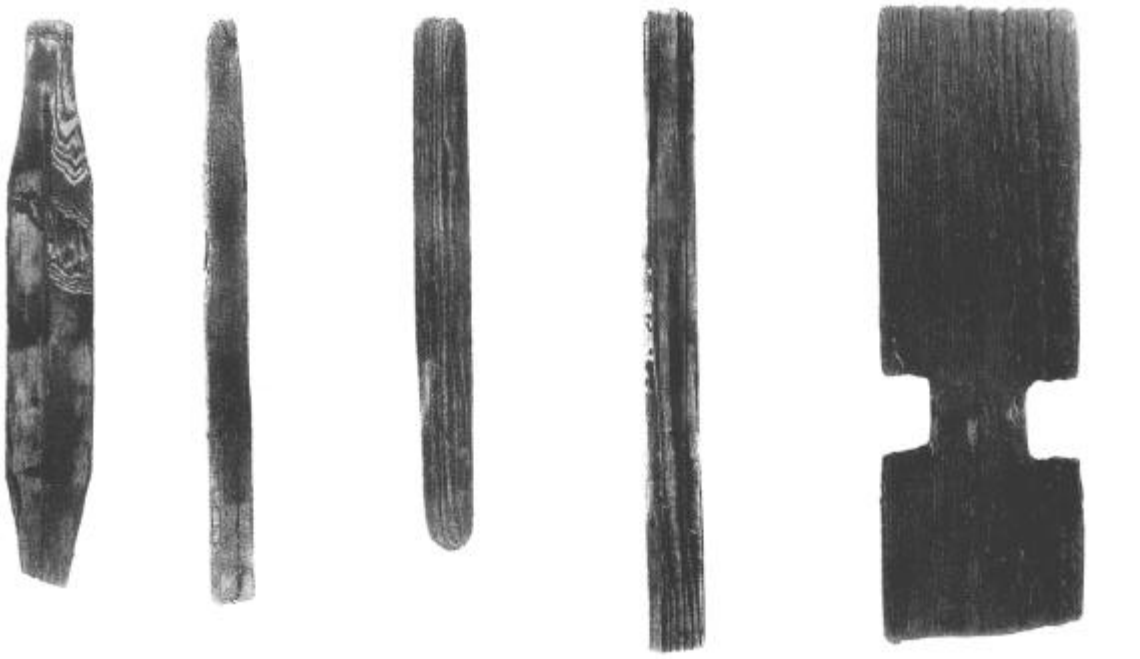
6

7

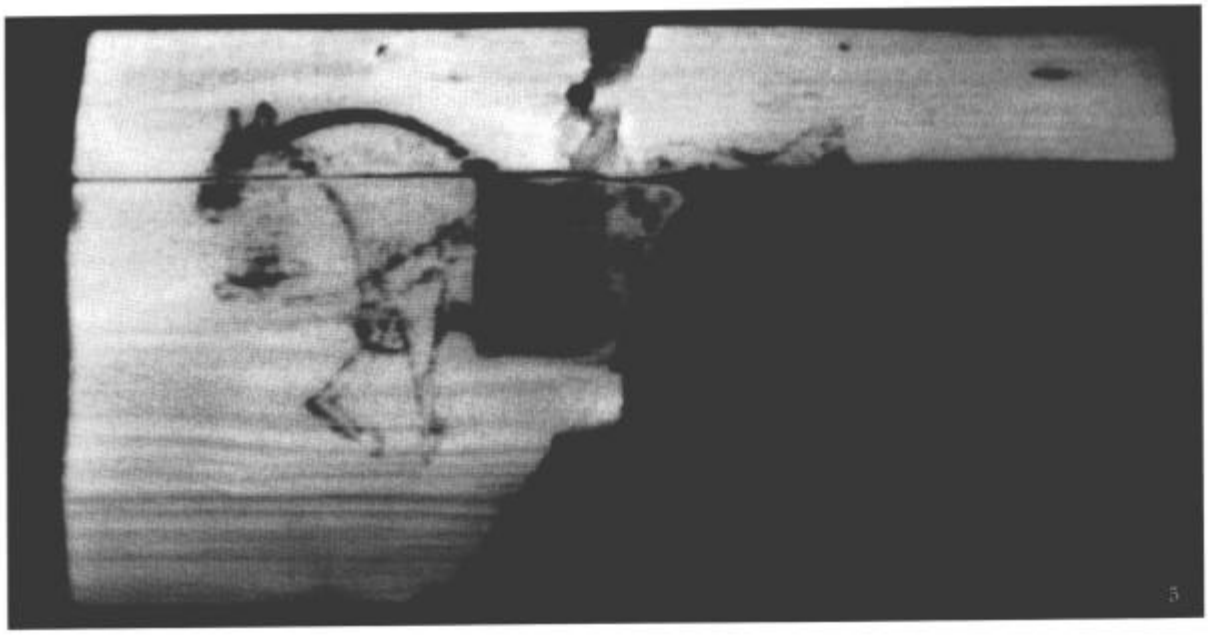
8

1～8　SD1145

図版30　第112次調査　遺　物（8）



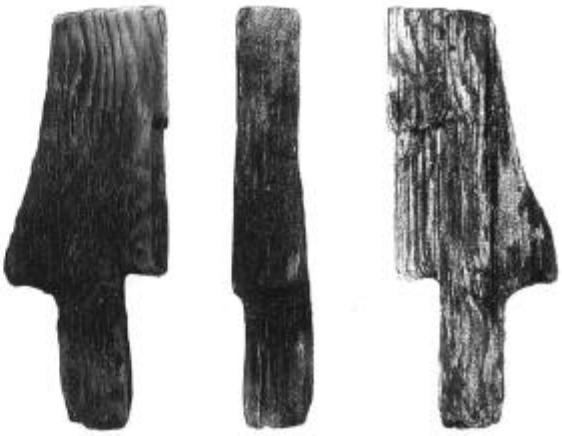
1　2　3　4



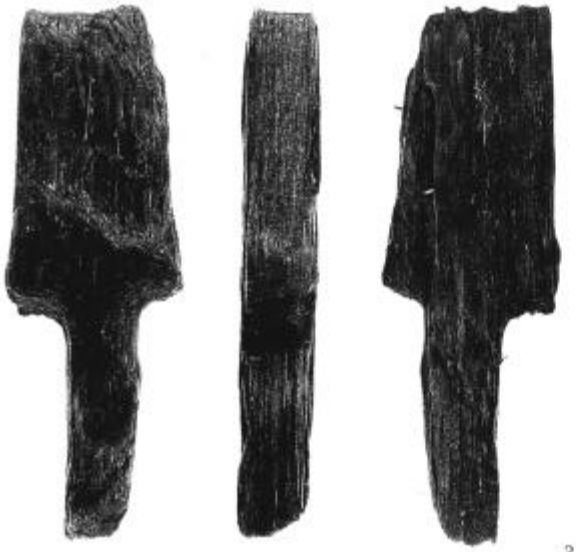
5

1～5　SD1145

1

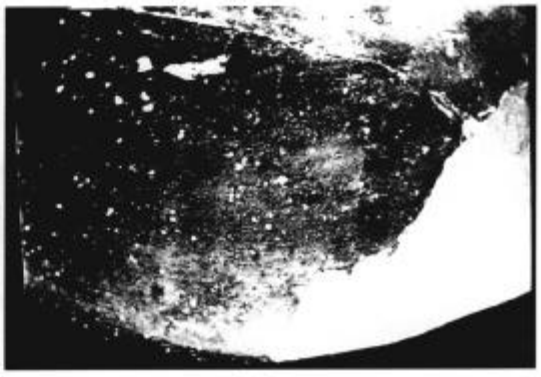


2



3

4



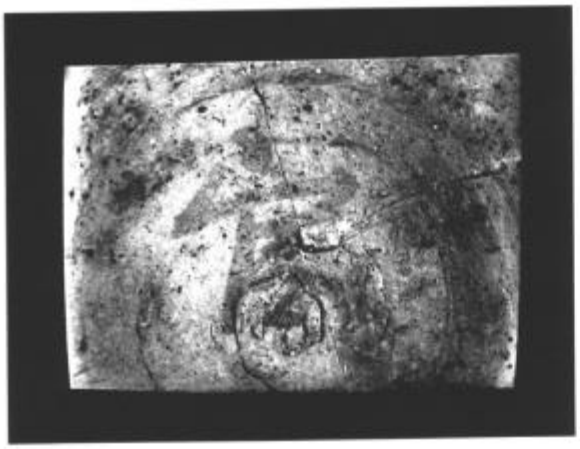
5

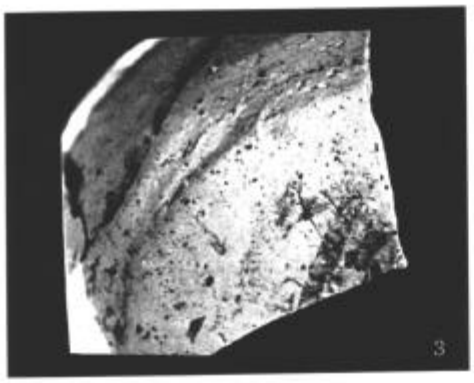
1・2　SX1204　3　SK1205　4　SK1212　5　SX1206

図版32　第112次調査　遺　　物（10）

1

2





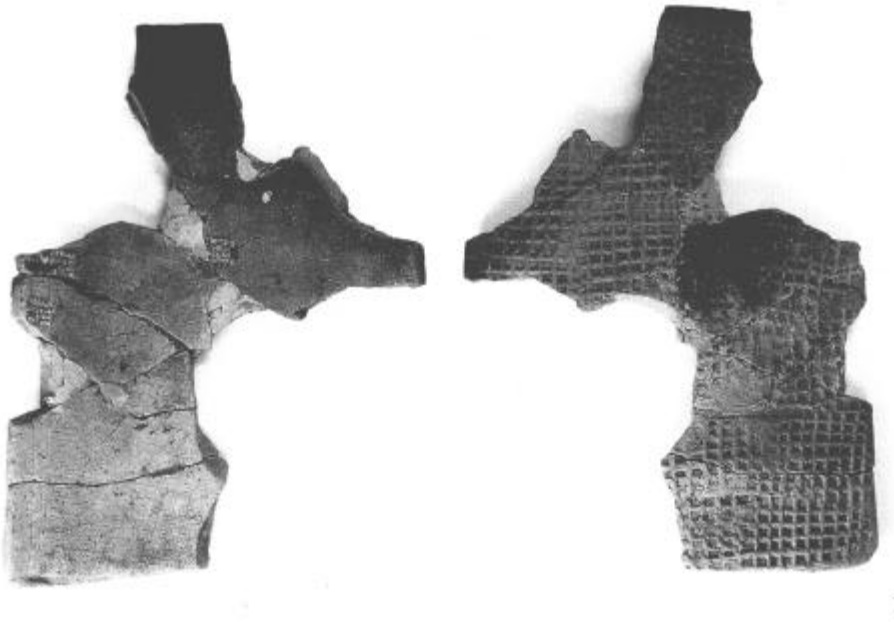
3

4

5

6

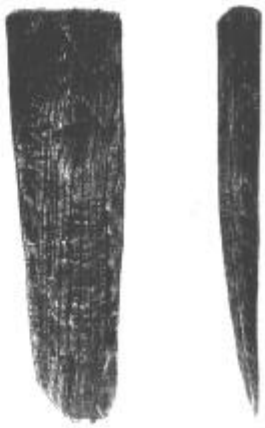
1－6　SX1206



1

2

3



4

5

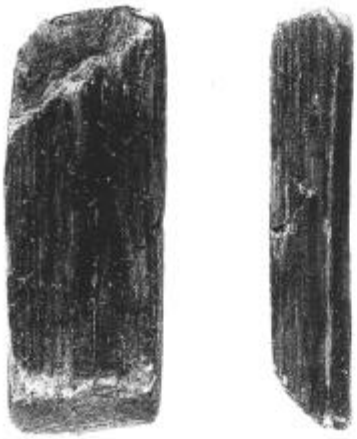
6

1～6　SX1206

図版34　第112次調査　遺　物（12）

1

2



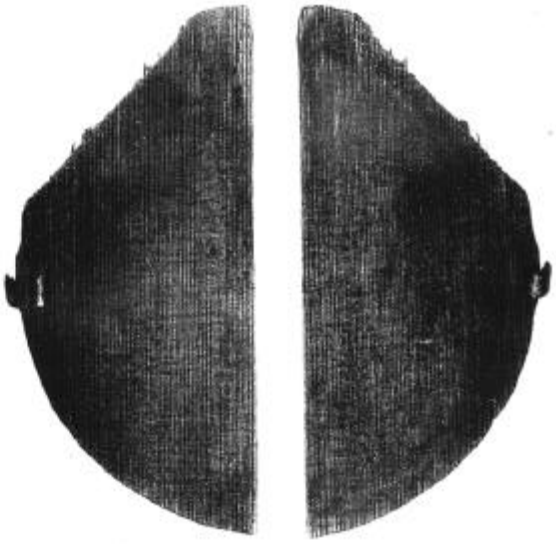
3

4

5

1～5　SX1206

1



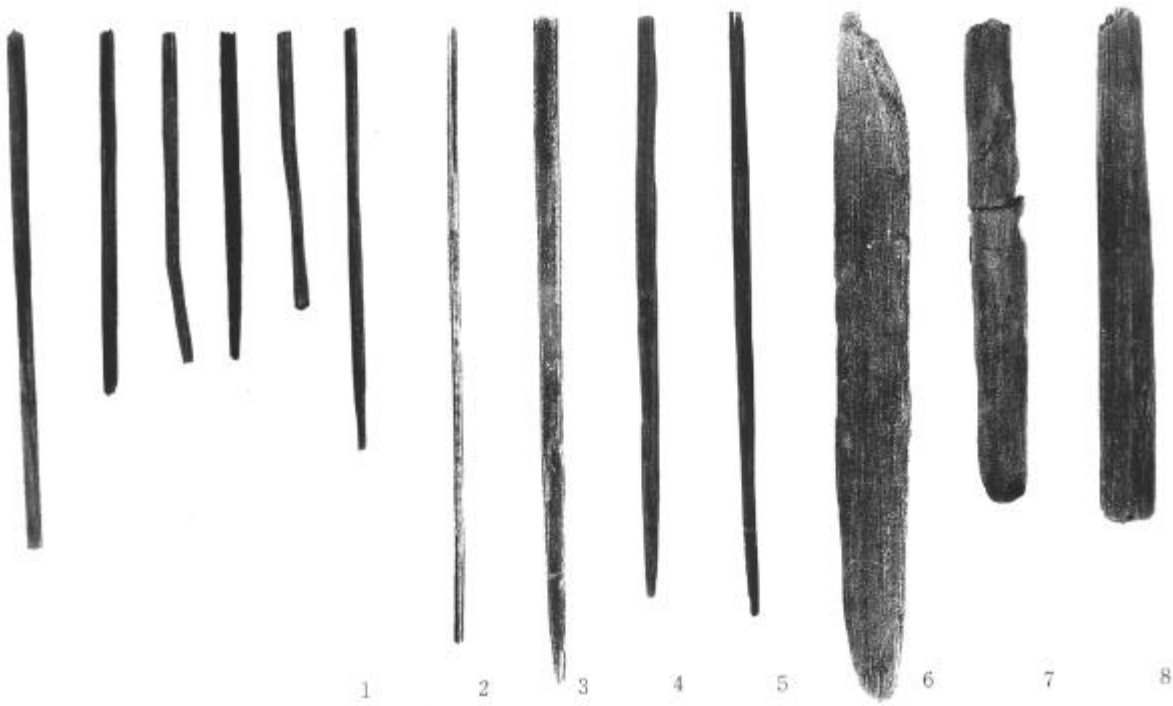
2

4

3

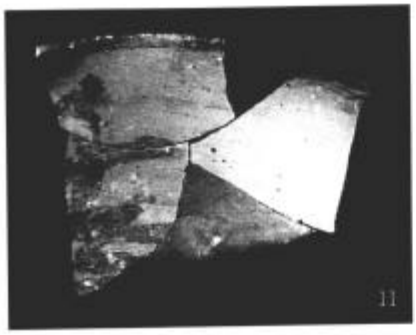
1～3　SX1206

図版36　第112次調査　遺　　物（14）



9

10


11

12

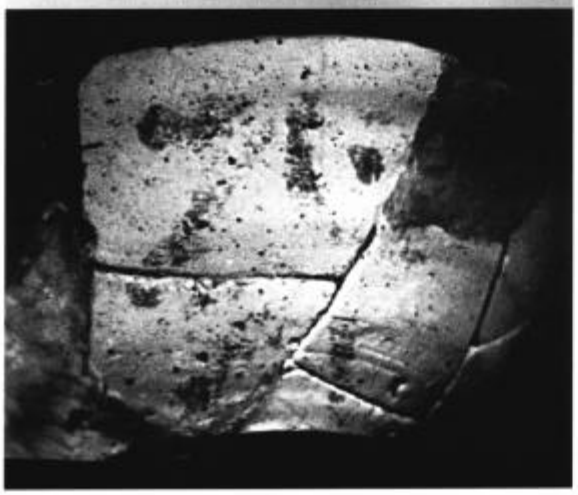
13

11

1～9　SX1206　10～14　遺構外

1

2



3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

1～14　遺構外

1

2

3

4

5

6

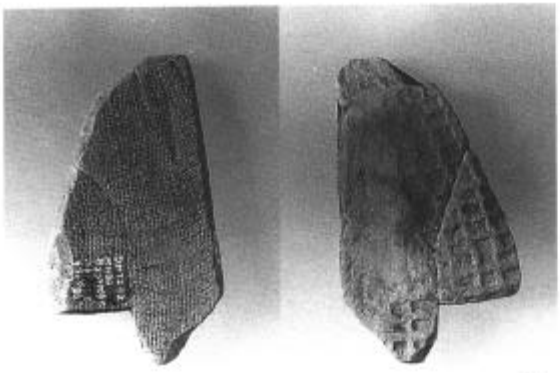
7

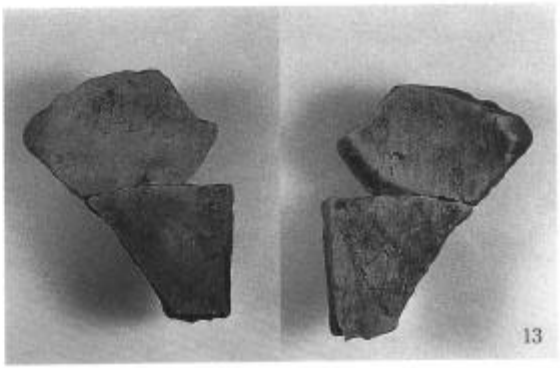
8

9

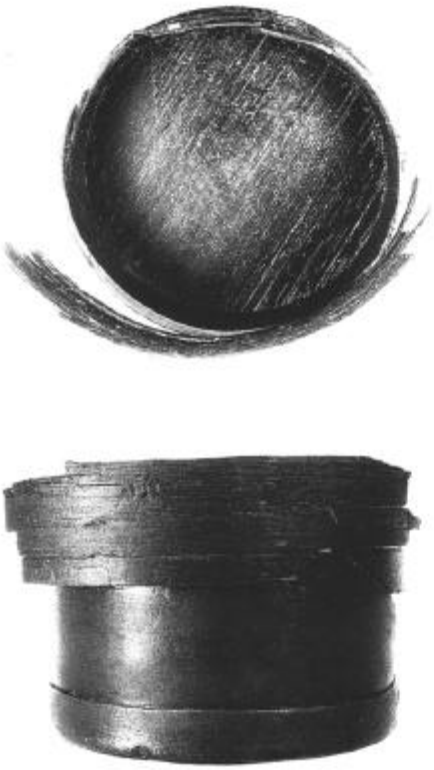
10

11


12


13

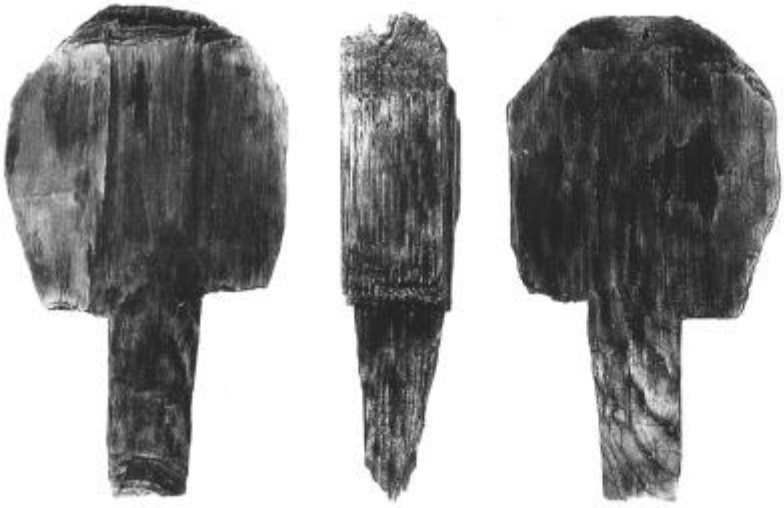
1－13　遺構外



1

2　3　4

5

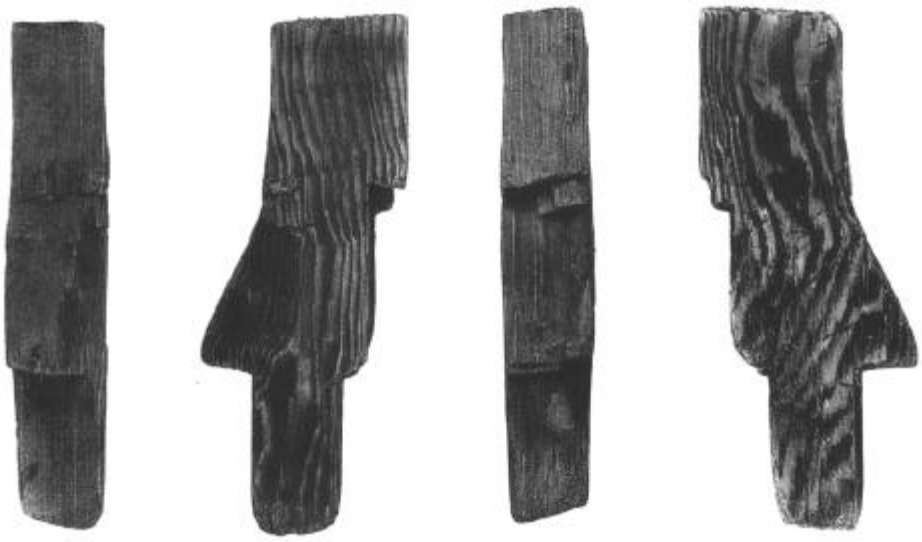


6

7

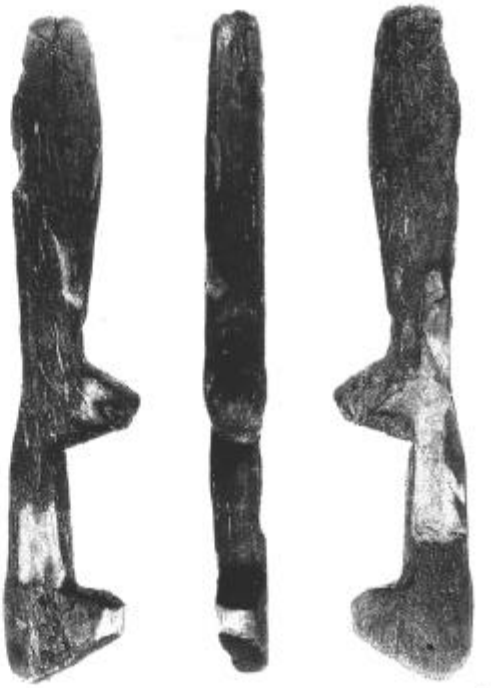
1～7　遺構外

図版40　第112次調査　遺　物（18）



1

2



3

4

1～4　遺構外

付編

払田柵跡第一二三次（外郭北門西北部）調査木簡

国立歴史民俗博物館

平川南

凡例

一　図版写真は原則として原寸であるが、八七号木簡は縮尺二分の一とした。詳細な数値については釈文下段を参照されたい。

二　釈文上段の数字は、払田柵跡調査事務所の木簡登録番号である。

三　釈文下段の数字は、木簡の長さ×幅×厚さを、（　）内は欠損を指す。単位はミリメートルである。

四　釈文に加えた符号は、木簡学会で定めたものを使用した。以下『木簡研究』より抜粋。

「　」　木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す（端とは木目方向の上下両端をいう）。

＜　木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。

○　穿孔のあることを示す。

□□□　欠損文字のうち字数の確認できるもの。

□□　欠損文字のうち字数が推定できるもの。

［　］　欠損文字のうち字数の数えられないもの。

、　合点

・　木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

〔　〕　校訂に関する注で、原則として釈文の右傍に付し、本文に置き換えるべき文字を含む場合。

カ　筆者、編者が加えた注で疑問の残るもの。

SX一二〇六

八三　「六月廿九日勘鮭□□□魚□□」　(213)×(27)×4

下端欠損。左側面原状。右側面は、二次的に木製品に利用した際の調整加工が認められる。裏面には墨痕なし。
文書木簡で、六月廿九日の書き出しをもち、鮭などの物品の勘検を行なったものである。

八四　□舶□　(207)×(12)×13

用途不明の木製品に加工され、本来の木簡面が部分的に失われている。

八五　□□　(削屑)

八五

八四

八三

SD一一四五

六六

・「北門□所請阿仁刀

・「□□□□」

(102)×(11)×2

両側面および下端が欠損。裏面の墨痕はほとんど失われており、判読できない。

本木簡は、〇〇所から発した請求文書と考えられる。木簡の両側面が欠けており、文書の差出部分は、字画の左半分を失なっているが、共伴した建築部材の墨書銘「東北方八」および後述する墨書土器「北預」・「北門」のそれぞれ「北」の字体を参照するならば、「北門□(所)」とみて間違いないと判断される。

なお、人名と思われる「阿刀」は、秋田城跡漆紙文書第一三号文書に「□(阿)刀部身×」の例が確認できる。(1)

六七

・所□□□言□□□」

・□□　大□松得世『合□』　」

(327)×(14)×5

下端および右側面は原状をとどめている。上端の片面（仮の裏面）から刃物を入れ、折っている。

本木簡は文書木簡と考えられる。

六八

・□□主□□

・　九□(月)廿三日

(145)×25×5

上端は両面から刃物を入れ折っている。下端は原状をとどめている。

本木簡は、ほとんどの墨痕が失われているが、文書木簡かと思われる。

六九

□　□

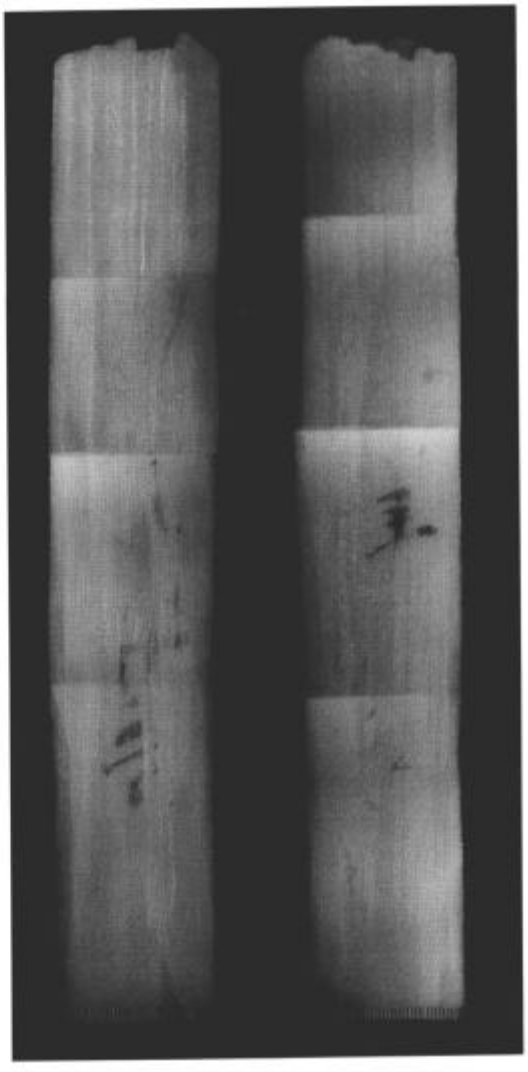
(60)×(10)×3

上端・下端とも斜めに切断されている。

八七（縮尺二分の一）

八九

八六



八八

墨書土器

○「一少隊御前下」

「少隊」については、払田柵跡の一九三〇年の「ホイドスズ」井戸脇より出土した木簡に「少隊長」がみえる。(2)

・「飽海郡隊長解　申進□□□□（事カ）」

・「　六月十二日少隊長春日□継」　　294×29×7

隊長は軍防令軍団大毅条に規定のある隊正（五十長）のことである。ただし、少隊長の用例は史料上にみあたらない。

○「北門」

○「北預」

「北預」は〝北門預〟のことを意味していると考えられる。預は、〝一般的に長官の下にある職〟であった。例えば、中務省の侍従所の場合、別当に相当する所監の下に預が置かれた。(3)また、預は、部門担当者という場合もある。「北預」はおそらくは北門造営にあたり、その長官の下におかれた職または北門造営担当者という意のいずれかを指すものであろう。

ところで、八六号木簡「北門所」、墨書土器「北門」「北預」および建築部材墨書「東北方八」の「北」の字体は、原秀三郎氏の論考「倉札・札家考」(4)中に紹介されている兵庫県高砂市曽根町塩田遺跡出土の墨書土器「札家」の「札」と酷似している。原氏によれば、ミヤケや荘園の管理や経営において、倉札あるいは倉案と呼ばれる木簡が記録として保管される場所としての家屋が墨書土器にみられる「札家」と呼ばれた可能性があると指摘している。しかし今回の払田柵跡の一連の「北」の字体は、本文中の挿図に示した李柏文書（四世紀前半）に類例がある。この李柏文書は王義之が活躍した南北朝の時期に肉筆の行書として我が国の古代の書をみる上で、重要な資料である。

李柏文書および今回の払田柵跡の一連の資料にみえる「北」の字体は塩田遺跡の墨書土器が「札家」ではなく、「北家」である可能性が高いことを示している。「北家」の類例は、新潟県和島村八幡林遺跡出土の墨書土器「北家」「南家」(5)などをはじめ、数多く存在するのは周知のとおりである。

本調査は、払田柵外郭北門西北部に関わるものである。木簡出土遺溝は櫓状建物の造営に伴なう溝および材木塀北側の溝である。北門地区の調査において、第八六号木簡に「北門所」、墨書土器に「北預」と記されていた。このことは払田柵跡外郭北門が、当時も「北門」と称されていたことを裏づける資料であるといえる。しかも、北門造営にあたり、おそらく〝造北門所〟が設置され、〝預〟職がその任務を担当したことが判明したといえるであろう。

また、本調査区から出土した一連の木簡が北門造営と関わる性格をもつものであるとすると、本調査のすぐ東側で昨年出土した四八点の木簡についても、北門造営との関わりを考えていく必要があるだろう。

木簡の検討にあたり、熊田亮介氏（秋田大学）、三上喜孝氏（東京大学院生）に御助力いただいた。

註

(1) 秋田城跡調査事務所『秋田城出土文字資料集Ⅱ』一九九二年。

(2) 平川南「払田柵跡」（木簡学会編『日本古代木簡選』一九九〇年）。

(3) 菊池京子「「所」の成立と展開」（『史窓』第二六号　一九六八年）。

(4) 原秀三郎「倉札・札家考」（『木簡研究』第八号　一九八六年）。

(5) 和島村教育委員会『和島村埋蔵文化財調査報告書　第3集　八幡林遺跡』一九九四年。

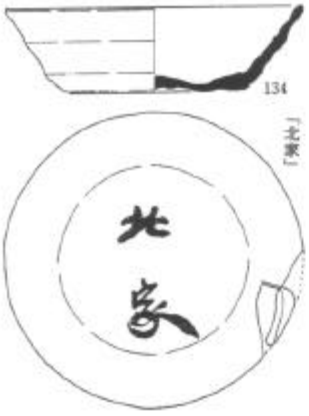
7．兵庫県高砂市塩田遺跡
墨書土器

2．「東北方」建築部材墨書銘

1．「北門圏」86号木簡

3．「北預」墨書土器

4．「北門」墨書土器
1～4　払田柵跡出土



8．新潟県八幡林遺跡
墨書土器「北家」

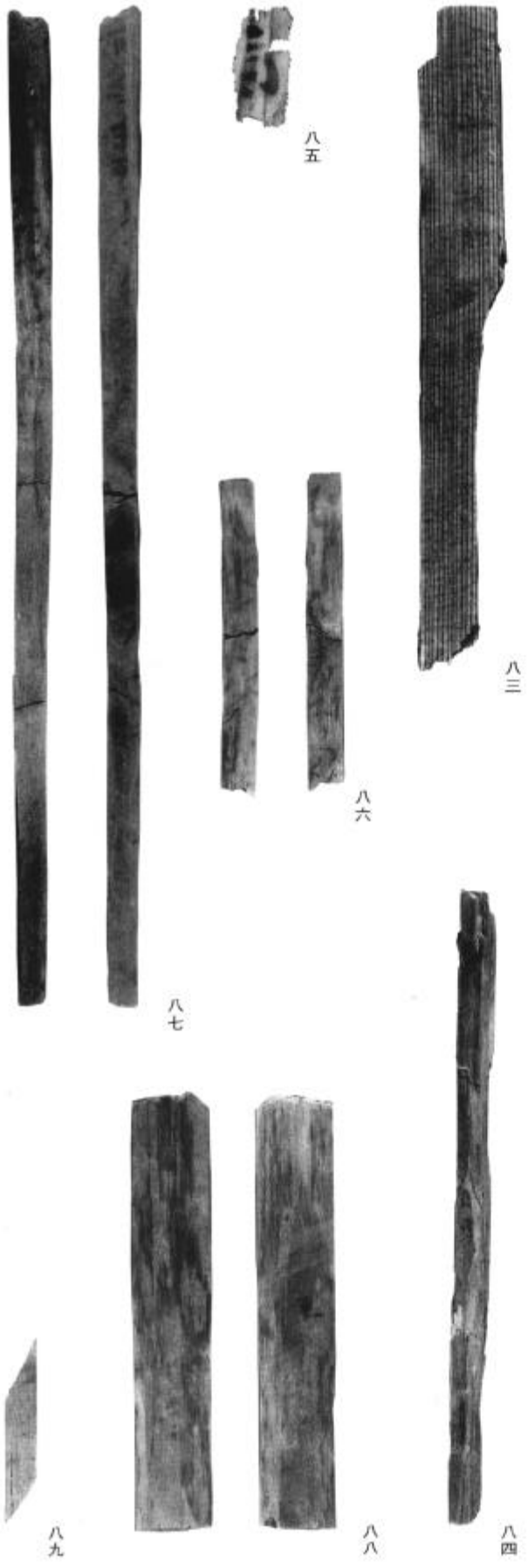
9．「門」の字体
『五体字類』より

6．李柏文書〔龍谷大学所蔵〕
中国楼蘭出土　4世紀

5．僧正美書状〔正倉院文書〕
天平宝字6年（762）

図1　「北」および「門」の字体

木簡外形写真（縮尺二分の一）



李柏文書の「北」筆順模式図

建築部材墨書「北」

86号木簡「北」

墨書土器「北預」

図2　払田柵跡「北」の字体